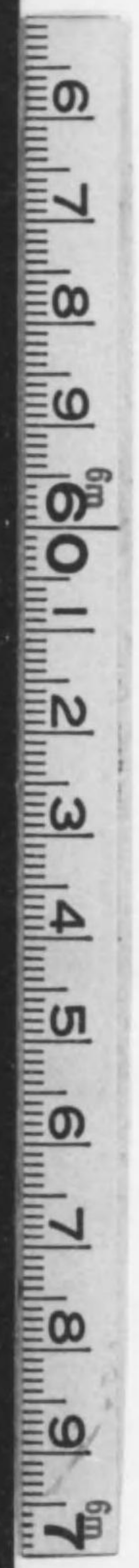


續國譯漢文大成

文學部 六十九

309  
65

入  
紙



始



續國譯漢文大成

吉田徳郎氏

寄増本

文學部第六十九册 (第十八帙の二)

陶淵明集



309  
65

陶淵明集 目次

緒言.....一七

卷一

詩四言

停雲四章并序.....一  
 時運四章并序.....六  
 榮木四章并序.....二  
 贈長沙公四章并序.....一五  
 酬丁柴桑二章.....二〇

卷二

詩五言

目次

答龐參軍六章并序.....三  
 勸農六章.....七  
 命子十章.....三  
 歸鳥四章.....二〇

蘇國霸英文大奴

形影神三首并序……………四  
 形贈影……………四  
 影答形……………四  
 神釋……………五  
 九日閒居并序……………五  
 歸田園居六首……………五  
 問來使……………五  
 遊斜川并序……………六  
 示周續之祖企謝景夷三郎……………七  
 乞食……………七  
 諸人共游周家墓柏下……………七  
 怨詩楚調示龐主簿遵鄧治中……………七  
 答龐參軍并序……………七

五月旦作和戴主簿……………八  
 連雨獨飲……………八  
 移居二首……………八  
 和劉柴桑……………八  
 酬劉柴桑……………九  
 和郭主簿二首……………九  
 於王撫軍座送客……………九  
 與殷晉安別并序……………九  
 贈羊長史并序……………九  
 歲暮和张常侍……………十  
 和胡西曹示顧賊曹……………十  
 悲從弟仲德……………十

卷三

詩五言

始作鎮軍參軍經曲阿作……………二  
 庚子歲五月中從都還阻風於規林……………二  
 辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗中……………二  
 癸卯歲始春懷古田舍二首……………二  
 癸卯歲十二月中作與從弟敬遠……………二  
 乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪……………二  
 還舊居……………二  
 戊申歲六月中遇火……………二  
 乙酉歲九月九日……………二

庚戌歲九月中於西田穫早稻……………二  
 丙辰歲八月中於下潁田舍穫……………二  
 飲酒二十首并序……………二  
 止酒……………二  
 述酒……………二  
 責子……………二  
 有會而作并序……………二  
 蜡日……………二  
 四時……………二

卷四

詩五言

擬古九首.....一八一

雜詩十二首.....一九五

詠貧士七首.....二一〇

詠二疏.....二二二

詠三良.....二二三

卷五

感士不遇賦并序.....二四九

閑情賦并序.....二六二

卷六

桃花源詩并記.....二六七

晉故西征大將軍長史孟府君傳.....二九三

五柳先生傳.....三〇一

詠荆軻.....三二六

讀山海經十三首.....三二八

挽歌詩.....三四一

聯句.....三四六

歸去來兮辭并序.....二六

讀史述九章.....三〇四

夷齊.....三〇四

箕子.....三〇五

管鮑.....三〇六

程杵.....三〇七

七十二弟子.....三〇九

屈賈.....三二〇

卷七

韓非.....三二二

魯二儒.....三二三

張長公.....三二四

扇上畫贊.....三二七

尚長禽慶贊.....三三二

五孝傳贊.....三三三

天子孝傳贊.....三三三

諸侯孝傳贊.....三二七

卿大夫孝傳贊.....三三一

士孝傳贊.....三三五

庶人孝傳贊.....三三九

卷八

與子儼等疏.....三五五

祭程氏妹文.....三五二

祭從弟敬遠文.....三五五

自祭文.....三六一

# 陶淵明集

釋 清 潭 注 解

## 緒 言

陶淵明とは如何なる人ぞ、其の誤り傳ふる人は謂ふ、粗慢放達の人と、詩酒逸遊の人と、崇敬の念を以て之に對せざる者もある、明治十年頃天台座主と爲りし光映師が著はせる「棘樹燕語」と題する本を読む、其の中に於て淵明を罵倒して完膚無きに至る、其の意は、淵明は眞の憂國の士にあらず、清談者流一輩人と同一なりと斷ず、淵明が彭澤令と爲り乍らツマラン奴とは言へ兎に角上官が巡視に來れば迎へに出る位は禮式として普通と爲す、然るに淵明は傲慢にも、小兒輩に頭を屈するなどは、吾が出来得べき事にあらずと信じ、忽ち其の令尹を辭したるは眞に憂國の念も無く、又斯民を治めんと欲する念も無く、所謂一身の爲め自由を喜び、放達を娛む者と同一人物と異ならず、是れ我が淵明を喜ばざる理由と論斷す、余を以て之を觀れば、光師は「折腰向三鄉里小兒」と言へる古來傳説のままの語を直信したる結果の議論にして、淵明が一代を通じての批評にあらずと信す、

折腰すべき者には折腰し、上官たる者には叩頭す、淵明何ぞ此の禮を知らざらんや、而かも事此に出でざるは、折腰するに勝へざる郷里の小兒がキザの態度を以て此に臨みしなればなり、是に於てか令尹の椅子を捨て、歸去來を歌うて去る、淵明の淵明たる性格此に在るなり、五斗米の爲めには本心でない追従輕薄の卑言を吐くのが、俗吏陋夫の状態であるなり、此の卑言を吐く勝へ難きに因つて令尹を罷め去る、是れ公明の道なり、公明の道を覆うて以て五斗米に喰ひ附くは俗吏陋夫の事なり、淵明の事にはあらざるなり、『練樹燕語』の論の如き、半文の價値を有せず、淵明集を通覽するに、官遊の時代も、田園の時代も、而して壯年、而して老年、其の志は終始一貫、窮達榮衰に誤られざることを知る、書試に淵明其人一代を通じての徳を掲げて見ん、慈親の爲と云ふ念の離れざることを、曰く故舊に同情篤かりしこと、曰く道を學んで寸陰を惜みしこと、曰く讀書を好めること、曰く自然を愛すること、曰く出處進退の頗る公明正大なること、細かに名目を設くれば尙多あるべけれども、大略右の六條で其人の尊崇すべき徳を具して居ることが知れる、晉室の亡びたるは恭帝の元熙二年、淵明正に五十六、是れより後七年、劉宋の元嘉四年、六十三を以て卒去す、淵明が本自然を貴ぶと云ふ所へ氣が付かなかつた人ならば、余は五十六の時、自刃した事と思ふ、其の人忠義の志は甚だ厚かりしも、自然に背き、天然に違ふ事を爲すを嫌ふ、例へば熱の如き苦痛も、水を以て之を消滅することに勉む、是の故に其の所懐を吐く詩に於て其の志は明白と爲す、

妙語自然、渾然元化のもの多く、慷慨悲憤、露膽張目のものは全く無し、祭酒と爲り、鎮軍參軍と爲り、令尹と爲りたる人、慨して以て慍し、缺壺口を撃つことを知らざる道理なし、然るに其の憂憤の態度を露はさずして恬澹閒靜の生涯を終り、隴畝の民と稱したることなどは、儒を以て骨とし、莊老を善學して肉とせられしことに由る、余は意ふ、淵明に倘し此の學問無かりせば、其の人憂憤の中に自ら身を傷め、天然を全うせざりしものと、晉宋の間、彼の清談の徒を見ると、表面は清談にして、側面は濁慾の人なり、内外表裏透徹して眞に是れ崇高なるは淵明其人を除き他に其人無し、唯六朝間第一の人物なるのみならず、洵に千古に通じての潔士と謂ふ可し、余は既に其人を崇敬すると同時に、其詩に對しても亦一種言ふべからざる崇敬の念を以て讀むものなり、彼に於て淵明が詩を追慕する者の多きは論勿し、我に於て近時豊後の廣瀬淡齋は非常に淵明を崇敬して一祖の名を之に贈りし位なり、淡齋の前後に在つて誰か之を崇敬せしやは余の寡聞未だ之を知らざるなり、由來我邦の詩人は品格の高卑を問ふよりは、物體の巧拙を論するの癖あり、極めて惡癖と謂ふ可し、大詩人の出でざるは是に職由するなり、然るに淡齋先生は著眼を巧拙に用ゐずして、高卑に用ゐられたるは其人良に偉と謂ふべし、『遠思樓詩鈔』を善讀する者は必ず余が言の妄ならざるを知るべし、淵明の人と爲り業已に辨了す、是より淵明の詩に就て古今名家の批評頗る多し、其の批評に批評を加へて、初學者の爲め一助と爲さんと欲す、宋の蘇東坡、左の言あり、

吾於詩人無所好、獨好淵明詩、淵明作詩不多、然質而實綺、癯而實腴、自曹劉鮑謝李杜諸人、皆莫及也、

東坡居士と言へば李太白以來の才人、且大識見を有し、且大學力を有したる人なり、他人に於て容易に之を許す人にあらず、而かも是の如き言あり、抑も人の性情は箇箇別別にして、彼は好むも、此は好まず、彼の好む所を以て此に強ふべからず、此の好む所を以て亦彼に強ふべからず、菽を噉り藿を茹ふも、鼈と鰓煮を魚にするも、各の其の好む所に従ふのみ、誰か此の間に取捨するを得ん、然りと雖も詩文の道に就ての所好は飲食の所好とは大に異なる、其の好むと言ふに至るまでは容易のことにあらず、理想も卑く、學問も薄く、識見も無き人は、洵にツマラヌ物を好む、之に反し、學問も博く、識見も大に、理想も高き人は、其の好む所千萬世に涉りて略同一の門に歸宿するが如し、乃ち謂ふ、自分の性情と云ふ先天的のものも、達人の性情を見習うて行けば、自然と高潔なる性情と化するなり、習が性と變ずることは、聖人の教を待たずして明白に之を知るなり、是の故に東坡の如き達人が好む所の淵明其の人の詩は、佛徒が經典を崇敬する如く思はざるべからず、以下東坡の語に就て批評すべし、作詩不多は、淵明集に詩の少なきことを言ふ、淵明集は古來數本あり、梁の昭明太子編する所は七卷、北齊の陽休之編する所は十卷、『隋書經籍志』は九卷、『唐書藝文志』は五卷、而して下りて李公煥本十卷、何孟春本四卷、汲古閣本四卷、焦竑本四卷、張溥漢魏百二名

家本一卷、張爾公本四卷、毛晉綠君亭本詩一卷、文一卷、雜一卷、陶文毅本十卷、近來上海本には殊批本四卷、蘇東坡自寫刻本三本、要するに卷數は異同あるも、詩文に於ては諸本大差なし、全卷にて二百五十首位とすれば、之を千篇以上の作家に比するときは決して多作と言ふべからず、質而實綺、質は文飾せず、又陰澤せず、所謂性情の儘のこと、此の性情の儘を敍べるときは、大抵の人は詩としての形を爲さず、日常の挨拶と爲る、日常の挨拶とすれば、目に丁字無き舍丁馬夫と何ぞ擇ばん、鬼神を感動するは以ての外に屬す、然るに淵明の質のまま吐き出して實に綺、蓋か吐き出す糸、悉く綺ならざるは莫きに譬ふ、癯而實腴、癯は枯瘦して極めて味の無きもの、其の味の無き枯瘦せるものが、淵明の手から出づれば、實に腴で、即ち膏肥「ウルホヒ」の物と成る、自曹劉鮑謝李杜諸人、曹は魏の曹子建、劉は東晉の劉琨、鮑は宋の鮑照、謝は宋の謝靈運、李は太白、杜は子美、是の六子は三國より唐に至る間の支那文學史を飾る有數の大家なり、而かも東坡を以て之を觀れば、質にして實に綺、癯にして實に腴の評を下すこと能はず、皆莫及也、此の四字は如何にも大膽の如くなるが、此は是れ東坡が本心より出づるなり、質の勝る者は由來綺ならず、綺の勝る者は由來質ならず、癯なる者は腴ならず、腴なる者は癯ならず、曹劉鮑謝の四子は即ち是れなり、李杜の二子は千古の詩聖、其の特種の技倆は淵明と比すべきにあらざるも、癯而實腴の四字は淵明に譲らざるを得ず、東坡は又左の言あり、



所貴於枯澹者、謂外枯而中膏、似澹而實美、淵明子厚之流是也、若中邊皆枯、亦何足道、佛言譬如食蜜、中邊皆甜、人食五味、知其甘苦、皆是能、分列其中邊者、百無一也、此の淵明に對する評語も、前評と文字に相違は有ると雖も、其の意味は全く同一なり、外枯而中膏、似澹而實美、是れ何ぞ質而實綺、癯而實腴と異ならん、枯澹と云ふも、枯木竹石の如き血の無きものは詩にあらざるなり、枯に過ぎ、澹に過ぎるからなり、之に反し、膏中の膏、美中の美は人をして飽き易からしむるもの、所謂文字其の物が調和せざればなり、此の枯中に膏を求め、澹中に美を求めて、能く得らるるものは、淵明實に千古の一人なり、唐の柳子厚は、淵明を學んで稍や其の道に近づきし人なり、淵明子厚と並稱したるは、師弟を同列に置きしなり、佛言譬如食蜜、中邊皆甜、佛言とは『四十二章經』に説ける言なり、所謂調和法を説きしもの、蜜は中も邊も共に甜し、人食五味、知其甘苦皆是能、五味の甘であるか、苦であるかは、誰人も能く分判するが、分列中邊者、百無一也、此の中邊は食物の方へ係けずして、詩の方へ係けて見よ、澹中の澹、枯中の枯は、誰人も知ると雖も、枯中の膏、澹中の腴を知るは、百人中一人も之を知る者は無し、東坡先生が自から百人を超絶して居ることを示すものなり、自から和陶詩を作りて以て追慕の意を致す、後人何ぞ思を此に致さざるを得んや、尙宋元明清四朝の間諸大家の批評は多あり、其の觀察の方面も種種に涉ると雖も、茲に一一掲ぐるの煩に堪へず、之を要するに淵明の詩は左に記する二字の評語にて足る、

平澹 天真 自然 蕭散 深粹 高古 閒逸 精密 忠愛 道氣 野意

六朝間の詩人、大抵は剪紅摘翠、東塗西抹の徒のみ、然るに淵明一人は其の文字塗澤の非なるを知つて、之を眞性情より發し、而して取る所の材は『毛詩』『論語』『尚書』等の正經に據つて、傍門邪徑は全く入らず、洵に卓絶の才、特異の人と謂ふ可し、余は是より直ちに其の詩の講に及ばん、但し一言述べて置くことは、注本に就てなり、余の寡聞なる、淵明集に就て清朝已前に注本ありしを見ず、黃文煥の『陶詩析義』吳瞻泰の『陶詩箋注』は多く流行せず、公が後裔と稱する清の道光年に陶澍文毅公が『靖節先生集』十卷は多く流行すと雖も、文字の同異、作詩の年次のみに力を勞し、本源の詩注に於ては全く暗黒なり、今時石城顧嶠が『陶集發微』、是より先き嘉慶年溫謙山が『陶詩彙評』、是の二書も陶文毅と難兄難弟の間に在り、要するに専門の學者が參攷に供するのみ、初學者に於ては何等の功も無きもの多し、考證學の弊が詩に及びしもの惜むべしと雖も、時代思潮亦止むを得ずと知る可し、

陶淵明集卷一

詩四言

停雲

四章 并序

停雲 四章 并序

停雲思親友也。樽湛新醪。園列初榮。願言不從。歎息彌襟。

停雲は親友を思ふなり、樽に新醪を湛し、園に初榮を列ね、願うて言に從はずんば、歎息彌襟、

靄靄停雲濛濛時雨。

靄靄たる停雲、濛濛たる時雨、

八表同昏平路伊阻。

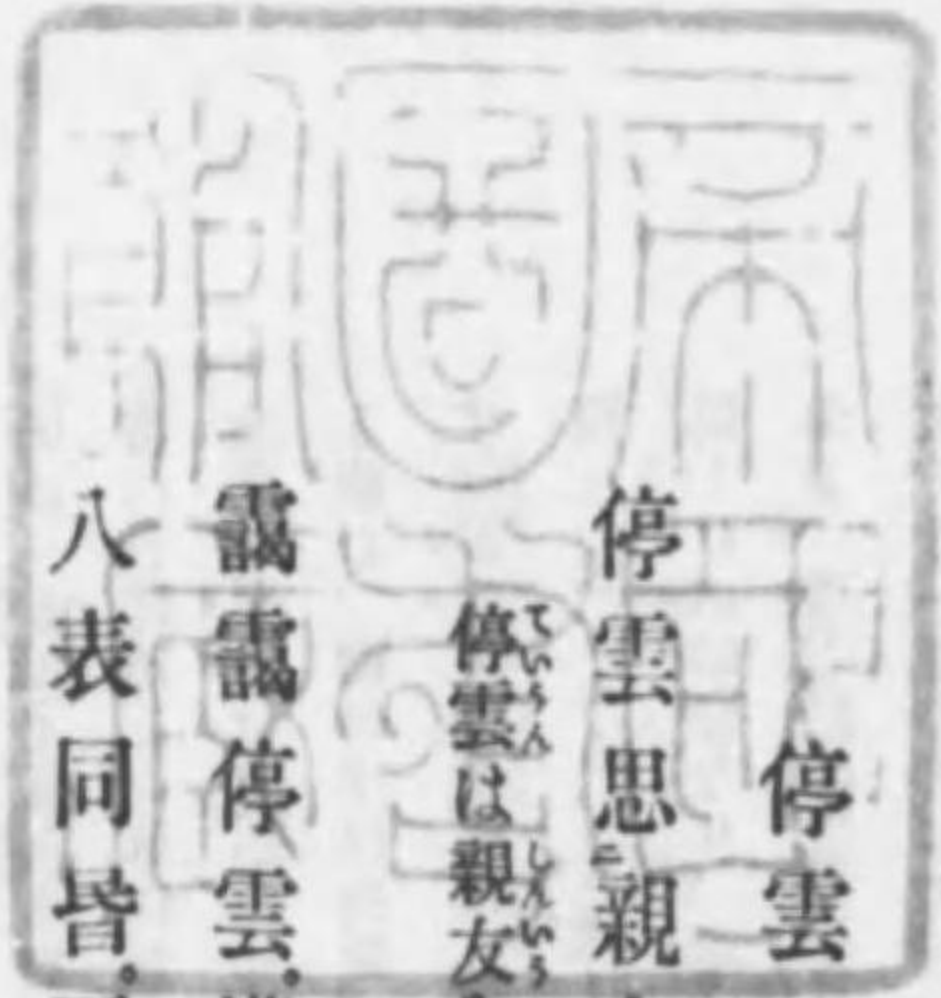
八表同じく昏く、平路伊れ阻し、

靜寄東軒春醪獨撫。

靜かに東軒に寄りて、春醪獨撫す、

良朋悠邈搔首延佇。

良朋は悠邈、首を搔いて延佇す、



【注解】四言は詩の根本なり、毛詩一部三百五篇大抵四言なり、魏の曹操其の子子建などは四言に於て頗る巧妙と爲す、趙宋の劉後村は、淵明の「停雲」「榮木」等の四言は殆んど建安（漢の年號なれども詩家は泛稱して曹操時代を指す）を突過すと評し、清の沈

陶淵明は、四言詩は甚だ造り難し、三百篇と太古も不可、太厚も不可、「停雲」時運等の篇は、清談簡遠、別に一格を成す、と評せり、曹操が赤壁詩の如きは、氣格は陶明の無き所、而かも簡遠は曹操の無き所、魯雉と高士の異る點、一目瞭然たるなり、停雲の題意は、周詩六義（風、賦、比、興、雅、頌）の中で賦と興との遺義なり、直ちに親友を思ふことを賦して、興を新醪や飛鳥に遣るなり、何五春は停の字を解して「凝つて散ぜざるの意」と、即ち雲の飛散せずに住して居る貌を云ふ、凝は酒を盛る器、衍は酒を盛る器、二字を結合して一字と爲す、然れども一字獨用するも亦可、後世、章に木鳥を付け縛と云ふ、凝は李公換云ふ「湛讀んで沈と曰ふ」「タン」の音即ち「タマフ」の和訓でなく、「ヒタス」の訓を取る、「毛詩」には和樂且湛と讀ましむ、新醪は字書に汁滓酒とあれば即ち「カスザケ」なり、陶列は陶中に林列するなり、初榮は新醪と對字を爲す、初春の榮木なり、願言は詩經の文字、不從は是の陶中に酒を酌み從進しようではないかと云ふ意味、歎息は嘆息と同義、彌然ば余は獨斷なれども二字にて「ナカシ」と訓む、彌の字は拘泥する必要は無い、久之と大底同意義、彌は長と久と大と彌と甚と竟と彌との七義を有す、以上停雲詩の序引とす、彌然ば雲の盛なる形容、濛濛は雨の微なる形容、濛濛の反對、「詩經」に零雨其濛とある、時雨「書經注」に應時之雨、使「神木發生」也とある、八表は四方と四維、天地も同じ、同昏、天地皆昏く明處は無し、昏は唐の太宗の名を避けて以來の字、從ふ可らず、民と日の結合なり、平路は平平たる坦路、伊阻は「毛詩」の字面、伊は維も之も同義、阻は險阻、又阻隔と連用して、歩行の難義を云ふ、「毛詩」國風に自詠「伊阻」とあり、以上四句十六字を清の查初白は「平世に當る者は、此の語の悲を知らず」と評せり、晉の社稷は、十一主恭帝に至り、元熙二年を以て劉裕の宋と爲る、陶明が忠義の志も施すに所無く、之を文字に發し、其の難を消したるものなり、元の劉毅曰く、此の篇は東晉の朝に仕へし陶明の親友が、宋に再事する者あり、乃ち陶明、此の詩を贈り、之を規諷したるなり、辭寄、陶明自身が、辭寄として東軒に寄侍する、春暉は即ち新醪、彌然ば面白き成語なり、彌は飲むべき物、撫すべき物にあらず、四字に當てる爲め愛撫の意を以て用ふ、良朋は志の合ふ友人、悠遊は悠遊遊、面語するを得ず、擬首は「毛詩」の字面、仰泉の貌と注して、良朋の處は悠遊である、面會は不可能ながら、セメテ其の方角を望むの願望を爲す、延佇は幽靜と同じく、行いて進まざる貌と注す、「毛詩」國風に靜女其姝、俟我於城隅、愛而不見、搔首踟躕とある、陶明が此の詩の粉本なり、「毛詩」北風の章は天

下の危風を慨して作る、北風は即ち惡風、靜女は即ち淫女、此の間に於て、困に處するは忠臣、亂を去るは智士なり、今此の詩、彌濛濛等の字面を用つて、天下の危亂を感み、良朋等の文字を用つて、毛詩の靜女に當て、其の人の遺を守らざること、淫奔の程度を巧妙に興喻したるものなり、二讀三讀、味の益す深きを覺ゆ、仄韻上聲、六語と七義とは通韻とす、

停雲靄靄時雨濛濛

停雲靄靄たり、時雨濛濛たり、

八表同昏平陸成江

八表同じく昏く、平陸江と成る、

有酒有酒閒飲東窓

酒あり酒あり、閒に東窓に飲む、

願言懷人舟車靡從

願うて言に人を懷ふ、舟車從靡し、

【注解】一二の句は前首を倒用したるのみ、平陸成江、時雨の爲め平平たる坦陸も江と變成する、世運の變じ易きを言ふ、有酒有酒は、「毛詩」の有聲有聲、又は有客有客、又は有聲有聲の句法、同語を層用するは意味を強くする、閒飲は俗に「クツロイアノム」の意義、東窓は春窓と同じ、願言は「オモウチコニ」と讀む、懷人は所謂親友を懷ふ、「毛詩」好風篇に願言則懷とある、舟車、江の舟も、陸の車も、靡從は余は「ヨシナシ」と訓む、「シタガフナシ」と訓まぬ、從は由と同義、唯懷ふのみに行くに由なし、靡は元來歎と誠との義を帶ぶ、誠の意義より強ひて無と訓ましたるなり、劉履は、舟車靡從は即ち路阻の意なりと言ふ、今讀一東二冬三江は古詩は通韻なり、

東園之樹、枝條再榮。

東園の樹、枝條再榮し。

競用新好、以招余情。

競うて新好を用ひ、以て余が情を招く。

人亦有言、日月于征。

人亦言へるあり、日月于に征く。

安得促席、說彼平生。

安んぞ席を促し、彼の平生を説くを得ん。

【注解】東園之樹は表面字の如し、表面は東晉之人と云ふことなり、即ち六義の中の比體なり、枝條、表面は枝條なり、裏面は門地又は官位なり、再榮は載榮に作る本あり、再榮を可とす、東晉の天下も其の相國劉裕が爲めに奪はれて、已に晉の天下にあらず、劉宋の天下なり、晉の安帝恭帝共に名君にあらずしを以て、遂に其の臣桓玄や寄奴の爲め奪められ、恭帝の如きは劉裕の爲めに強請せられ、桓玄之時、晉氏已無と自書せる悲愴なる天子でありしなり、晉の元熙の年號も遂に亡び、宋の永初の年號が生る、此の舊年號の思を説りし者が、新年號の下に鳩集して生活する事と爲つた、此の事再榮と稱したるなり、淵明其の人の高潔の心事より、彼等黜黜(鼠の異名)輩を見れば慷慨深かりしならん、競用は黜黜輩の一にして足らざるを示す、新好は舊面目を譲うて新面目を好しとする、正面は新らしき奇麗なる花を好愛すと云ふにあれど、側面は舊事新朝と云ふ事を云ふ、大義名分を知る者は悲愴慷慨せざるべけんや、以招は黜黜輩が淵明の心事を知らずして、早く來つて樹の新好を見よ、遂に來つて國の新朝に仕へよと招くなり、余情は「余ヲ招ク」で足りてゐるが、情の顯露あるが爲め一層委致を存す、招を一本、怡に作る、招を以て可とす、人亦有言は「毛詩」大雅蕩之什篇の句なり、淵明は「毛詩」を其の備用ふる語多し、日月于征、歲月の堂堂と征き去るを云ふ、「毛詩」に「人亦有言、勸之無學んで、人も亦云ふ、日月の征くは速かなり、有言の二字は下句へ傳ける、安得は何得と同義、「イダクンゾエン」で俗語の「ドワシテアキヨク」と否定する意義なり、淵明自身が云ふなり、促席は左思が蜀都賦に合樽促席とあるに本づく、一席に會同しての意、說彼平生は、「毛詩」の酌彼命龜の句法、其の意味は種種の解釋が就くが、余は、淵明が意に、此の如く時運が移り、新朝に

赴く人共とは、到底思想が一致せざるを以て、興に語る能はず、且縱令ひ話した所で、晉室の恢復は到底出來得べくもあらず、其れよりは黙して居るが可なりとなり、蓋し此の事は親友なるを以て、「詩以テ子ニ示ス」となり、平生の文字は知己間より外用ひざるなり、此の詩は今願八庚とす。

翩翩飛鳥、息我庭柯。

翩翩たる飛鳥、我が庭柯に息ふ。

斂翮閑止、好聲相和。

翮を斂めて閑に止る、好聲相和す。

豈無他人、念子實多。

豈他人無けん、子を念ふ實に多し。

願言不獲、抱恨如何。

願うて言に獲ず、恨を抱く如何。

【注解】翩翩は鳥の飛ぶ貌、「毛詩」に翩翩者鵲と、庭は中庭、柯は柯、樹は落葉樹、喬木にして暖地に産す、斂は「ナサム」と訓む、斂の字とは違ふ、翮は字音「カケ」、字訓は「ハネ」又は「ツバサ」なり、閑止は鳥が柯樹に息止なり、好聲相和、二羽以上互に好聲を發して相和するなり、豈無他人は、「毛詩」國風狡童章に、子不我思、豈無他人の語を用ふ、人の我と和する者無きにはあらず、而かも念子實多、子即ち親友を念ふこと切なるは實に多きなり、「毛詩」に忘我實多の句法とす、不獲は不可能の意味、抱恨は鳥は好聲相和す、和樂此に存す、我が親友と相和する能はず、恨を抱きて但如何、「ドワシヨクヤ」と思ふのみなり、興を以て主とし、賦を賓と爲したる詩とす、今願五歌の韻、以上停雲四首終る。

【題義】停雲は靖節自ら「思親友」と、乃ち雲を當面に賦して、而して内面に友と云ふものに興するなり。

【大意】停雲の文字は淵明の獨創に係る、故に自から其の意を解して思親友と云ふ、春雲の霏霏として四方より集まり來り、一處に停まる其の親しき状を看れば、宛かも志を同じうする親友が團聚して相樂む様と彷彿たり、乃ち雲を賦して以て我が興を遣るなり、而かも獨り雲のみ春を表するならんや、雨も亦春、樹も亦春、鳥も亦春、非情も欣欣、有情も欣欣、人豈欣欣たらざるを得ん、而かも我は其の親友と、此に團樂の樂みを同じうする能はず、唯同じうする能はざるのみならず、外出して遊ぶことも能はず、東軒の下、聊か春醪を飲み、時に雲を看、雨を看、樹に對して鳥を聞き、以て自ら慰むるのみ、

時運 四章 并序

時運 四章并に序

時運游暮春也。春服既成。景物斯和。偶景獨遊。欣慨交心。

時運、暮春に遊ぶなり、春服既に成り、景物斯れ和す、景を偶べて獨遊し、欣慨心に交はる、

邁邁時運。穆穆良朝。

邁邁たる時運、穆穆たる良朝

襲我春服。薄言東郊。

我が春服を襲け、薄く言に東郊、

山濤餘靄。宇曖微霄。

山は餘靄を濤ひ、宇は微霄曖たり、

有風自南。翼彼新苗。

風あり南よりし、彼の新苗を翼く、

【注解】時運は詩題、游暮春以下二十字は小序、時運は其の意游暮春なりと淵明自から注す、春服既成は「論語」(先進篇)に暮春者春服既成とあり、春の衣服が整頓する、景物斯和、好期なれば天地間の有情非情盡な和適する、偶景、偶は並なり、景は影なり、獨遊に伴ふ者は影のみ、欣慨は欣喜と感慨、交心、欣喜と感慨が交代に起る、邁邁は不顧なりと注す、「毛詩」小雅都人士什に視我邁邁とあり、時運は人事に關せず、顧みずして逝くとなり、穆穆は美と厚と和と清との義を含む、此の良朝即ち朝の景色は和美なり、襲は著るなり、我春服は單袷の衣服、薄言は「餘事ハ合テ置キ、マアシバラク」の氣味、「毛詩」周南に薄言有之の句法、東郊は「ハルノチカカ」、邑外を郊と曰ふ、東郊に閑遊する、山濤、山色を曉天に見ると山は自然に洗滌せる美觀を呈す、餘靄は雲の集まる貌、宇は「ソラ」、曖は「クモル」、微は「スコスシ」、霄は「ソラ」、一字づつ別別に解すれば意味微底せず、焦諶本には餘靄微消に作る、是を可とす、陶淵曰く、餘靄微消に作るときは、山濤の句に重複す、故に不可なりと、余謂ふ文字重複しても、意味は重複せず、焦諶に從ふべし、有風自南、南風は初夏の風、「毛詩」邶風篇に凱風自南、吹彼棘心」の句法、翼は王業曰く新苗、風に因つて舞ひ、羽翼の狀の若し、竹物に工なり、今韻下平聲二蕭、

洋洋平津。乃漱乃濯。

洋洋たる平津、乃ち漱ぎ乃ち濯ふ、

邈邈遐景。載欣載矚。

邈邈たる遐景、載ち欣び載ち矚る、

人亦有言。稱心易足。

人亦言へるあり、心に稱へば足り易し、

揮茲一觴陶然自樂

茲の一觴を揮ひ、陶然自ら樂む。

【注解】 洋洋は平洋の廣闊なる形容、乃漱は水濯むが故に口を漱ぐ、乃濯は水清きが故に體を濯ふ、遐邇は「説文」に遠邇とあり、「正韻」に滂とあり、際限無く何處までもの氣味、遐邇は、眼界に映する遠邇の景色、載欣は心の懐、載陶は目の樂、陶は「類編」に觀之甚也とあり、熟視するなり、人亦有言は既に辯ぜり、稱心は我が心に稱ふ、易足は満足なり、揮茲一觴、觴は酒卮の總名、酒を少量に飲んで其の満足の心を達る、陶然は和樂の貌、「揚子方言」に陶然也暢也と、ノビノビする形容、自樂は必ずしも朋を求めず、所謂自序の偶景獨遊、欣愜交心を云ふ、今韻入聲三覺、

延目中流悠想清沂

目を中流に延め、清沂を悠想す、

童冠齊業閒咏以歸

童冠齊業、閒咏以て歸る、

我愛其靜寤寐交揮

我其の靜かなるを愛す、寤寐に交揮ふ、

但恨殊世邈不可追

但恨む世を殊にし、邈として追ふ可らざるを、

【注解】 延目は兩目にて進め見る、中流は前の平津と文字を對す、悠想は「ハルカニオモフ」なり、淵明時代より孔子時代を想へばなり、悠悠に作る本は不可、清沂は沂水、泰山より出でて、西流して曲阜を經、洙水と合して洙水に入る、童冠は童子と冠者、論語先進篇に冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、咏而归とあり、齊業は童も冠も齊しく浴し、同じく詠するを以て其の業を齊しくするを云ふ、閒咏以歸、沂水に浴して以て詠歸する、(地志に沂に温泉あるなり)我は淵明、愛其靜、閒詠する童冠の態度

の安靜、道に得る所あるが如きを愛すととなり、宋の潘文清曰く、靜之爲言、謂其無外事也、亦庶乎知浴沂者之心矣と、大に當る、寤寐、寤は覺、寐は臥なり、寤ても寐きても他の善事を見れば、我が心は揮はざるを得ないとなり、交の字は二物の中間に用ふる文字、但恨殊世、浴沂の事は追慕に堪へずと雖も、周と晉とは世代を殊隔する、乃ち恨む所以、邈不可追、周書論評して曰く、勳處に靜を得るは、天に全きなりと、今韻四支と五微を通用す、

斯晨斯夕言息其慮

斯晨斯夕、言に其の慮に息ふ、

花藥分列林竹翳如

花藥分列し、林竹翳如たり、

清琴橫牀濁酒半壺

清琴牀に横へ、濁酒半壺、

黃唐莫逮慨獨在余

黃唐逮ふ莫し、慨獨余に在り、

【注解】 晨と夕は語主、斯の字は語助、言は「詩毛傳」に我也と注し、朱子は辭也と注す、是の辭即ち「ココニ」と訓んで、「マレ」と訓む者少し、古詩としての使用法、近體には多く用ひす、唐經には稀に見る、言息は「ココニイコフ」、乃ち淵明先生悠然として自身の慮に安息する、花は花欄、藥は藥欄、園中に整頓分列する、樹林や竹叢も、一隅に翳如として繁茂する、層は藪又は藪なり、清琴橫牀、屋内の耳を樂む具、濁酒半壺、口を樂む具、清と濁と字の對を取る、黃唐は黃帝と堯帝なり、黃帝は有熊氏、堯帝は陶唐氏、昭代の天子として、漢士人の理想を離れざる帝王なり、莫逮は無及と同じ、希望するも不能の意、慨獨は、上世は慕ふも何の餘無し、然りと雖も欲望としては上代の如き治世に處したいと思つて、獨自慷慨する、在余は他人の理想ではない、私の理想であると斷するなり、明の陳仲明評して曰く、欣在「春華」、慨因「代變」、黃唐之想、皆寄「西山」、命意獨深、非「僅間過」と、平凡の評、淵明知

るあらば大笑すべし、尋常閑適の詩にあらざることば、字面の上で顯然たり、自序の欣慨交心の四字を一貫す、今韻六魚、

【題義】時運は四時、初運を謂ふ、游暮春の題にて可きを、時運と題する所以は、「詩經」に時邁の語あれば、それに倣ふものなり、四言詩は「詩經」に近きを求むればなり、

【大意】時運の文字は淵明の獨創にはあらず、東漢の班彪が「賦」に諒時運之所爲今とあるの文字を借りて以て暮春即ち三月の狀を賦す、元來時運の意味は哀傷に屬して、懽樂に屬するものにあらず、是を以て春日は良に遊ぶべきものなりと雖も、國家即ち晉の天下は今や傾覆に逼る、四時の運數として冬去つて春來る、此れ欣懼すべし、而かも國家の運數としては、晉衰へて宋將に興らんとす、此れ感慨すべし、一心にして欣と慨と交起る、豈堪ふ可けんや、是に於て既に成る所の春服を襲け、或は東郊に、或は平津に、優游して以て其の鬱を散せんと欲す、南風は拂拂として新苗を吹き、碧水は洋洋として平津に流れ、目は樂むべく、衣は濯ふべく、但世は孔子を去ること悠遠、浴沂の古の如くならざるを恨む、乃ち游を畢つて家に還り、我廬に於て晨夕の樂を求むれば、花藥欄も、樹竹林も、青青葱葱として、自然の時運を表現して居り、床には清琴あり、壺には濁酒あり、黃唐は追ふも詮無し、唯我と我と欣慨すべきのみ、

榮木 四章 并序

榮木 四章 并序

榮木念將老也。日月推遷。已復九夏。總角聞道。白首無成。

榮木は將に老いんとするを念ふなり、日月推し遷り、已に復九夏、總角に道を聞き、白首に成る無し、

采采榮木。結根于茲。

采采たる榮木、根を茲に結ぶ、

晨耀其華。夕已喪之。

晨に其の華を耀かすも、夕に已に之を喪ふ、

人生若寄。顛覆有時。

人生は寄するが若し、顛覆時あり、

靜言孔念。中心悵而。

靜かに言に孔念し、中心悵而たり、

【注解】榮木に寄托して道を學ぶこと能はざるを嘆息しての作、九夏は四月十六日より七月十五日に至る間を云ふ、九十日間なればなり、春秋冬皆同じ、蓋し此の時仲夏の作ならんと想ふ、總角は十五六位までの者、頭髮を束れて角の如き狀を爲すに由る、道を聞くは早けれど、道な成すは遅きを云ふ、「論語」の遺意、采采は「毛詩」周南章に采采芣苢とある、但し「トリトル」なれば動詞とす、今の詩は榮木を形容して、其の新葉の美なるを云ふ、故に形容詞、動詞にあらず、結根于茲、榮木が根を此地に結ぶ、他處にあらざるを謂ふ、晨耀は晨耀が正なり、夕已喪之、晨朝に色を耀かしたる榮木も夕陽には已に色を喪ふ、人生若寄は、久しからざる意

曠、老萊子が言なり、天地の間に暫時寄寓するのみ、顛覆は憔悴と同じ、「玉篇」に憂ふる貌とある、「正韻」に瘦する也とあり、所謂白首老衰を憂ふる貌なり、靜言は他念を生ぜざるの意、孔念は「毛詩」の語、「ハナハダオモフ」の義、中心は心中、慨而、イタムシ、慨は悼と同義、「毛詩」に中心是悼とあり、今韻四支、

采采榮木于茲托根

采采たる榮木、茲に根を托す、

繁華朝起慨暮不存

繁華朝起り、慨暮存せず、

貞脆由人禍福無門

貞脆人に由る、禍福は門無し、

匪道曷依匪善奚敦

道に匪ずんば曷ぞ依らん、善に匪ずんば奚ぞ敦からん、

【注解】一二の句は前首を例用したるのみ、「毛詩」の句法を巧妙に運用したるもの、繁華の二句は陸機の二句と同義、貞脆は貞と脆との二種、貞は正、即ち断じ易からざる者、脆は弱、即ち断じ易き者、由人、木樹の貞脆は本来の質、如何とも爲す能はず、人の貞脆は、道を學ぶと學ばざるに因つて變するなり、貞人の門は禍門、脆人の門は福門、匪道曷依、道は正道、吾之に依る、匪善奚敦、善は正善、吾之を行ふ、湯東顧は此の詩を評して「楚辭」を引く、然りと雖も陶明が此の詩は必ずしも楚辭の語を學びしものにあらずるなり、今韻十三元、

嗟予小子稟茲固陋

嗟予小子、茲の固陋を稟く、

徂年既流業不增舊

徂年既に流る、業舊に増さず、

志彼不舍安此日富

彼に志して舍てずんば、此に安んじて日に富む、

我之懷矣怛焉内疚

我の懷ひ、怛焉として内に疚む、

【注解】嗟予は「毛詩」の於乎小子を學ぶ、小子は卑下する辭、陶明自分を指す、稟茲固陋は、ヤクザの性質を以て生れ来たとなり、固陋は「論語」に出づ、頑固寡陋と連續して、自分の愚態を強ひて保護し、聖者の言に従はざる無知の徒を指す、徂年既流、年華流水、徂いて匆匆たるを云ふ、業不增舊、學業は年華と反對、遲滞として進まざるを云ふ、志彼不舍、彼は學其のものを指す、學業に志を寄せて舍てざるに於てはの意、「荀子」の功在不舍の語より案出せる句、安此日富、「老子」の知足富也の意、「毛詩」に一醉日富の語あれども、此には適切にあらず、湯東顧の説に、志彼二句八字は、自ら其の廢學して飲を樂むを告むと、蔣藻の説に、淵明決して廢學を管めしにはあらず、富有は大業、日新は盛徳、我が懷は茲にあるも、内に疚しき無きにあらず、此れ固陋を嘆する所以と、陶淵曰く、淵明の心、道を望めども未だ見ず、皆を沈黙に歸す、刺責の心、固より當に是の如くなるべしと、今謂ふ、湯と陶とは淵明の意を得、蔣藻は淵明の意を得ず、我之懷矣は、自分の中情を云ふ、怛焉は悲嘆、内疚は中心自から懼れ、自から驚く貌、「論語」に司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、曰不憂不懼、所謂之君子乎、子曰、内省不疚、夫何憂何懼と、小子固陋と卑下して出で、最後に内疚と結ぶ、句法字法見るべし、去聲二十六宥の韻、

先師遺訓余豈云墜

先師の遺訓、余豈云に墜さんや、

四十無聞斯不足畏

四十聞ゆる無きは、斯れ畏るるに足らず、

脂我名車策我名驥

我が名車に脂さし、我が名驥に策たん、



千里雖遙、孰敢不至。千里遙なりと雖も、孰か敢て至らざらん、

【注解】先師は孔子、遺訓は「論語」を指す、余豈云能は、淵明自身が儒道を持して、卓然たることを示す、四十無聞は、英雄でも學者でも、四十に及んで猶ほ人に知られざる者は、新不足畏、丈夫として言ふに足らず、「論語子罕篇」に、子曰、後生可畏、焉知來者之不可及乎也、四十五而無聞焉、斯亦不足畏也、孔子の言は、後生年富力強く、以て學を積み而して待つあるに足る、其の勢長る可きなりと、晉の安帝は、即ち晉最後の王とす、其の元興三年に、淵明は恰かも年四十、種種國の爲め憂慮したるなり、而かも安帝は幼少の時、寒暑備極し辨ぜざる位の人、到晉晉室は亡ぶに至る、明の楊升菴は、饒飽炎寒部自知、登榻復偏任「提擢」と嘆じて居る、詔我名車、裏面は我が精神に照さしての意、策我名驥、車は「アアラ」、驥は「ムチ」、共に是れ奔走する力のあるもの、千里雖遙、孰敢不至、我に於て志の堅固なる者は、千里も萬里も到達すべし、金城も鐵壁も破壊すべし、淵明此の年軍事に參すと雖も、良圖就らず、是に於て明年歸休す、去聲四萬、

【題義】榮木は靖節自ら謂ふ、念將老也と、榮の反は衰なり、榮の樂むべきを知り、亦衰の慨すべきを念ふ、晉室の榮、已に衰に就くを痛むなり、

【大意】榮木は、南風夏日に向つて其の葉青青とするに反し、我は漸く衰老、日に白髮蓬蓬たるに至らんとする、其の反對なる物を掲げ來りて以て我が想を遣るなり、采采たる榮木は、正に南風の薫に逢うて得意に其の美を誇るもの如し、而かも晨朝に其の華を耀かすと雖も、夕日には已に其の美を喪ふに至る、人の少壯時代は、榮木の其の華を耀かす時代なり、已にして衰老、是れ榮木の凋喪する時代なり、而かも艸木は年年一度其の榮を表して其の壽や久し、之に反し、人生は殆んど寄寓と異なる

らずい榮華は短く顛覆は速かなり、是の故に、其の少壯時代に、學業に志し、道徳を修するを要す、我の如きは、少壯より學に志すと雖も、天分固陋にして、業は容易に進まず、進まずと雖も、先師即ち孔夫子の四十にして聞ゆること無き者は畏るるに足らずと述べられたる遺訓は、造次にも忘れず、是の故に、名車に脂を増し、名驥に策を加へて、決して怠懈せざる可し、聖人と我と千里を隔つるの遠しと雖も、遂には其の蹤に逐ひ造らんとなり、

贈長沙公 四章并序 長沙公に贈る 四章并に序

長沙公於余爲族祖同出大司馬昭穆既遠已爲路人經過潯陽臨別贈此

長沙公は、余に於て族と爲す、祖は同じく大司馬より出で、昭穆既に遠く、已に路人と爲る、潯陽を経過し、別れに臨んで此を贈る、

同源分流、人易世疎、源を同じうするも流を分つ、人易り世疎なり、

慨然寤歎、念茲厥初、慨然寤めて歎す、茲の厥の初を念ふ、

禮服遂悠歲月眇徂

禮服遂に悠たり、歲月眇徂、

感彼行路眷然躊躇

彼の行路、眷然として躊躇するを感ず、

【注解】長沙公に於て異説あり、そは序を於て余爲族祖、同出大司馬と讀む人と、於余爲族、祖同出大司馬と讀むに於て、論に異同を生ず、而して大司馬を漢の高祖の時の陶會と爲す説と、晉の陶侃と爲す説との相違も起る、陶會を否認する陶侃の説は曰く、漢の高祖の世、右司馬の官は有る、大司馬の官は無し、大司馬は武帝の元狩四年始めて置きしものなり、漢の史家閻若璩曰ふ、先生（淵明）は愷侯を祖とす、而して祖公に出づるにあらず、此の詩の大司馬は右司馬の誤りならんと、愷侯は陶會、祖公は陶侃なり、されど淵明が「命子」に天集有漢、眷予愷侯とある語に依つて之を案すれば、此の陶會は確かに其の族祖たること疑ひ無し、故に漢代に於ては陶會、晉代に於ては陶侃、是にて分明ならずや、但此の題に同出大司馬を中晉の陶侃と見るか、漢の陶會と見るかとの二説の是非如何、歴史が分明に陶會は右司馬にて、大司馬にあらずとせば、閻若璩の如く大は右の誤謬と見るが或は當らんか、況んや淵明集の文字異同あること甚しきに於てをや、陶侃の陶侃是認説は、淵明と時代が接近して、昭穆既遠の語が頗る動かず、余の闕説を取る所以、昭穆既遠は「禮記」の語、夫祭有昭穆、昭穆者、所以別父子遠近、長幼親疎之序、而無亂也、又三昭、三穆、二昭、二穆の説あり、今は要無し、要するに祖先とは世が遠く、今日では一方即ち長沙公は高位の人、我は布衣の人と相隔つて來たりとなり、已爲路人、路人は他人、親戚では無く、全くの他人と爲る、潯陽は現今江西省九江府、即ち晉の潯陽郡、此の潯陽郡の樂業里は淵明が生地とす、長沙公は今此の地を經過せられたるに因つて、淵明が此の詩を贈る、同郡分派、水の本源と支流との例を以て人の本家と分家とに譬ふ、人易世疎、易は變なり、疎は遠なり、疎なり、慨然歎歎、寤は覺なり、寤即ち「ネオト」の反對、「毛詩」曹風章に慨我寤歎とあり、念茲厥初、今は分派ではあるが、厥初は同源であると云ふことを念ふ、禮服遂悠、昭穆已に遠ければ、祖先の祭祀も十分に出来ないといふ意味、歲月眇徂、眇は本來の字義は微なり、一日小、即ち和訓の「スカメ」は字の形體より來りし後世の俗説、此の詩は遺の意、但は征、感彼行路、長沙公が潯陽を經過して、尙其の前行の路、感ずる者は淵明、彼行路は長沙公、眷然躊躇、眷然は俗語に發笑を引かざる様な貌、長沙公が淵明と別れて行くを惜む様、即ち躊躇なり、宋人の評に、字少意多、尤可誦誦とあり、宋人でも元人でも明人でも、淵明の詩は一讀の間には意味解せず、自他の區別も分明ならず、此の結句は、「彼の行路眷然躊躇するを感ず」と、二句一體の法とす、今讀六魚、

於穆令族允構斯堂

於穆たり令族、允に斯堂を構ふ、

諧氣冬暄映懷圭璋

氣に諧ふ冬暄、懷に映る圭璋、

爰采春華載警秋霜

爰に春華を采る、載ち秋霜を警めよ、

我日欽哉實宗之光

我日く欽するかな、實に宗の光、

【注解】令族は良族、允は信、至誠なり、構斯堂、長沙公が潯陽を經過して、其の祖先祖公の祠堂を構造したるなり、諧は和、冬日の溫和、長沙公の人品に譬ふ、映懷圭璋も、長沙公の人品高潔を圭璋に譬ふ、春華は芹藻蘋蘩の類、即ち祭祀に用ふる具、文字に泥んで春の華と見ては不可、載警秋霜、祀祭の嚴肅なるを云ふ、所謂秋霜悵悵の思ひに勝へざるを云ふ、我日欽哉、我は淵明、欽は普通に恭又は敬の意とするが、嘆歎の義も含む、實宗之光、宗は宗族、陶一家の光榮であるとの意、今讀七陽、

伊余云邁在長忘同

伊余云に邁ふ、長に在つて同を忘る、

笑言未久逝焉西東

笑言未だ久しからず、逝焉西東す、

遙遙三湘、滔滔九江、  
 遙遙たり三湘、滔滔たり九江、  
 山川阻遠、行李時通、  
 山川阻遠なるも、行李時に通ず、

【注解】伊は惟、云は「ヨコニ」と訓む、遷は遷、在長安間、長久の間に在つて其の同族たるを忘れ居りし意、予嘗て淵明は年長に在つて、陶侃より出でて同族たるを忘ると解したるは誤る、笑言未久、云に遷うて以て笑談するも直ぐ又別るる意、遷は往、焉は語助、一は西、一は東と爲る、遙遙は遠くなる貌、三湘は湖南の湘潭、湘陰、湘鄉、滔滔は流るる貌、九江は異説あるも、潯陽より大江分れて九と爲るの説を取る、江西省に屬す、山川阻遠、離別後は西東と阻遠する、行李は現今の郵便配達人を云ふ、行李と云ふ道具の名になりしは六朝以後なり、今韻の一東三江は古、通韻なり、

何以寫心、貽此話言、  
 何を以てか心を寫さん、此の話を貽る、  
 進簣雖微、終焉爲山、  
 進簣微なりと雖も、終焉山と爲る、  
 敬哉離人、臨路悽然、  
 敬せんや離人、路に臨んで悽然たり、  
 款襟或遼、音問其先、  
 款襟或は遼なるも、音問其れ先んず、

【注解】何以寫心、淵明が自分の誠心を寫して、長沙公に呈するに如何がして可い、貽は音「イ」訓は「オクル」遺なり、此話言、外に呈する物は無し、此の話言、即ち善言を貽りて誠心を表す、無形物は有形物に勝る大利あり、進簣雖微、今、淵明が通貽する一言は、陶に簣即ち土簣の如き物ではあるが、終焉爲山、山は山として別に大なる物が有るにあらず、一簣を積んで以て山と

成る、「論語」に譬如爲山、未成二簣とあるが、此の句の典故であるなり、敬哉は俗語の御大事に遊ばせと云ふ意、離人は長沙公を云ふ、臨路悽然、別路に臨み、吾意悽然たり、款襟或遼、此處で別れ、相互に遠慮となる、款襟即ち衷心を披開する語はず、遼は遠慮なり、音問其先は、二義あり、此處で分手しては暫らく逢ふこと能はざる故に、餘計の事まで言うて置く、(一義)相互に別れるも音問は必ず絶たず、吾より先に爲す、(二義)其の取るべきを取るべし、十三元と十五劃と一先とを通韻として作る、以上四首、敦厚の旨を盡くす、

【題義】贈は贈寄と贈呈とあり、遠方の人に贈るは寄なり、當面して贈るは呈なり、今は則ち贈呈なり、

【大意】陶家は、漢の大司馬陶舍より出で、晉の今日に至る五百餘年、其の間分流支派分明なるもあり、不分明なるもあり、獨長沙公のみは、陶家としての聲望を墜さず、穆穆として祖先の爲め之を祀る新堂を構へ、冬祭も春祭も、怠らず盛んに之を行ふ、此の如きは實に是れ陶家の光榮として、欣幸せざるを得ず、我即ち淵明は、接近して談笑するの長からんことを願へども、一は三湘の地、一は九江の地と、山川阻遠するの已むを得ざるに至るべし、合と離とは人世の常なり、憂ふと雖も、亦如何ともする無し、唯我が敬恭の念は變ずること無し、時に音問を爲すを以て、幸に此の生を善養し玉へとなり、

酬丁柴桑 二章

丁柴桑に酬ゆ 二章

有客有客爰來爰止。

客あり客あり、爰に來り爰に止る。

秉直司聰于惠百里。

直を秉り聰を司る、于に百里を惠す。

殫勝如歸聆善若始。

殫勝歸るが如し、善を聆いて始めての若し。

【注解】丁は姓、柴桑は郡名。丁と云ふ柴桑の縣令に酬ゆる詩なり、有客有客は「毛詩」の語「毛詩孔疏」に客止一人、而重言之、是丁寧殊異、以尊大之也。丁縣令が淵明を訪問せしなり、爰來爰止、四字にて「ココニキマ」と云ふ意、「毛詩」大雅に爰始爰謀とあり、秉直司聰、嚴正に政治を施し、良官吏の範を示す、于惠百里、百里は一縣を云ふ、一縣即ち柴桑に惠澤を垂れるなり、殫勝は覽勝と同じ、如歸、勝れたることは歸國せず直ちに之を行ふと云ふ意、聆は音「レイ」調「キタ」開なり、善事を聆くとすは、二度も三度も聞き熟れるも、始めて聞く若く厭はないことなり、「詩經」と「論語」に精通する者は、此の詩の妙を知るを得、上原四紙の韻、六句。

匪惟也諧屢有良游。

惟也諧ふにあらず、屢良游あり。

載言載眺以寫我憂。

載ち言ひ載ち眺め、以て我が憂を寫す。

放歡一遇既醉還休。

放歡一たび遇ひ、既に酔ひ還休ふ。

實欣心期方從我遊。

實に心期を欣び、方に我に従つて遊ぶ。

【注解】匪惟也諧は、或は匪惟諧也に作る、孰れにしても讀み難し、余は我流に「調り諧フニアラズ」と調む、惟は思と謀と有と爲との字義あるが、余は獨の義に見る、諧は合と調と偶と始との字義あるが、今は和の義に見る、獨善を守らず、衆と俱にする意、屢有良游、此の游は一本由に作る、結句の遊と同字ゆゑ避けたものと思ふ、古詩なれば重韻を許し、游で可きなり、良友と良游を屢するなり、載言載眺は、「毛詩」の載言載眺の句法、笑言したり、觀眺したり、以寫我憂、是れ情懷を筆に寫し出すを云ふ、憂の字輕く見て、想又は懷の意に見て可し、放歡一遇、丁柴桑と一遇するに依つて、歡を自由（放）にするを云ふ、既醉還休、「毛詩」の既醉既飽の句法より來る、實欣心期、君と我と互に心期を欣べば、方從我遊、丁に淵明が勧める言なり、君子は君子の朋、小人は小人の朋、淵明の如き君子人と遊ぶ丁も亦君子人と謂ふ可し、今韻十一尤、温謙山曰く、偶然の酬答、而かも神味瀟水、規す可し、詭す可しと、東坡此の二首を和せざるは何ぞ。

【題義】酬は「返事スル」と云ふことなれば、丁柴桑が贈詩に對し、此の返事の詩を以てせしなり、【大意】今の世の人多くは詐を懷き憎を暴す徒のみ、我が良友として同游するに足らず、但丁柴桑は至誠正直の清吏にして、一郡に良政を行つて、其の作爲善ならざるは無し、是の人と共に酒を飲み、俱に遊ぶ、遂に我が憂も散すとなり。

答龐參軍 六章并序 龐參軍に答ふ 六章并に序

龐爲衛軍參軍從江陵使上都過潯陽見贈。

龐、衛軍の參軍と爲り、江陵より上都に使し、潯陽を過ぎて贈らる。

衡門之下有琴有書。 衡門の下、琴あり書あり、  
 載彈載詠、爰得我娛。 載ち彈じ載ち詠じ、爰に我が娛を得、  
 豈無他好、樂是幽居。 豈た他好無からん、是の幽居を樂しむ、  
 朝爲灌園、夕偃蓬廬。 朝に灌園を爲し、夕に蓬廬に偃す、

【注解】 廬は廬通之ならん、灌園は灌園、參軍は副將、江陵は縣の名、春秋時代には楚の清宮の地、現今は湖北荆南道、上都は京都、即ち陝西省長安なり、壽陽は其の中間に當る處、衡門は唯木を横にして以て門と爲したる者、『毛詩』の語なり、造作無き門、貧士の門、琴書、恭と書を除くのみ、彈は琴、詠は書、爰得我娛、彈琴に倦めば書、書に倦めば琴、清娛は此の間に得、豈の字前句を一轉して非常に力あり、琴書の外にも好む物あり、そは何ぞ、樂是幽居、淵明が幽居は我輩寒士の幽居と異る、紫柱形軒にあらざるべきも、必ずや瓊瑤蓬廬にはあらず、樂と爲す所以、朝爲灌園、朝早く起き、吾園を掃除し、以て淨水を灌ぐ、快言ふ可らず、夕偃蓬廬、偃は偃臥なり、蓬廬は貧家の通稱、起句の衡門と相應する、句として此の如く用ふるのみ、淵明の實際は貧士にあらず、應參軍に比較しての言と知るべし、今韻六魚、

人之所寶、尙或未珍。 人の寶とする所、尙或は未だ珍とせず、  
 不有同好、云胡以親。 同好有らずんば、云胡を以て親まん、  
 我求良友、實觀懷人。 我良友を求め、實に懷人を觀る、

懷心孔洽、棟宇惟鄰。 懷心孔だ洽ひ、棟宇惟鄰る、

【注解】 人之所寶、何焯曰く、陸機云ふ、世之所遺、未爲非寶、主之所珍、不爲必遺、治と、淵明が此の句は陸機が言に本づく、人の寶とする所のものは、我も寶と爲さざるにはあらず、尙或未珍、世の寶は實に相違無きも、深く珍と爲すには足らず、不有同好、是れ同じく道を好む人を指す、云胡以親、云胡は云何と同じ、以親は同好の者を指す、我求良友、共に道を語る友、即ち是れ良友、參軍を云ふ、實觀懷人、友を求めて應の如き良友を得、觀は『毛詩』に我觀之子とあり、懷人は懷はるる人であるから良友なり、懷心孔洽、孔は甚と同義、洽は和と合と習との三義を含む、棟宇惟鄰、淵明が栗里に新居を構ふ、時に應も其の近郷に居を占め、詩を淵明に贈る、淵明乃ち答ふる所以、今韻十一真、

伊余懷人、欣德孜孜。 伊余が懷人、欣德孜孜たり、  
 我有旨酒、與汝樂之。 我に旨酒あり、汝と之を樂しまん、  
 乃陳好言、乃著新詩。 乃ち好言を陳し、乃ち新詩を著はす、  
 一日不見、如何不思。 一日見ずんば、如何ぞ思はざらん、

【注解】 懷人に應を指す、欣は淵明の方から、德は應の德、孜孜は勉強の貌を云ふが普通、今は德を欣慕して措かぬと云ふ意味、我有旨酒、『毛詩小雅鹿鳴章』の成語、旨は美と同義、與汝樂之、酒は兩人對酌を以て天下の至樂とす、獨飲獨酌は至樂にあらず、乃陳好言、乃は「ココニ」又「スナハチ」と訓む、詐らざるの言は即ち好言なり、著は賦詠の意、一日不見、如何不思、一日見ずんば

千秋の如しの意、今韻四支、

嘉游未敦誓將離分、  
送爾于路銜觴無欣、  
依依舊楚邈邈西雲、  
之子之遠良話曷聞、

嘉游未だ敦はず、將を誓つて離分せん、  
爾を路に送る、觴を銜むも欣び無し、  
依依たる舊楚、邈邈たる西雲、  
之子遠きに之く、良話曷ぞ聞かん、

【注解】嘉游は樂き遊び、敦は音「エキ」訓「イトフ」厭なり、「書經」に殷承王之休無敦とあり、「アカズ」と訓むも可、誓將離分、誓は約束なり、將は將來なり、將來を約束して暫らく離分するなり、送爾于路、爾汝の友を路傍まで送る、路傍の中途まで送るは親友に對する禮なり、銜觴は飲酒なり、酒を飲むも平常とは異なる、即ち無欣なり、依依は種種の義がある、「毛詩」に楊柳依依とあり、柳の柔弱なる意、「韓詩外傳」に其民依依とあり、民を親愛する意、「楚辭」に戀戀兮依依とあり、合つるに忍びざる貌、今は「楚辭」に據つて合つるに忍びざる意を云ふ、應の赴く地は建康即ち古の楚地なり、邈邈は遠き貌、「楚辭」に神高馳之邈邈とあり、「晉書」に揮、筆如高麗高麗邈邈とあり、乃ち親れども見えざる意味、之子之遠、良話曷聞、今日、離分後は良話を聞く節はずと結ぶ、今韻十二文、

昔我云別倉庚載鳴、

昔我云に別る、倉庚載ち鳴く、

今也遇之霰雪飄零、  
大藩有命作使上京、  
豈忘晏安王事靡寧、

今也之に遇ふ、霰雪飄零す、  
大藩命あり、使を上京に作さしむ、  
豈晏安を忘れん、王事寧きこと靡し、

【注解】云別は、「毛詩」に猗華云其の云で、此地とは異なることと知る可し、倉庚は、「毛詩」に出て居る鳥、黃鳥、黃鸝、商庚、聖黃、楚雀、搏黍の異名多し、漢人は其の啼聲を形容して、睨睨、恰恰、緜緜、圓圓と云ふ、日本の黃鸝とは全く別なり、法華經を唱ふるウグヒスは漢土に無し、今也遇之、今日も昔日別れた時期、即ち倉庚の鳴く節に遇うたとなり、霰雪は暴雪即ち大雪なり、「アフレ」と「ユキ」の二種にはあらず、邦人は一種と二種と混する誤多し、注意を要す、大藩は即ち大國、有命は「毛詩」の文字、下句の王事と連環する、作使上京、京は天子の住する地、上の字を冠らす所以、京は「毛詩」に乃親于京とあり、京は丘なり、丘は高絶なるを以て、大の意味を加へ、遂に天子の居所に轉用したるなり、豈忘晏安、王事靡寧、此の二句は「毛詩」小雅の豈不懷歸、王事靡寧の意を學ぶ、是の故に晏安の二字は懷歸の意味なり、普通に解釋するときは、晏安は君子の爲さざる所、忘るるを以て可とす、然るに豈忘れんやと言ふに於ては、頗る不合理の事となる、是を以て是を懷歸の意と爲せば極めて合理のものとなる、「毛詩」の意、乃ち孝子が家に歸り、父母妻子と共に安らかに生活せんとて、歸を懐ふ、但し王事は私事と異なる、臣と爲つて君の爲めに奔走するは臣の道なり、故に私事は輕く、王事は重し、其の重きものの爲めには、父母を歸寧することも合せて置かれねばならぬ、蓋し其の事は忘るるにはあらず、如何せん王事の重大責任あるに於てをや、靡寧を寧と改めたるは韻脚の爲めなり、豈は「モロイ」乃ち堅固の反對、寧は「ヤスシ」乃ち寧と殆んど同義、退いて晏安の可きを忘るるにはあざざるも、王事は益す以て靡略に出來ずとなり、今韻八庚と九青は古通韻なり、

慘慘寒日。肅肅其風。

慘慘たる寒日、肅肅たる其風、

翩彼方舟。容與冲冲。

翩たる彼の方舟、容與として冲冲、

勗哉征人。在始思終。

勗めよや征人、始に在つて終を思へ、

敬茲良辰。以保爾躬。

茲の良辰を敬し、以て爾躬を保て、

【注解】 慘慘は憂懼憔悴の貌、悲痛恨毒の意義、元來は人事に關し、天事に關せず、轉用して寒日に付與したるなり、肅肅は本義敬也、而して嚴、疾、毅等の意義を有す、鳥飛颯の義もあり、乃ち慘日嚴風の冬期に當つて參軍が行くなり、翩は汎と同じ、ウカミ流ルノ貌、方舟は一片舟なり、『毛詩』に汎彼柏舟の句法、容與は『楚辭』の語、閒適を意味する、我が先儒は「オモムロ」と訓ましむ、冲冲は元來虛也、「ムナシ」が本義、轉じて「ウゴケ」、方舟の搖動する貌を云ふ、前句の慘慘、肅肅を承ける字面として不調和なる感が無きしもあらず、紀曉嵐や屈復翁なりせば一筆勾斷するならん、齊東野語に作る本あり、或は可ならん、勗哉征人、參軍の氣をハゲマスなり、在始思終、讀んで字の如く、君子は始終志の變らざるを云ふ、敬茲良辰、慘慘たる寒日、肅肅たる冬期、決して良辰と言ふべからず、前後不調和極まる、淵明でもなければ、痛極を嘆せしむる所なり、以保爾躬、『毛詩』に天保定爾の句法、身體を大事にし玉へと注意しての語、今韻一東、答參軍六首、大抵『毛詩』を學びしもの、毛詩を讀むと少しも異ならざるなり、沈歸愚曰く、締造良韻、於三百篇、太難不得、太背不得、太離則失其源、太有祇襲其韻、淵明は其れ善く毛詩を學びし者か、

【題義】 答も酬と大異無し、龐參軍が贈詩に對し、此の詩を以て返答せられしなり、

【大意】 琴あり之を弾じ、書あり之を讀み、倦み來れば園卉に水を灌ぎ、以て獨り自から娛しむ、而かも我には猶ほ良友ありて、居も亦遠からず、日日往來して美酒を酬盃し、且好言を陳述して毫も隔

意無し、一日見ざるときは、起居如何と心思に勝へず、何ぞ料らん此の良友が役人と爲りて上都に使用するに至る、之を送りて途中に至り、離別の酒燕を開くも、平生欣欣として飲むが如きにあらず、況んや霰雪は飛び、寒日は慘、北風は肅、送者の情、征者の心、是に於て如何ぞや、而かも王事は私事にあらずして重し、征かざる可らず、幸に其の躬を保護して誤ら無からしめよとなり、

勸農 六章

農を勸む 六章

悠悠上古。厥初生民。

悠悠たる上古、厥の初めて民を生ずる、

傲然自足。抱樸含眞。

傲然として自ら足り、樸を抱き眞を含む、

智巧既萌。資待靡因。

智巧既に萌し、資待因靡し、

誰其贍之。實賴哲人。

誰か其れ之を贍はす、實に哲人に頼る、

【注解】 梁の昭明太子は、淵明を讀して、不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>躬耕爲<sub>レ</sub>恥と言へり、淵明は恥と爲ぬのみならず、農耕を大に勸奨したるなり、此の點に於て、孔子の君子謀<sub>レ</sub>道不<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>食の語は、淵明の喜ばざる所、學也諒在其中、は、農民の喜ばざる所、淵明が生活の道に於て安全を謀りしことは、良に明白のものなり、勸農は乃ち生活安定の爲め作りしもの、悠悠上古は、神農氏時代を指す、厥初生民は、『毛詩』大雅の語、支那の傳説には報も無く神農氏の造られしものなりと、傲は樂なり、神農氏時代の百姓は、互に我田引水を爲さざる故、各自に耒耜を執つて樂しみ以て満足したるなり、抱樸含眞、純樸純眞の質、争闘は爲さず、智巧既萌、中古以來は純樸純眞

の實變じて、邪智邪巧と爲る、段段我田引水を互に遣るに至る、實待は多く見ざる成語、余は謂ふ各自の身を保つ事と、靡因は「ルコトナシ」と思ふ、實は「ムスク」、上下相賣の道が壞れ、父が子の田を奪ひ、子が父の田を奪ふに至る、周水より此の如き事あり、然らば争奪盡きず、各自に安堵する能はず、誰其誰之、之を安堵せしめ、以て民の氣を論はす者は誰ぞ、實頼哲人、邪智の農民を救へ、無辜の農民を救ふものは、哲人より外に無し、其の哲人は果して是れ誰ぞや、今韻十一真、

哲人伊何時爲后稷

哲人は伊何、時に后稷と爲す、

贍之伊何實曰播殖

之を贍す伊何、實に播殖と曰ふ、

舜既躬畊禹亦稼穡

舜既に躬畊し、禹も亦稼穡す、

遠若周典八政始食

遠く周典の若し、八政食より始まる、

【注解】此の詩は前首を注解せるの意あり、伊何は如何と同じ、時爲后稷「爾雅翼」に、稷五穀之長、故陶唐之世、名農官爲后稷と、「毛詩」に是生后稷、降之百福とあり、后稷は即ち哲人たるなり、實曰播殖、播殖は農の發達なり、之を贍はす所以は播殖給足にあるなり、舜既躬畊、傳説には舜は親を養ふ爲め躬畊したとある、禹亦稼穡、種を稼、斂を穡と曰ふ、禹は舜に繼ぎて農事に精勵せし天子とす、遠若周典、夏や殷は整頓して見るべき政治無し、整頓し來るは周以來に屬す、八政始食、「書經」に出づ、一食、二貨、三祀、四司空、五司徒、六司寇、七喪、八師、是を八政と曰ふ、漢は日本と同じく農國、歴代の天子、意を此に用ひしは當然なり、今韻入聲、十三職、

熙熙令德猗猗原陸

熙熙たる令徳、猗猗たる原陸、

卉木繁榮和風清穆

卉木繁榮し、和風清穆なり、

紛紛士女趨時競逐

紛紛たる士女、時に趨り競ひ逐ふ、

桑婦宵興農夫野宿

桑婦宵に興き、農夫野に宿る、

【注解】熙熙は徳の外面に表はれたるを形容する語、「毛詩」の注に光也とあり、躬畊したる舜徳と天地の徳とを含んで稱したる語、「毛詩」に顯顯令徳とあり、令は善と同じ、猗猗は、美盛の形容と、長の形容と二義あり、今即ち原陸の廣大美盛を讚稱しての語なり、卉木繁榮、土地が肥沃なれば、卉木の繁榮するは當然、和風、人の身體に適する風、即ち三月四月の風、清穆は風にも通じ、亦人にも通ず、其人清穆なれば人の徳を稱する形容、紛紛は茶れて條理なきを云ふ、士女、ツマラマ凡士愚女なり、趨時競逐、中流以上で生活する者は、天地の徳を私して、時好を逐ひ、競者を競ふ、桑婦は養蠶する農家の婦、宵興は夜の未だ明ならざるに興る、前者は娛樂、後者は辛苦、圓明は此の辛苦者に同情する、農夫野宿、古代の農民は正直に動く、眞に同情の價値あり、今韻入聲一屋、

氣節易邁和澤難久

氣節邁ぎ易く、和澤久うし難し、

冀缺攜僮沮溺結耦

冀缺僮を攜へ、沮溺耦を結ぶ、

相彼賢達猶勤墾畝

彼の賢達を相るに、猶ほ墾畝に勤む、

矧茲衆庶曳裾拱手

矧んや茲の衆庶、曳裾拱手せん、



【注】氣節は時節と同じ、易遇は易過と同じ、百年二百年も須臾なり、春夏秋冬は實に轉眼の間のみ、和澤は二義あり、大舜の世の様な時代はイッパツも無し、或は住き氣節は一年の中イッパツも無し、難久、乃ち須臾に過ぎ去る、冥は國の名、缺は人の名、儻は儻偶、二人相携ふること、冥國の缺と云ふ人は夫妻して共に耕作するなり、『左傳』僖三十三年の條下を見よ、此の細君が夫君を助けしことを記す、沮溺は長沮と桀溺と二人なり、『論語』微子十八に詳かなり、二人稱許して孔子を嘆せしめしなり、相は「ミル」と訓む、彼冥達は冥缺と長沮と桀溺とを指す、鹽は丘鹽、田中の高處を云ふ、吹は秋の正字、矧は況と同義、茲衆庶、普通人を指す、前司の賢達と相應する、曳樹拱手は、爲すこと無く、アラアラ遊ぶこと、人間は活動する爲め出世する、アラアラ無意義に生活する徒輩は、禽獸以下と謂ふ可し、此の篇詩として別に佳處もあらざるが、農事を獎勵する爲めに全力を盡くして作りしものとす、晉末眞面目に働く人少なく、大抵は他人の領土でも掠奪する考を持つて居る者多かりしなり、淵明が「論語」に反對してまで、此の豪語を吐きしなり、上卷二十五有の韻、

民生在勤勤則不匱

民生は勤むるに在り、勤むるときは匱しからず、

宴安自逸歲暮奚冀

宴安自逸ならば、歲暮奚ぞ冀はん、

儻石不儲飢寒交至

儻石儲へず、飢寒交至る、

顧爾儔列能不懷愧

顧ふ爾儔列、能く愧を懷かざらんや、

【注】在勤、勉勵すべきが民生の第一義とす、不匱、勉勵の結果は必ず富む、匱は匱乏なり、宴安自逸、活動せず坐して以て天下の物を監食する徒を指す、歲暮は字の如く、歲の暮と限るにはあらず、要するに結果の意味、但し農事を獎勵するが本意なるを以て、米の倉庫に滿つるは歲暮の字面が的確たるなり、奚冀、諒情の人間が歳入の多きを冀うた所で、何の益も無し、儻石は一儻と

石、齊人は嬰即ち瓦瓶を名けて儻石と云ふ、一斛を受ける道具、儻石は良に言ふに足らぬ具なり、然るに此の儻石すら儲ふるを得ざるが、惰民や惰農の常態なり、飢寒交至、飢は寒となる、寒は飢となる、交至、以て知るべし、顧爾は諸子弟を顧みて戒むるなり、儔列は儔輩と同義、能不懷愧、此の語は勤勞者には不必要なり、宴安自逸の徒には必要なり、去聲四賓、

孔耽道德樊須是鄙

孔は道德に耽り、樊須是れ鄙しむ、

董樂琴書田園不履

董は琴書を樂しみ、田園履れず、

若能超然投迹高軌

若し能く超然ならば、迹を高軌に投じ、

敢不斂衽敬讚德美

敢へて衽を斂め、敬しく徳の美を讚せざらん、

【注】孔耽、耽は耽溺と成語して、樂を十二分に取り取る場合に用ふ、『毛詩』に士之耽兮樂也とある、所謂樂を過ぎての樂、君子は取らず、然るに淵明は此の惡字を以て孔子に與ふ、耽字あり、說字あり、何ぞ耽と曰ふを用ひん、孔子云、君子謀道不謀食、耕也饑在其中矣、學也諍在其中矣、君子憂道不憂貧、總て物質を抑へて、精神を揚げし言句なり、物質は人慾の私、孔子が教を待たずして人人皆知る、是を以て聖人は精神を重んずることを説き、時代を救うたものなり、然るに淵明は田園の荒蕪を憂ふるが故に、孔子の説をまで批評するに至りしなり、樊須は、孔子に道を問はずして、農を問ふ、孔子は道が背く所より、樊須を鄙しめし者なり、『論語』子路篇に、樊須請學稼、子曰、吾不知老農、請學爲圃、吾不知老圃、樊遲出、子曰、小人哉樊須也、孔子も呆れて小人哉と鄙しめしものなり、董は漢の董仲舒、此の人大學問あり、琴書を樂しんで、以て物質慾を強求せず、田園不履、孔子と董仲舒とは農事を輕視したとの意、又此の二人は田園の味を知らぬとの意、若能超然、孔と董との如く、普通人間以外に超然たる人は

格別であるが、意、投進高軌、遂は身跡、高軌は田園の反對、敢不傲世、敬讓德美、二句一讀法なり、狂は衣冠、敢は正しうする、孔子と董仲舒の如きは、縱令ひ田園に足を入れなくとも、德の美は別に存するを以て、貧む可きは貧むがとの意に歸する、他人が農事を鄙しめしとは同一に見ずとなり、上聲四紙の韻、

【題義】 漢土は農を以て國本と爲す、上古の堯も舜も禹も皆稼穡の道を獎勵せり、而かも後世往往之を卑しむ、或は懈怠するに至る、勸農の詩、以て此の懈怠を戒むるにあり、

【大意】 有史以前の生民は、其の質幹朴真にして、彼此相争ふこと無し、上古より以來、各の智巧を生ずるに依つて、生活も不安の別あるに至る、是に於てか哲人即ち后稷の如き人出でて農耕を教へ、而して舜、而して禹、皆稼穡を躬らす、然るに後世に及び、農耕の時節は極めて快適なるを以て、多くの士女は唯遊樂を是事とし、桑婦や農夫が田畝に在つて日夜苦辛するを知らず、此等の徒は良に以て悲しむべし、試に冀缺や沮溺の如き賢人を看よ、共に農事に精勵したる人にあらずや、國家の平治する基は農事の爲めに民生が能く勤勉するに在り、勤勉する者は富を致し、怠懈なる者は賤しきを致す、賤しきときは飢寒直ちに至る、爾等は能く之を勉めよや、孔子は道德を説き、董仲舒は琴書を樂しみ、農事を輕視するが如きも、箇は是れ聖賢、美德は別に存するなり、但吾人は宜しく農事に精勵すべし、

命子 十章

命子 十章

悠悠我祖、爰自陶唐。

悠悠たる我祖、爰に陶唐よりす、

邈焉虞賓、歷世重光。

邈焉たる虞賓、歷世光を重ぬ、

御龍勤夏、豕韋翼商。

御龍夏に勤め、豕韋商を翼く、

穆穆司徒、厥族以昌。

穆穆たる司徒、厥族以て昌

【注解】 我が子を戒命する時、我祖は陶唐を謂ふにあらず、陶の字より其の祖宗を説き出すなり、日本人が誰彼の別無く、我が祖は神武より出づと云ふの類、陶唐は堯帝を指す、堯初め唐侯と爲り、後、天子と爲つて陶に都す、故に陶唐氏と曰ふ、邈焉は遠悠の義、虞は堯に繼ぎて天子と爲りし舜を謂ふ、有虞氏、實は賓客なり、堯の子が舜の朝に賓客として、待遇せられしをいふ、歷世重光は、堯の子孫、世世、美稱ありしをいふ、御龍、夏の禹王の後、夏に孔甲なる王あり、劉累なる者之に事ふ、此の人龍を養ふを學ぶ、孔甲之に姓を賜うて御龍氏と曰ふ、龍の一雌死す、番かに醜にして以て孔甲に食はしむ、復之を求む、累懼れて逃る、御龍氏逃れて魯山に隠る、祝融の後、豕韋に封ぜられ、商の武丁之を滅し、以て劉累の冑を封ず、翼商、翼は輔翼、商は即ち殷なり、以上、堯と舜と禹と成湯の五世を擧ぐる、司徒は少昊の時の官名、唐虞以後之に因る、周時、六卿の一、漢時、三公の一、陶氏の族の由来する所を曰ふ、昌は昌隆なり、今韻七陽、

紛紛戰國、漠漠衰周、  
鳳隱於林、幽人在丘、

紛紛たる戰國、漠漠たる衰周、  
鳳林に隠れ、幽人丘に在り、

逸蚪遠雲奔鯨駭流

逸蚪雲を逸り、奔鯨流を駭かす。

天集有漢眷予愍侯

天有漢に集まる、予が愍侯を眷る。

【注解】紛紛は秩序の紊亂を云ふ、曠國は周の平王以後を指す、漢漢は暗暗と同じ、平王、犬戎に逼られ、西都より東都に徙る、周室の衰微、復振せず、風靡於林、明時には風靡出でて舞ふ、惑世には風靡去つて出でず、幽人在丘、丘は塵俗を離れたる處、幽人即ち賢人は逃れ去る、逸蚪、角の無き龍を蚪と曰ふ、逸雲、駭流、蚪は天上を恣亂し、奔鯨は海中を狂暴す、以て海内盜賊縱橫し、衆庶安んずる能はざるを喻ふ、天は天の徳、集は集來、周秦、徳を失うて以て漢に集まるを云ふ、國に有の字を付す、有周有秦の類、眷予愍侯、李公煥曰く、高帝（漢）功臣表、開封愍侯陶合、左司馬を以て漢に従ひ、代を破り侯に封ぜらる、今韻十一尤。

於赫愍侯運當攀龍

於赫たる愍侯、運攀龍に當り、

撫劍夙邁顯茲武功

劍を撫して夙邁、茲の武功を顯す、

書誓山河啓土開封

書山河に誓ひ、土を開封に啓く、

臺臺丞相允迪前蹤

臺臺たる丞相、允に前蹤に迪ふ、

【注解】赫は武の光、愍侯は陶合、運は時運天運、攀龍は時運の乘龍すべきに當りてなり、撫劍、武を以て起つ、夙邁は非凡を曰ふ、書誓山河、漢の高祖、功臣と盟うて云ふ、黃河、帶の如く、泰山、嶺の如くなりとも、國以て永く存し、爰に荀商に及ばんと、此の盟を謂ふ、啓土開封、漢の景帝の三年八月、陶青、丞相と爲り、開封侯と爲る、啓土は侯と爲りし事を云ふ、臺臺は勉勵の貌、

【毛詩】に臺臺文王とあり、迪は順ふなり、前蹤は前賢者の蹤跡を指す、此の時ば、陶合と陶青と二顯先の徳を頌するが主意なり、功は今韻一東、古は二冬と通韻なり、

渾渾長源蔚蔚洪柯

渾渾たる長源、蔚蔚たる洪柯、

羣川載導衆條載羅

羣川載ち導き、衆條載ち羅す、

時有語默運因隆窳

時語默あり、運隆窳に因る、

在我中晉業融長沙

我が中晉に在り、業長沙に融す、

【注解】渾渾は數義あり、今は滾滾と同じく、大水流るる貌を取る、長源なれば水盡きず、蔚蔚は鬱鬱と同じ、草木の盛なる貌、洪柯は大本、長源なるが故に羣川載導し、洪柯なるが故に衆條載羅す、交攻の句法知る可し、此の二句は陶家が種種に分派したるを喻ふ、時語語默、語は盛を喻へ、默は衰を喻ふ、隆は盛、窳は衰、窳は凹なり、李公煥曰く、二句陶青の後、顯者有らざるを言ふ、在我中晉、西晉東晉合して十五代一百五十六年、中晉は乃ち東晉の初を指す、東漢を中漢と言ふの類なり、陶侃字は士行、晉に仕へ軍に在ること四十一載、位八州都督、長沙郡公に封ぜらる、成帝（東晉第三主）の咸和九年に薨す、大司馬を追贈し、諡して桓と曰ふ、陶侃は廣州の刺史（西晉愍帝の時）と爲り、晉に在り、輒ち朝に百變を齊外に運び、暮に齊内に運ぶ、人其の故を問ふ、曰く、吾方に力を中原に致さんとす、爾等優逸す、恐らくは事に堪へざらん、故に自ら勞するのみ、今韻下平聲六麻、

桓桓長沙伊勳伊德。

桓桓たる長沙、伊勳伊德、

天子疇我專征南國。

天子我に疇い、専ら南國を征せしむ、

功遂辭歸臨寵不忒。

功遂げ辭して歸る、寵に臨んで忒はず、

孰謂斯心而近可得。

孰か謂ふ斯心、而近して得べしと、

【注解】桓桓は武の貌、「毛詩」周頌に桓桓武王とあり、疇は音「チウ」訓「ウネ」麻田を謂ふ、轉じて種種の義を爲す、今の句は官位勳等、其の家に世襲せしむるを謂ふ、故に嗣の意を以てす、我は陶侃を指す、專征南國、功遂辭歸、蔣丹臣曰く、侃、前史多く其の純臣にあらざるを諷す、而して此の心問ふ可からざる者あるは、陶翁蓋し祖の爲めに諱むなり、温謙山曰く、晉成帝の時、蘇峻反逆す、宮闕城と爲る、侃、身督將たり、手強兵を振る、即ち當に滂位師に誓ひ、畢力賊を討すべし、乃ち始め願命に與らざるを以て辭と爲す、繼ぎて襲登を遣り、復兵を追ひ僞に還らんと欲す、君臣の大節に於て、未だ盡さざる所あり、君子之を惜む、幸にして温謙再三進へ説き、卒に能く感悟し、我服して舟に登り、賊を降して功を成し、以て其の過を補ふ、論者謂ふ、長沙の心、議す可き無からず、長沙の績、寔に没すべからず、心跡固相掩はず、讀者其の輕重の間を權衡て可なり、寵は恩寵、又君寵、又は音「トク」訓、褒也、差也、陶侃が君寵は論者と異ならざるなり、孰謂斯心、而近可得、長沙公が心期の高遠は凡人の得べき所にあらずと斷するなり、入聲十三職の韻、

肅矣我祖慎終如始。

肅たり我が祖、終を慎む始の如し、

直方二臺惠和千里。

直方二臺、惠和千里、

於皇仁考澹焉虛止。

於皇仁考、澹焉虛止、

寄迹風雲冥茲愜喜。

迹を風雲に寄せ、冥たり茲の愜喜、

【注解】慎終如始、「易」に原始要終とあり、「大學」に事有終始と、君子は終始一貫の志を要す、直方二臺、惠和千里、直方は正直を持すること、二臺は未詳、諸注曰く、陶茂、武昌の太守と爲つて恩威を垂る、所謂千里に恩惠を施すを云ふ、於是歎辭、皇は父なり、仁考の人なり、其の人の性澹懷虚心、焉と止は語助、寄迹風雲、泰平の世に身を托せざりしを云ふ、冥は實に作る本あり、愜は「イキドホル」なり、喜は「コロコブ」なり、天下の爲め愜り、又天下の爲め喜ぶ、此の愜喜を冥合すとなり、上聲四紙、

嗟余寡陋瞻望不及。

嗟余寡陋、瞻望及ばず、

願慚華髮負影隻立。

願みて華髮を慚ぢ、影を負うて隻立す、

三千之罪無後爲急。

三千の罪、後無きを急と爲す、

我誠念哉呱聞爾泣。

我誠に念ふかな、呱として爾が泣くを聞く、

【注解】寡陋は寡陋固陋と成語す、智識無く陋しき人間、瞻望は有形にも無形にも通ず、古人を瞻望するも不及、遠山を瞻望するも不及、今は古人なり、華髮は白髮、自分を顧みて徒らに老大と爲るを慚づ、隻立は孤立と同じ、三千之罪は種種の罪なり、三千を以て數の極度とす、三千の美人、三千の禮義皆同じ、孝經に、五刑之屬三千、而罪莫大於不孝とあり、無後爲急、種種の罪の中、子無きを以て第一と爲す、孟子に、不孝有三、無後爲大とあり、我誠念哉、我は其の事を至誠に念ふ、遂に呱呱として爾が泣くす

るを聞く、入聲十四韻の韻、

ト云嘉日占亦良時

トも云に嘉日、占も亦良時、

名汝曰儼字汝求思

汝を名けて儼と曰ふ、汝を字して求思といふ、

温恭朝夕念茲在茲

温恭朝夕、茲を念うて茲に在り、

尙想孔伋庶其企而

尙想ふ孔伋、庶其くは企而せん、

【注解】 龜甲を灼りて以て兆を取るがト、兆を視て以て吉凶を知るが占、トも占も共に嘉日なり、良時なり、儼は儼然、儼格、恭敬と爲す、「儼」に儼若、思とあり、名字共に「儼」より来る、温にして恭、知にして朝夕、長く言へば一生誼、行住坐臥、念を茲に在くなり、孔伋は孔子の孫、名は子思、長じて以て子思の如くなれかしと求思の字を以てす、此の企は及ばざるを知ると雖も、而かも庶ふ所の理想は此に在るなり、今韻四支、

厲夜生子遽而求火

厲夜子を生む、遽にして火を求む、

凡百有心奚特於我

凡そ百心あり、奚ぞ特に我に於てのみならん、

既見其生實欲其可

既に其の生を見る、實に其の可きを欲す、

人亦有言斯情無假

人も亦言へるあり、斯情假無し、

【注解】 厲は醜惡なり、「莊子」の天地篇に、厲の人、夜半に子を生み、遽かに火を取つて之を視る、其の己に似るを恐る、凡百有心、誰も彼も心ある者は人情として然るなり、奚特於我、我獨り其の癡癡を爲すにあらず、厲の人も、美の人も大抵然るなり、既に生れたる以上は、其可即ち萬事其の子の可からんことを欲す、人亦有言、斯情無假、假は眞の反對、子に對する親の情は眞にして假にあらずるなり、上聲二十韻の韻、

日居月諸漸免於孩

日や月や、漸く孩を免る、

福不虛至禍亦易來

福虚しく至らず、禍も亦來り易し、

夙興夜寐願爾斯才

夙に興き夜に寐ね、願ふ爾が斯才を、

爾之不才亦已焉哉

爾が不才なるも、亦已焉哉、

【注解】 日居月諸は「毛詩」の語なり、孩は嬰孩乳兒なり、日月を閱すれば、孩が幼と爲る、福不虛至、福は至るやうにせずんば至らず、禍亦易來、禍は來らぬやうにして來る、願爾、才と不才は天分なれど願ふ所は才即ちハタラキある人と成れかし、而かも不才も亦如何とするなし、漢の鄭康成、子を誠めて曰く、若し忽忘不識なるも、亦已焉哉と、淵明が本づく所、張續曰く、先生高節獨善、宅志超曠、世事を視る、一も其の中に芥すべき無し、獨、諸子に於て、拳拳訓誨し、命子の詩あり、責子の詩あり、昔儼等の疏あり、先生既に厚く射に積み、薄く世に取る、其の後宜しく興る者あるべし、而して六代の際、茲に開ゆる所無し、此亦先生所謂天道幽且遠く、鬼神茫昧然たる者なりと、上平聲十灰の韻、

【題義】靖節が子に命戒するに、陶家の祖先が歷代國の爲め族の爲め努力せられ、其の功德が今日に及びしなれば、汝等も之を忘るる勿れ、而して親として我は已に前途は久しからず、汝等を思ふの情は古の厲夜生子の人よりも甚し、哀しい哉汝等は不肖なり、不肖なりと雖も、是亦天命なり、已焉哉と嘆する外無しとなり、

【大意】命子十首、首首盡く祖先の功業を敍して、陶家の子孫たる者は、其の功業を繼承して之を墜さざらしめんことを説示したるに在り、其の意は注解に於て明かなれば屋上架屋の無用なるを覺ゆ、蓋し前六首は祖先の功業を敍し、後四首は兒輩を戒しめしものなり、儒の教としては後嗣無きものは重き罪ありとす、幸にして我は爾等を生むを得たり、而して爾等の命名にも心痛したり、恰爾不恰爾の事にも心痛したり、而かも運命は如何ともするなし、但動むると勤めざるとに由つて、禍福の相違を來たす、是の故に爾等は克く勉めよや、

歸鳥 四章

歸鳥 四章

翼翼歸鳥晨去於林

翼翼たる歸鳥、晨に林を去り、

遠之八表近憩雲岑

遠く八表に之き、近く雲岑に憩ふ、

和風不洽翻翻求心

和風洽からず、翻を翻して心を求む、

順儔相鳴景庇清陰

儔を顧みて相鳴く、景清陰を庇ふ、

【注解】翼翼は翅を垂るる貌、夕に歸る鳥、晨には林を出て去つて食を四方に求む、八表は四方と四維、岑は岑嶺、和風不洽、面處皆可なれば和風洽なるも、或は和風の吹く處もあり、或は和風の無き處もあり、翻翻、歸るに如かずと翻を翻へす、求心、此の二字眼目なり、鳥に托して以て我が放心を求むるを云ふ、順儔相鳴、儔無くんば已みなん、有らば必ず相鳴び相鳴く、景は影なり、庇は庇護、清陰、棲息する亦所を擇ぶ、下平聲十二侵の韻、

翼翼歸鳥載翔載飛

翼翼たる歸鳥、載ち翔り載ち飛ぶ、

雖不懷游見林情依

游を懷はずと雖も、林を見て情依る、

遇雲頽頽相鳴而歸

雲に遇うて頽頽し、相鳴いて歸る、

遐路誠悠性愛無遺

遐路誠に悠なり、性愛遺るる無し、

【注解】翼翼載飛は「毛詩」の字面、雖不懷游、見林情依、此の八字は解釋に據つては種種の義に取れるも、要は蕩游にあらざるも、林中の好を見れば、又蕩游の情起らざるを得ずとなり、頽頽は相上下すること、遐路は遠き路、性愛無遺、林を見て情の依る、即ち性愛の致す所、此の林中の性を遺忘すること無し、歸路の悠なる、何ぞ亦問ふの要あらん、陳情文曰く、飛ぶに倦むも還るを知るの意、之を言ふ然然と、今韻五聲、

翼翼歸鳥、馴林徘徊。

翼翼たる歸鳥、林に馴れて徘徊す。

豈思天路、欣及舊棲。

豈天路を思はん、舊棲に及ぶを欣ぶ。

雖無昔侶、衆聲每諧。

昔侶無しと雖も、衆聲毎に諧ふ。

日夕氣清、悠然其懷。

日夕氣清し、悠然として其れ懷ふ。

【注解】馴林、一本相林に作る、馴が面白し、馴れたる者は佳なり、故に徘徊する、天路は高し、高處を思はざるにはあらず、而かも舊棲の住きには及ばざるなり、及の字は返るの意味に見よ、舊棲に返り、昔侶は已に無し、而かも衆聲每諧、新知の人人、我と諧和し、會て隔意無し、乃ち日夕氣清、悠然として其れ懷を遣るべきなり、沈歸愚曰く、亦衆聲に諧ふ、自から曠懷あり、此は是れ何等の品格ぞと、何義門曰く、鄭曲の琴琴、中朝の舊侶の多才たるに如かずと雖も、然れども眞趣則ち相入るなり、今韻八齊九佳十灰は古通韻なり、

翼翼歸鳥、戢羽寒條。

翼翼たる歸鳥、羽を寒條に戢む。

遊不曠林、宿則森標。

遊ぶに曠林ならず、宿するときは森標あり。

晨風清興、好音時交。

晨風には清興す、好音時に交はる。

增繳奚施、已卷安勞。

增繳奚ぞ施せん、已に巻んで安勞す。

【注解】戢は音「シフ」訓「チサメル」戢なり、寒は寒木、條は枝條、寒木の枝條に戢ふとなり、遊は何ぞ必ず曠林ならん、宿則森標、森は寒木、標は樹末なり、弋人之を物色するも得ず、晨風清興、好音時交、此の清き心地は同好以外は誰も知る能はず、增繳は「イアルミ」弋して射る矢なり、矢と網と繋りし道具、専ら鳥のみ捕ふるなり、奚施、森標中此の「イアルミ」の施しようも無し、已卷、卷は倦なり、倦めば歸宿して勞を安んず、已卷安勞を一本に且暮遺忘に作る、已卷の方を可とす、明の鍾伯敬曰く、全篇語言の妙、往往累言、脱き出ださざる處、數字、四兩略盡く、一種清和婉約の氣、筆墨の外に在る有り、人をして心平らかに累消せしむと、沈歸愚曰く、他人、三百篇を學ぶ、繼にして直し、風雅と日に近し、此れ三百篇を學ばず、清にして曠、風雅と日に近しと、温謙山曰く、愚案するに、酒明、當時に在りて、寔に歸侶罕なり、興を歸鳥に托す、寓意微なり、沃氏謂ふ、四章空に懸つて義を起し、海市蜃樓の如し、比體を以て賦體と爲す、當世託す可き無きを見るにあらざるは無し、鳥の飛ぶに倦んで還るを知るに如かず、其の計甚だ得たりと爲す、末句心事畢く見はると、

【題義】歸鳥、人は出づるを知つて、歸るを忘るる者多し、出でては功を爲す、功遂ぐれば退かざるべからず、鳥は晨出でて、晩に歸る、歸るを認ること無し、幸に人は鳥の如く歸るを認る無かれと、其の意を歸鳥の題に託して歌ふものなり、

【大意】四章共に歸鳥に託して、我が興を寓したるものなり、彼の歸鳥を看るに、或は八表に飛び去り、或は倦んで雲岑に憩ひ、或は侶を求めて鳴き、雲邊に相韻頰するも、其の離れんことを恐れて、互に鳴き以て互に其の安否を知らしむ、而かも其の雲路の遠きに遊ぶも、豈に其の歸宿の處を忘れんや、夕には乃ち羽を戢めて林に歸り、此に於て勞を安んず、此中增繳に捕らるる憂も無し、亦捕へんと欲する者も術無し、是れ正面の解釋なり、内面より之を言へば、鳥は鳥にあらずして淵明其人なり

り、林は林にあらずして其の安居の舎なり、鳥にして林に歸るを忘るれば、矰繳に罹るの憂無しとせず、人にして舎に歸るを誤れば、讒害に會ふの恨無しとせず、幸にして鳥は林に歸り、人は舎に歸り、羽を戢め、心を收む、遊ぶに舊友無しと雖も、憩ふに清陰の在る有り、自然は我と背かず、悠然として其の懷を遺るに足る。

陶淵明集卷一終

陶淵明集卷二

詩五言

形影神 三首并序

形影神 三首并序

貴賤賢愚莫不營營以惜生。斯甚惑焉。故極陳形影之苦。言神辨自然以釋之。好事君子共取其心焉。

貴賤賢愚、營營以て生を惜まざるは莫し、斯甚だ惑ふ、故に極めて形影の苦を陳し、神辨自然を言ひて以て之を釋く、好事の君子、共に其の心を取れ、

形贈影

形影に贈る

天地長不滅。山川無改時。草木得常理。霜露榮悴之。

天地長く滅せず、山川改時無し、草木常理を得、霜露之を榮悴す、



謂人最靈智獨復不如茲  
 適見在世中奄去靡歸期  
 奚覺無一人親識相追思  
 但餘平生物舉目情悽洟  
 我無騰化術必爾不復疑  
 願君取吾言得酒莫苟辭

謂人は最も靈智、獨復茲の如くならず、  
 適ま世中に在るを見るに、奄去して歸期靡し、  
 奚ぞ覺らん一人、親識相追思する無きを、  
 但平生の物を餘し、舉目情悽洟、  
 我に騰化の術無し、必爾復疑はず、  
 願はくは君吾が言を取り、酒を得ば苟辭する莫れ、

【注解】形と影と神との三に就いて其の長短得失、各の別に理あるを感ず、而して形と影とは言ふに足らず、但其の神の第一義たるを被へたるなり、形影、形より影に示す、天地山川は悠久なり、遼遠なり、或は誠あり、或は改まることあるも、そは萬年億年に屬す、百年千年は不滅無改を以て定義とす、然るに草木は期節に因つて或は榮え、或は悴ふ、是を常理とす、此の間に在りて、人は其れ如何、天地の間に最靈智と稱せらる、其の最靈智たる人間は、天地に似たるや、山川に似たるや、或は草木の如くなるや、幾んど茲の草木の如きものなり、十年二十年三十年長くして七十年八十年は在世するも、其の七十八十も矢の如く過ぎ去る、奄忽に去つて哀しい輪復歸期靡し、奚覺無一人、親識相追思、二句一讀法なり、百年には大底同一黃泉に歸す、一人として残りて以て追思する者は無し、相追思は一本に豈相思に作る、但餘平生物、生前愛する所の物、或は琴瑟、或は衣帶、皆後人の涙の種ならざるは無し、舉目、目に入る物總てなり、滿は涕の流るる形容、騰化術は死せずして以て仙人の類と化する術、我には此の術無し、必爾は必然と問義、此の如きの常理は不復疑、必ず之を信するなり、願ふ者は形、君は影、取吾言、上に言ふ所の吾言を好取せよ、得酒、酒以て應真の事を忘る、一刻も之を忘るるを可とす、苟辭、カリソメにも辭し玉ふこと莫く、三杯四杯重れ玉へとなり、清の何處門曰く、

此篇言ふ、百年忽ち過行し、草木と同じく腐つ、此形必ず恃む可らず、當に時に及んで行樂すべし、下篇は其の意に反し、言ふ善を立つるに如かずと、上平聲四支一韻、

【題義】總て人間は形と影と神との三を離れず、而して物欲の爲めには、形と影とが日に營營とせざるべからず、而かも神より之を言へば、時に閒閒たらざるべからず、然りと雖も、形から之を言へば、營營せざるべからざるを以て營營するなり、影も亦形に和して、其れに贊成する、神として此の兩者を判斷して見れば、汝等の營營たるは、多く惡事にして、善事にあらず、且汝等は消滅する時あるを知らずや、形の爲め死にも生にも乃至禍福にも皆心を役す、役せらるる心は命せらるる儘に動くと雖も、心の君主たる所の神より之を見れば、自然に背くこと甚し、形を忘れ、影を忘れて以て始めて自然に返る、自然に返る處、是物欲の隨つて生ずる無し、神が形影の主張する説を破却して以て神の神たる所以を釋明するなり、

【大意】高くして人類、卑くして物類、凡そ生ある者は、皆是の生を愛惜せざるは無し、營營として勞し、汲汲として役す、皆是の生の爲ならざる無し、何の爲めに許の如く營營汲汲たらざる可からざるか、我に於て其の理を發見するに甚だ惑ふ、自から惑ふを以て、又自から之を解かんと欲す、其の解くに神辨自然を以て之を釋く、好事の君子は、語句の末節に拘泥せずして、釋者の精神即ち心を樹み取れよ、凡そ生物は形影神の三より成る、而して形は象なり、容色なり、外に形はるるものなり、

是の故に三者の中管管たる者の第一位を占む、乃ち形は主、影は客なり、主以て客に贈る、天地も山川も草木も人類も皆形象あるに於ては同一なり、然るに天地の形は不滅なり、山川の象は無改なり、草木は榮悴ありと雖も、人類に比較すれば其の形を保つこと長し、然るに人は生物の最靈智と稱聞せらるる身を以て天地山川草木の長きに如かず、世に在る五十年六十年を以て奄ち此の世を去つて遂に歸期なし、一人として百年も二百年も残り、以て前人を追思する者あらんや、我より唯一二年遅れる者が、前人の遺物などを見て、流涕するに止まるのみ、況んや我に仙人と化する術も無し、其の形の滅するは必爾にして、疑ふべき餘地無し、我滅すれば君（影）も共に滅せざるを得ず、幸に形の有る間に於て酒を飲み以て興を遣らん、君も請ふ飲酒を辭すること莫れ。

影答形

影形に答ふ

存生不可言、衛生每苦拙、  
誠願游崑華、邈然茲道絕、  
與子相遇來、未嘗異悲悅、  
憩蔭若暫乖、止日終不別、

存生言ふ可からず、衛生毎に拙に苦しむ、  
誠に崑華に遊ばんと願ふも、邈然として茲道絶ゆ、  
子と相遇來、未だ嘗て悲悅を異にせず、  
蔭に憩うて暫く乖くが若きも、止日終に別れず、

此同既難常、黯爾俱時滅、  
身沒名亦盡、念之五情熱、  
立善有遺愛、胡爲不自竭、  
酒云能銷憂、方此誠不劣、

此同じきも既に常なり難く、黯爾時と俱に滅す、  
身沒して名亦盡く、之を念うて五情熱す、  
善を立つれば遺愛あり、胡爲ぞ自から竭さざる、  
酒云に能く憂を銷す、方此誠に劣ならず、

【注解】存生不可言、何の爲めに生ざるや、ツナナ道理は言論するの要なし、而かも衛生に就いては意を注がざるを得ず、如何せん我は斯の道に拙なり、願ふ所は崑崙と華嶽とに遊び、以て仙に變化の術を問はんと、而かも邈然として茲道は斷絶し、問ふ可き由なし、與子、影が形を指して子と曰ふ、相遇來、未嘗異悲悅、子と遇うて以來、今日に至るまで、子悲めば我も悲み、子悦べば我も悦び、嘗て反すこと無し、憩蔭、子が樹の蔭や物の蔭に休憩するときは、暫時乖くが若きも、止日終不別、子が日下に止立するときは必ず相伴ふ、此同、形あるときは必ず影あり、故に同と曰ふ、而かも此の同が永劫に常とは言ひ難し、形常住ならず、影も亦常住ならず、黯爾は色を失ふ貌、クラクとなるなり、俱時滅、形滅すれば影も亦滅す、身沒名亦盡、身後の名あるは、百に一人のみ、多くは身と名と俱に盡く、念之、此の死没の事を念へば、五情は五性ならん、肝と心と脾と肺と腎となり、喜と怒と哀と恐とにはあらざるべし、熱、耐へられざるが故に熱す、立善有遺愛、善行を立つるときは後世をして遺愛あらしむ、胡爲は俗語の「ドワイフマケテ」に當る、不自竭、ナセ努力せざるや、酒云能銷憂、前章に酒は辭する莫れと云ふ、此に酒は銷憂と云ふ、眞酒にあらざるも、酒にあらずんば憂を銷する具は無きなり、方此誠不劣、此の如くにして酒を飲む、決して鄙劣ならざるなり、陳情父曰く、正論を以て相格す、與子の四句、形影相依を寫して致ありと、温謙山曰く、上篇の長不滅、無改時は、即ち所謂存生なり、遊崑華は變化の句に答へ、立善は即ち立德、立功、立言なり、聖賢の實際此に在り、故に之を以て形を責む、末二語は得酒の句に答ふ、入聲九屑一韻、

【大意】客たる影、主たる形に答ふ、曰く、人の生を保存するの理、言語を以て之を説明するは難し、

試に看よ君(形)が其の生を衝る道に於て極めて拙劣なることを、君が平生の志願は崑崙や華嶽の仙境に遊ばんと欲するに在るが、其の志願は水泡に歸し、空しく茲の道断絶したるにあらざるや、而して君悲めば我も悲み、君悦べば我も亦悦び、君が樹陰に在るときは暫時離るるも、君が日下に止まるときは必ず伴ふ、此の如く厚く交はる、尋常の交りと言ふべからず、然りと雖も君が没するに於ては、我も亦没せざるべからず、其の没滅の事を念へば、五情熱し、昂奮せざる能はず、而かも滅没は已むを得ず、冀はくは善事を立てて貞名を世に遺さん、精努力し玉へ、憂は幸にして酒あり以て之を消す、飲んで以て亂に及ばず、何ぞ飲むことを卑まんや、

神釋

神釋す

大鈞無私力萬形自森著、  
 大鈞無私の力、萬形自から森著、  
 人為三才中豈不以我故、  
 人は三才の中と爲す、豈我を以ての故ならずや、  
 與君雖異物生而相依附、  
 君と物を異にすと雖も、生れながらに相依附す、  
 結托善惡同安得不相與、  
 結托善惡同じ、安んぞ相與にせざるを得ん、  
 三皇大聖人今復在何處、  
 三皇は大聖人なり、今復何の處に在る、

彭祖愛永年欲留不得住、  
 彭祖永年を愛す、留まらんと欲して住まざるを得ず、  
 老少同一死賢愚無復數、  
 老少同一死、賢愚復數ふる無し、  
 日醉或能忘將非促齡具、  
 日に酔うて或は能く忘る、將齡を促す具にあらず、  
 立善常所欣誰當爲汝譽、  
 善を立つるは常に欣する所、誰か當に汝が爲に譽むべき、  
 甚念傷吾生正宜委運去、  
 甚だ念ふ吾が生を傷るを、正に宜しく運に委せ去るべし、  
 縱浪大化中不喜亦不懼、  
 大化の中に縱浪し、喜ばず亦懼れず、  
 應盡便須盡無復獨多慮、  
 應に盡すべきは便ち須らく盡すべし、復獨り多慮無し、

【注解】 神釋、形と影の間答を神が之を解釋する、大鈞は洪鈞なり、造化轉運を謂ふ、無私力、一箇の物に私せず、萬形自森著、形の字或は理に作り、或は物に作る、三字皆通ず、文字の佳を取るべし、森然として顯著なり、天地人之を三才と謂ふ、人は中間を占む、豈不以我故、我は神が自ら謂ふ、人は神あり、木偶にあらず、神は靈なり、是の故に三才の中を占む、與君、形と影を指して君と云ふ、雖異物、形影は共に有形、神は無形、物體同じからず、物體同じからざるも生而相依附、神と形と影との三は生より死に至るまで依附して離れず、結托善惡同、神が善なれば形影も亦善、神が惡なれば形影も亦惡、安得不相與、此の密著の關係、分離の仕方は無し、三皇は太昊伏羲氏と炎帝神農氏と黃帝軒轅氏となり、大聖人、一は木德、一は火德、一は土德を以て萬世の聖人と仰がる、今復在何處、太古に此の如き聖人出世せしことと聞く、而かも今何處に在るやを知らず、彭祖愛永年、三皇より後、堯帝出づ、此時に覆經なる人あり、顓頊(五帝の一)の支孫と稱す、堯の妾を楚に逃む、堯之を彭城に封す、夏を歴、殷を經、周に至る、年八百歳と謂ふ、欲留不得住、八百九百千萬と長きが如きも、遂には留まるを得ず、老少同一死、不良も善良も、老年も少年も、死は公

平なり、賢人も愚人も皆同じ、日酔は日日酒に酔うて、憂患の事を忘れ、醉は昏人發語の詞、非徒醉具、酒は決して促醉即ち年を促疾する具にあらず、立善常所欣、善は前章の如く徳と功と言となり、誰當爲欣、汝は形と影を指して云ふ、甚念は痛念と同じ、痛念するときは反つて吾生即ち我が身體を損する、是の故に正宜委運去、天運に委せてクモクモすること勿れ、縱浪は放浪と同じ、大化中、大鈞造化の中に放浪して、不喜亦不懼、喜の爲め心を動かされ、懼の爲め亦動かされず、塵盡復須盡、此の句は二義に解釋するを得、形影が盡くべき時來らば盡く、(一義)義務の盡くすべきは盡くすべし、(二義)淵明が平生の志より言へば第二義が確實ならんし、題目の上から判すれば、第一義を取るべきか、無復獨多慮、淵明山曰く形影は盡くる時あり、惟神は則ち不滅と、但の意亦第一義に依る、去聲六御一韻、聖廟公曰く、四明、世人憂擾、畢世德業を事とせざるを悲む、故に神釋に托して以て之を警むと、葉夢得曰く、死生禍福を以て其の心を動かさず、泰然として順に委す、乃ち神の自然を得、此れ釋氏謂はゆる斷常の見なり、此の公、天姿超邁、眞に能く生に達して世を遺ると、葉が評極めて善、但し釋氏所謂斷常見と曰ふは大に誤る、佛敎を學ばざる失、斷常見は極めて惡意味に用ふ、然るを善意味に取りたるは笑ふ可し、

【大意】形と影との問答を、精神之が審判を爲すなり、造化は固無私なり、無私なるが故に其の力は普遍なり、萬物盡く形影は森著たり、而して人は天地の中を占む、其の中を占めて生を保つ所以の者は、我即ち此の神あるを以ての故ならずや、我と形影とは物異なる、我は形無し、見るべからず、君は形あり、見るべし、然れども生れると同時に神と影とは依附して離れず、形影善なれば神も亦善、形影惡なれば神も亦惡なり、其の關係や極めて深大なり、唯形影は早晚滅没せざるべからず、三皇も彭祖も、聖人も凡人も、賢者も愚者も、留まらんと欲するも能はず、是に於てか我は形影に勸告する、前彼の如く三皇も彭祖も、遂には滅没する、然らば生前に憂を忘るる爲に、酒を飲み、人間の

總てを天運に委せ置き、唯我が善と思ふことを作し、以て身後の芳譽を遺せ、其の身後の芳譽を遺すに至るの力は、我即ち精神である、精神は大化の中に縱浪して不滅なり、其の不滅こそ形影をして徒生せしめざりし功なり、故に盡くすべきを盡くして、無用なる憂苦を爲す莫れ。

九日閒居 并序

九日閒居 并序

余閒居愛重九之名秋菊盈園而持醪靡由空服其華奇懷於言

余閒居、重九の名を愛す、秋菊園に盈ち、而して持醪由靡し、空しく其華を服して、懷を言に寄す、

世短意常多斯人樂久生。  
日月依辰至舉俗愛其名。  
露淒暄風息氣澈天象明。  
往燕無遺影來雁有餘聲。  
酒能祛百慮菊爲制頽齡。

世短くして意常に多し、斯人久生を樂ふ、  
日月辰に依つて至る、舉俗其の名を愛む、  
露淒として暄風息み、氣澈して天象明か、  
往燕遺影無く、來雁餘聲あり、  
酒能く百慮を祛け、菊は爲頽齡を制す、

如何蓬廬士、空視時運傾。

如何蓬廬之士、空しく時運の傾くを視る、

塵爵恥虛譽、寒華徒自榮。

塵爵虚譽を恥ぢ、寒華徒に自ら榮ゆ、

斂襟獨閒謔、緬焉起深情。

襟を斂めて獨り閒謔、緬焉深情起る、

棲遲固多娛、淹留豈無成。

棲遲固に多娛、淹留豈成ること無からん、

【注解】九日は九月九日、日月皆陽の數に値ふ、因つて以て節の名とす、俗其の名を嘉し、以て長久に宜しと爲し、置酒興懷す、後漢より行はる、重九は三月三日を重三と言ふが如し、重陽とも茱萸節とも吹花節とも曰ふ、後漢の桓景、費長房に隨つて遊學す、長房謂つて曰く、九月九日、汝が家に厄あり、急に家人をして各の綈囊を作り、茱萸を盛り、臂に繫け高きに登り、菊花酒を飲ましめよ、此の禍消す可し、景、其の言の如くす、家に還れば、雞犬俱に暴死す、即ち淫酒なり、服は餐服、酒不事にして今は無し、但し菊の華のみを服ふ、是の故に感懷を言辭に寄す、世短意常多、漢詩に、人生不滿百、常懷千載憂、此の十字を備明は五字にて言表す、斯人は多くの人を指す、樂久生、久生を樂ふ爲めには全力を傾注して、樂を飲み過ぎて死んだ天子が深山あり、備明は聊か之を嘲ける、日月依辰至、日月の會を辰と曰ふ、俱に九の數に會す、舉俗、普通一般の多くの俗人、愛其名、重九の音が長久の音に通ずるを以て愛するなり、支那人も日本人も西洋人も、一般の俗は、古今同一なり、露凄、洋曆の九月は猶ほ炎暑なれど、古曆の九月は最早秋なり、露氣降りて凄其、吹風即ち暖風息んで、冷風と代る、氣清天象明、秋氣は清澄なれば、天象極めて澄明なり、往歳無遺影、燕は春晚に來りて、秋日には已に去る、來雁有餘聲、雁は秋に來りて冬に去る、今正に其の來時、餘聲ある所以、怯は顯ふなり、節ふなり、節くるなり散らすなり、菊花を水に漬して飲めば、節く疾を癒し毒を逐はす、制類節なる所以、爲を「コレ」と訓む、大典師の發明に由る、蓬廬士は陶明自身を云ふ、時運傾、晉室の運傾き去るを觀るに思ひざるなり、爵は酒杯、榮は香「ライ」調「ハ」トヒ、酒樽の別名なり、爵は塵に汚れ、榮は塵し、飲まんと思ふも由なし、寒華は菊花、徒自榮、酒を飲んで賞する人なし、花も

亦徒らに榮ゆるのみ、斂襟は衣襟を正斂する、閒謔、閑も亦徒なり、塵を發して詩を誦ふ、緬焉は一義は遠望の貌、二義は思慕の貌、今は此の兩義を含む、起深懷、公の爲めの情、私の爲めの情にあらず、棲遲は遊息なり、固多娛、憂中の娛、強ひて此の語を發するなり、淹留豈無成、淹は久しなり、滯るなり、他郷に居りて淹留するも、何事か成る所あらんとなり、下平聲八庚一韻、節は九青年れども、古韻通用す、沈隱曰く、起句、古詩の人生不滿百の二句に比すれば、餘り得て要に簡、要に益なりと、

【題義】九日は九月に限る、故に九月の字を付せず、是の日は重陽、宜しく酒を斟み、菊を餐し、佳節を賞すべきなり、然るに菊花は我が園に發けども、誰一人酒を持來る者なし、是に於てか唯空しく九華を服し、其の凄情を歌ふのみ、

【大意】人世は信に短し、而かも何事か作さんと欲する意多し、是の故に久生即ち長生を希望する、而かも日月は駸駸として進み、春も過ぎ、夏も去り、遂に秋九月九日に至る、九日の名や舉俗一齊に愛す、炎風は息み、露氣は凄、天象は明かにして、天氣は清澄なり、燕は影無しと雖も、雁は餘聲あり、是の日に當りてや、所謂佳節、酒を飲んで百慮を祛くべし、菊英を餐して以て長生を計るべし、舉俗皆此の如くなるに、蓬廬の士、獨空しく時運の傾くを視るは抑も如何ぞや、我豈是の佳節を喜ばざらんや、如何せん、爵は塵れて、鼻には酒無し、唯中庭の菊花のみ開きて榮あるものの如し、聊か之に對し閒謔し、國家の爲め深情を起し、此の如くにして固より娛多し、亦何ぞ酒の有無を言はん、淹留の間には何物か得ることもあらう、何事か成ることもあらう。

歸田園居 六首

田園の居に歸る 六首

少無適俗韻。性本愛邱山。  
 誤落塵網中。一去三十年。  
 羈鳥戀舊林。池魚思故淵。  
 開荒南野際。守拙歸園田。  
 方宅十餘畝。草屋八九間。  
 榆柳蔭後簷。桃李羅堂前。  
 曖曖遠人邨。依依墟里煙。  
 狗吠深巷中。雞鳴桑樹巔。  
 戶庭無塵雜。虛室有餘閒。  
 久在樊籠裏。復得返自然。

少うして俗韻に適する無し、性本邱山を愛す、  
 誤つて塵網の中に落ち、一去三十年、  
 羈鳥舊林を戀ひ、池魚故淵を思ふ、  
 荒を南野の際に開き、拙を守りて園田に歸る、  
 方宅十餘畝、草屋八九間、  
 榆柳後簷を蔭ふ、桃李堂前に羅す、  
 曖曖たり遠人の邨、依依たり墟里の煙、  
 狗は吠ゆ深巷の中、雞は鳴く桑樹の巔、  
 戸庭塵雜無く、墟室餘閒あり、  
 久しく樊籠の裏に在り、復自然に返るを得たり、

【注釋】少は少年、少年の時より俗韻とは適せざる性質なり、邱山は俗人の愛するものにあらず、自分は到底俗人と和する者にあらず、然らば塵網即ち官途に奔走せしは如何と難する者あるときは、是れ誤つてなりと當ふべきのみ、一去三十年、三行論の誤字ならんと劉瓛言へり、或は謂ふ十三年の誤と、或は謂ふ己の誤と、太元十八年起つて州縣酒と爲る、時に年二十九、而して彭澤の令と爲りて歸る、歲かに一星霜、是を以て知る三十年の誤は明白なることを、已十年か、歳二十年か、十三年か、此の三者の中ならん、羈は籠なり、羈に作るは籠る、鳥戀舊林、鳥すら本を忘れず、況んや人に於てをや、陸士衡の句に、羈鳥戀舊林とあり、羈を以て塵に代ふ、味あり、劉瓛にはあらず、池魚思故淵は張景陽の句に、行雲思故山とあり、行雲を改めて池魚と爲す、亦味あり、鈍賊にはあらず、開荒南野際、南野が荒蕪せるを開拓し、以て肥沃なる園田と爲さん、人は拙と笑はん、我は拙を守らん、此の園田こそ我に於て舊林なり故園であるなり、方宅も草屋も非常に異ならず、十餘畝の建物と八九間の建物とがある、榆は「ニレ」なり、榆と柳と桃と李と一方は深庭を爲し、一方は羅列す、春光正に爛漫たり、曖曖は「美味の貌」「楚辭」に時曖曖其將羅とあり、遠人邨、遠ければ僻味なり、依依は合るに及びざるの貌、墟は種種の義ある、高買貨物輻湊の處を墟と云ふ、然れども墟里は墟落と同義、墟落を曰ふなり、狗吠深巷中、雞鳴桑樹巔、古詩に、雞鳴高樹頭、狗吠深宮中とあり、宮を巷と爲し、高を桑と爲すのみ、而して其の差千里、塵雜無ければ餘閑ある所以、虛室は室に長物無きなり、久在は十年間を云ふ、樊籠は人の塵網に轉せらるるは猶ほ鳥の樊籠に繋がるると同じ、返自然、自然は本性の好む所、今此に歸す、其の情幾何ぞや、十五劃と一先は古通韻なり、曖曖以下二十字は、自然の儘を自然に做して、奇絶言ふ可からざるものあり、張爾公曰く、老死して返るを知らざる者多し、淵明が此の詩を讀み、能く慨然たらずやと、

【題義】城市は不自然の事多し、園田は自然の味多し、而かも自分は役人と爲つて久しく此の自然に背き居りしは、今其の誤りなりしを知る、是に於てか十三年前の自然に歸り、其の生を遂げんとなり。  
 【大意】我は少年の時より通俗と適せず、性質は邱山の靜趣を愛して、通俗の榮達を好まず、一旦、誤つて俗界の塵網中に落ち、其の塵網中に起臥すること十有餘年、フト本性に反りて之を省れば、羈鳥は飛ぶに倦んで舊林を戀ひ、池魚は泳ぐに倦んで故淵を思ふ、鳥魚すら此の如し、人豈然らざらん

や、是に於て乎、田圃に歸耕して、荒蕪を開拓し、真拙を固守せん、十餘畝の宅、八九間の屋、而かも楡柳あり、桃李あり、前後高低皆好し、郷里の氣分、暖暖たり、依依たり、狗吠ゆるも盜兒の爲にはあらず、鶏鳴くは時正に午を報するなり、彼も自然、此も自然、一として不自然のもの無し、我は久しい間、不自然の生を送りしが、今日よりは復自然に返るを得たりとなり、

野外罕人事、窮巷寡輪鞅。

野外人事罕に、窮巷輪鞅寡し。

白日掩荆扉、虛室絕塵想。

白日荆扉を掩ひ、虛室塵想を絶つ。

時復墟曲中、披草共來往。

時に復墟曲の中、草を披きて共に來往す。

相見無雜言、但道桑麻長。

相見て雜言無く、但道ふ桑麻長すと。

桑麻日已長、我土日已廣。

桑麻日に已に長じ、我が土日に已に廣し。

常恐霜霰至、零落同草莽。

常に恐る霜霰の至るを、零落草莽に同じ。

【注解】 輪鞅は他に多く見ざる成語、鞅は元來騾驢なりと注して、牛馬の頸に繋げる「チカラガハ」とす、輪は車輪なること勿論、然らば、窮巷には貧人耕種の馬車の類事しと解すべし、窮巷の考を待つ、塵想は、塵山は「圓覺經」を引いて注す、南明何ぞ必ず經に據らん、虛室本無塵なり、無塵なればこそ思想も亦塵を著けずとなり、墟曲は墟里と同じ、披草共來往、田夫野老と往來する、桑麻の日日生長する談話以外、要に塵談には及ばず、耕作に努力するが故に我土も日已廣、田圃が廣大となる、然らば恐るる者は霜

霰のみ、折角努力して生長せしめたる桑麻も霜霰に會うては、零落して見る影も無く、全く草莽と同じく何の用も爲さざるに至る、南楚の俗、耕を稱して苻と曰ふ、劉辰曰く、是の時朝廷將に傾危の禍あらんとす、故に是の喻あり、靖節田野に處すと雖も、國を憂ふるを忘れざる、此に于て亦見るべし、上層二十二卷の韻、

【大意】 歸田後の事を敘す、野外は城中と異りて、人間の俗事あること罕に、窮巷は盛都と異りて、貴人の車馬來ること寡し、主人は白晝に門扉を啓かず、虛室に端坐して以て塵想を起さず、來往する者は、田夫野老のみ、相見て談笑するは、但桑麻が生長する事のみ、而かも努力の結果、我が所有地は日に廣大となる、常に恐るる所は霜霰なり、折角生長せる桑麻も之が爲め零落して、草莽と同じく無用のものとなればなり、

種豆南山下、草盛豆苗稀。

豆を種う南山の下、草盛にして豆苗稀なり、

晨興理荒穢、帶月荷鋤歸。

晨に興きて荒穢を理し、月を帯び鋤を荷うて歸る、

道狹草未長、夕露沾我衣。

道狹くして草未だ長せず、夕露我が衣を沾す、

衣沾不足惜、但使願無違。

衣の沾ふは惜むに足らず、但願をして違ふこと無からしめん。

【注解】 種豆南山下、草盛豆苗稀、李公煥曰く、漢書(卷六十六)楊惲傳に、田後南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而爲其、詩意本づく所とす、勞して功無きことを言ふ、晨興理荒穢、勞して功得きを知るも、猶ほ早晨に興きて以て荒田の蕪穢を整理する、而し

て黃昏に月を帯びて歸る。山道なれば狭し、草も長すと言ふ可からざるも、夕露は降りて我衣を沾すに至る。衣なぞの沾は食者せず、但我が願ふ所の遠はざらんことを、互の長大となるを願ふのみ、東坡曰く、夕露衣を沾す故を以て、其の願ふ所に違ふ者多きなりと、温勝山曰く、帯月の句、眞にして善、詩中に畫ありと謂ふ可しと、平聲五聲の韻、

【大意】南山の下に於て豆を種殖したり、而かも豆は長せずして、但艸のみ長ず、而かも努力を辭せず、早朝に起き往きて以て荒穢を整理す、終日努力して黃昏に月光を帯びて歸家す、山道なるが故に狭くして艸未だ長せず、艸上の露氣は頻りに我が衣の裳を沾す、若し努力の功が空しからず、豆が長するに至らば、衣裳の沾ふなど何ぞ惜むに足らんや、而かも晉と稱する豆は遂に長せず、淵明の功は空しかりしなり、

久去山澤游浪莽林野娛

久しく山澤の游を去てて、浪莽林野に娛む、

試攜子姪輩披榛步荒墟

試みに子姪輩を攜へて、榛を披いて荒墟に歩す、

徘徊邱隴間依依昔人居

徘徊す邱隴の間、依依たり昔人の居、

井竈有遺處桑竹殘朽株

井竈遺處あり、桑竹朽株殘る、

借問採薪者此人皆焉如

借問す薪を採るの者、此の人皆焉如、

薪者向我言死沒無復餘

薪者我に向つて言ふ、死沒復餘無し、

一世異朝市此語眞不虛

一世朝市に異ならん、此の語眞に虚ならず、

人生似幻化終當歸空無

人生幻化に似たり、終に當に空無に歸すべし、

【注解】去は舍て去るなり、山澤游は、君子調遊を意味するならん、林野娛は、野人牧童と共に遊ぶを意味するならん、然らずんば山澤と林野と區別する必要は無し、浪は放、莽は粗率、榛は荆棘、荒墟は荒涼たる邱墟を云ふ、隴は「説文」に大坂なり、昔人の居住せし事を聞いては依依の情を遣り、井竈、人の棲息する處は井と竈とは聞く可からず、今は人無くとも石井石竈のみ空しく遺處を保存する、而して桑樹や竹林は唯根株を殘す、薪は桑や竹を括して言ふ、採薪者、當時薪を採るの者、此人は採薪者を指す、焉如は何如と同じ「ドウシヤ」と同ふ、薪者は今生活する人、死沒無復餘、昔採薪者の多くは死沒して餘す所の人は少しと當ふ、一世は人間の一代、異朝市、人間の互市と異ならんや、五十年、六十年、忽忽に過ぎ去るを云ふ、此語は一世異朝市の五字を指す、眞不虛、事實として信すべし、人生似幻化、終當歸空無、「列子」に知幻化之不眞生死也とあり、猶ほ變化と言ふが如し、乍ら觀、乍ら聽るるが幻、終には絶滅して見る能はざるに至る、即ち空無なり、玄初白曰く、先生、釋（佛敎）理に精し、但社（白鹿社）に入らざるのみと、蓋し此の幻化は「列子」より來る、淵明決して釋理に據つて言ふにはあらず、六魚と七虞は古通韻なり、

【大意】山澤は隱遁者の遊びなり、林野は樵農者の遊びなり、隱遁者とは久しく遊ばず、樵農者とのみ近來往復する、時に子姪輩を攜帶して或は荒榛を披きて荒墟に歩し、或は丘壠の間に徘徊して情を遣る、時に突然感に入りたることあり、何ぞや、昔人の舊居是れなり、舊居は即ち廢居、屋内には井竈が頽危の儘存し、屋前には桑竹が朽株を横たふ、凄其の情禁する能はず、就いて問ふ薪を採る者に、



此の家このいえに在ありし人人ひとひとは今いまは皆焉みないづこに如ごときしぞ、同業者どうぎやうしゃの採薪者さいしんしやは答こたふ、其そのの多おほくの人は大抵たいてい死没しほつして、餘あまる所の人ひとは幾人いくじんも無なしと、此これを聞きいて淵明えんめいは思おもふ、人の一生いっしやう一代だいいは朝日あさひの互市ごしに異ことならず、忽たちちにして有あり、忽たちちにして無なし、決けつして古人こじんは吾われを欺あやまざるなり、乃すなはち思おもふ人生じんせいは幻化げんくわと異ことならざることことを、貴人きじんも賤人せんじんも、薪者しんしやも樵者せうしやも、終つひには皆空無みなくうむに歸かへすべきなりと、宜よろしく生前せいぜんに於おいて林野りんやの蟻あしのを求もとむべきなり、

悵悵獨策還崎嶇歷榛曲

悵悵獨策して還る、崎嶇榛曲を歴

澗水清且淺可以濯吾足

澗水清且淺、以て吾が足を濯ふ可し、

漉我新熟酒隻雞招近屬

我が新熟酒を漉し、隻雞近屬を招く、

日入室中間荆薪代明燭

日入つて室中間、荆薪明燭に代ふ、

歡來苦夕短已復至天旭

歡來つて夕短に苦しむ、已に復天旭に至る、

【注解】悵悵は「イミミウラム」なり、策は杖なり、崎嶇は山路の平ならざる貌、山は榛樹多ければ榛曲と云ふ、水清淺、濯吾足、意味は「漁父辭」より來るも、彼は水の濁るを言ひ、此は水の清むを言ふ、漉は音「ロク」訓「コス」なり、「説文」に漉なり、波は波洶、米を漉すなり、新酒を漉ぎ漉るなり、隻雞は字の如く一匹の雞、「魏志注」に祀故太尉橋公文云、承從容約、誓之言、路

有經由、不以斗酒變雞、過相沃爾、車過三歩、腹痛勿怪、雖臨時戲笑之言、非至親之篤好、胡肯爲此辭耶、淵明が據る所なり、近屬は近親なり、日入室中間、荆薪代明燭、荆薪を燒きて以て燭に代ふ、田家の常態とす、歡來苦夕短、已復至天旭、歡談の極、天の曉に達するを知らざるは、亦人間の常事とす、入聲二沃の韻、陳情文曰く、荆薪代燭、眞致懇然、

【大意】乙地甲地を徘徊して、屢ば崎嶇たる榛曲を歴て家に歸る、家は南山の下に在りて、澗水は極めて清淺なり、此に於て吾足を濯ひ、而して後、我が新熟酒を漉し、酒の肴としては一匹の雞あり、以て近親の人を招燕するに足る、夜飲して室中間ければ、荆薪を燒いて以て蠟燭の明に代用す、既にして惟談興の盡くるを知らず、夜の短きを苦しむ、乃ち翌朝の天旭を見るに至る、

種苗在東皋苗生滿阡陌

苗を種ゑて東皋に在り、苗生じて阡陌に滿つ、

雖有荷鋤倦濁酒聊自適

荷鋤の倦むありと雖も、濁酒聊か自から適す、

日暮巾柴車路暗光已夕

日暮柴車を巾ひ、路暗くして光已に夕

歸人望煙火稚子候簷隙

歸人煙火を望む、稚子簷隙に候す、

問君亦何爲百年會有役

君に問ふ亦何をか爲ん、百年會有役あり、

但願桑麻成蠶月得紡績

但願ふ桑麻成り、蠶月紡績を得んことを、

素心正如此開徑望三益

素心正に此の如し、徑を開きて三益を望む、

【注解】 素は阜の正字とす、『詩經』に鶴鳴九臯とあり、澤と同じ、東皋に種ふし苗が成長して以て東阡南陌に彌るに至る、田間の小路を通稱して阡陌と曰ふ、耕作の勞に倦めば、之を慰するに濁酒あり、巾は名刺の場合、キンとなり、勸酌の時「オホフ」響となる、衣を以て車を飾るなり、乃ち柴車を覆ふなり、煙火、黃昏より夜に及べば煙火を認めて以て我が家に歸る、稚子は父の歸るを驚嘆に於て候す、問君、誰を君と指すにあらず、所謂自問自答の辭、何爲、農事に勤勞して結果は何爲ぞと、百年、唯役役として過ぎるのみならずや、但願桑麻成、勞に酬ゆるものは即ち桑麻が立派に成る、置月は倒置の時を謂ふ、『毛詩』に「置月懷柔」とあり、清の謝靈運曰く、吳興（地名）四月を以て置月と爲すと、紡績、置より絹絲を取り、乃ち紡績を得、素心は平生の心、三益は『論語』に益者三友の語あり、此の種苗詩一首は、或は江淹の作と爲し、或は陶明の作と爲し、多少の議論あり、韓子蒼曰く、田園六首、末篇乃ち行役を敘し、前五首と類せず、今俗本乃ち江淹が種苗詩を取つて末篇と爲す、東坡亦其の誤に因つて之を和す、陳述の古本止五首あり、予（子蒼）以爲へらく、皆非なり、當に張相國本の如く題して雜詠六首と爲すべし、江淹雜詠詩亦頗之に似たり、但、開徑望三益の一句、類せずと、温諱山曰く、案するに此の詩通體陶に類せず、雖有荷鋤の句尤も類せず、後人の贗擬たる疑ひ無し、之を細按するに、亦江淹が作にもあらず、韓子蒼が題目を改むるが如きは亦牽強附會のみと、今清潭案するに、陶が作と爲すものも、贗作と爲すものも、共に證左無し、此の句類せずと、後句類せずとして贗と斷する者は、陶公は終身同一語を疊み、同一意を敘するのみと心得る失なり、或る時は此の如し、亦或る時は此の如し、同一事、同一意を繰返すものならんや、余は之を陶明が作と信するものなり、入聲十一陌の韻、

【大意】 苗を東皋に種殖すれば、苗は成長して阡陌に滿つ、鋤畔に倦むときは、濁酒の以て我を慰安するあり、日暮には柴車を巾うて暗路を家に歸る、家人や稚子は其の歸るを驚嘆に仕候するあり、人

あり何爲れぞ此の如くなるやと問はば、即ち答ふ、努力の結果、桑麻も成長して、紡績と爲るの時は來る、此が爲めに努力する素心曾て變せざるなり、而して我は直を友とし、諒を友とし、多聞を友とし、是の三益を希望するなり、

問來使

來使に問ふ

爾從山中來早晚發天目

爾山中より來る、早晚天目を發するや、

我屋南窗下今生幾叢菊

我が屋南窗の下、今幾叢の菊を生ずるや、

薔薇葉已抽秋蘭氣當馥

薔薇葉已に抽づ、秋蘭氣當に馥しかるべし、

歸去來山中山中酒應熟

歸去來山中、山中酒應に熟すべし、

【注解】 使者が天目山中より來るなり、天目山は浙江省臨安縣の西北五十里、壽縣と安吉縣との界に在り、我屋は陶明が我屋の狀態を使者に問ふ、薔薇は薔薇開くや、薔薇は如何、秋蘭は如何と、一は花、一は葉、一は香と各の別に問ふ、使者の答に因つて、早歸去來を想ふ、亦酒も新酒が芳正に熟する期なるを知ればなり、此の詩は明白に陶明が作にあらず、陶明が家は天目山下にあらず、柴桑と同一に見たる者の偽作とす、東坡曰く、晚唐の人、太白が感秋詩に因つて之を偽作すと、郎瑛曰く、此の篇乃ち蘇子美（宋人）が作る所と、嚴澹誤（宋人）曰く、此の篇、體製氣象、陶と類せず、太白が逸詩なるやも知れず、後人漫に取つて陶集に入れたるのみと、荅初白（清人）曰く、此の首、東坡、和み缺く、以爲へらく陶作にあらずと、然れども太白の詩に云ふ、陶令歸去來、山中酒

應、正しく此の篇の結句を用ふ、要ふ可き無しと、陳山（清人）曰く、此の篇、陶の撰實無し、後人の作たる疑ひ無し、  
 【大意】 僞作と斷ずるものに於て、大意を説くは無用に似たれども、詩其の物は脈路貫通するが故に、  
 決して合つべきものにあらず、使者に問ふ、爾は山中より來りしなるが、其の天目を發せしは早晩で  
 ありしぞ、又我が家には曾て菊を培養して居りしが、今日では幾叢の菊が開きしぞ、又蕃薇は如何で  
 ある、秋蘭は如何である、我が心では今や皆其れ好からんと思ふなり、一度好からんと思ふ念が起れ  
 ば、一刻も早く歸去來を歌うて此の處を去らんと思ふ、況んや山中の酒も今正に豊熟の期なるに於て  
 をや、

遊斜川 井序 斜川に遊ぶ 井に序

辛丑正月五日、天氣澄和、風物閒美、與二三鄰曲、同游斜川、臨長流、望  
 層城、魴鯉躍鱗於將夕、水鷗乘和以翻飛、彼南阜者、名實舊矣、不復乃  
 爲嗟歎、若夫層城、傍無依接、獨秀中臬、遙想靈山、有愛嘉名、欣對不足、  
 率爾賦詩、悲日月之遂往、悼吾年之不留、各疏年紀鄉里、以記其時日、  
 辛丑正月五日、天氣澄和、風物閒美なり、二三の鄰曲と、同じく斜川に遊ぶ、長流に臨み、層

城を望む、魴鯉鱗を將に夕ならんとするに躍らし、水鷗和に乗じて以て翻飛す、彼の南阜は、  
 名實に舊し、復乃ち嗟歎を爲さず、若し夫れ層城、傍に依接無く、獨り中臬に秀づ、遙かに靈  
 山を想ひ、嘉名を愛するあり、欣對足らず、率爾詩を賦す、日月の遂に往くを悲み、吾が年の  
 留まらざるを悼む、各の年紀鄉里を疏し、以て其の時日を記す、

【注解】 辛丑は東晉の安帝が隆安五年なり、陶明、年正に三十七、正月五日は人日前二日とす、別に祝日にはあらず、鄰曲は鄰人  
 なり、斜川は地理未詳、或は曰く今の江西南康府なりと、賈庭芝が「斜川辨」に栗里と遠からざる處なるべしと、層城は將曰く後の  
 層屋寺是れなりと、南阜は將曰く即ち廬山なり、山に南北あり、故に南阜と稱すと、名實舊、此の語に據れば賈が説、誤らずと思は  
 るるなり、何故に嗟歎せざるやと問はば、廬山の名の變ぜざるを以てなり、世が新と爲ることを側面に於て嗟歎すればなり、層城は  
 大澤中に獨立するもの故に依接なし、靈山は南阜即ち廬山なり、我が邦人が富士山の名を愛する如く、陶明は廬山なる嘉名を愛惜し  
 たるなり、欣對不足、單に賞するのみにては不足の觀あり、乃ち率爾に筆を執り此の一章を賦す、唯日月は匆匆、此の勝遊も過ぎ易  
 し、是に於て各の年紀と其の鄉里とを書し、後來の記念となす、然るに年紀鄉里の記は今日傳はらざるなり、

開歲倏五日、吾生行歸休、  
 念之動中懷、及辰爲茲遊、  
 氣和天唯澄、班坐依遠流、

開歲倏ち五日、吾が生行くゆく歸休せん、  
 之を念へば中懷動く、辰に及んで茲遊を爲す、  
 氣和して天唯澄む、坐を班して遠流に依る、

弱湍馳文魴、閑谷矯鳴鷗。

弱湍文魴馳せ、閑谷鳴鷗矯たり。

迥澤散游目、緬然睇層邱。

迥澤游目を散じ、緬然層邱を睇る。

雖微九重秀、顧瞻無匹儔。

九重の秀微しと雖も、顧瞻匹儔無し。

提壺接賓侶、引滿更獻酬。

壺を提げて賓侶に接し、滿を引いて更に獻酬す。

未知從今去、當復如此不。

未だ知らず今より去り、當に復此の如くなるべきや不やを。

中觴縱遙情、忘彼千載憂。

中觴遙情を縱にし、彼の千載の憂を忘れん。

且極今朝樂、明日非所求。

且く今朝の樂みを極めん、明日は求むる所にあらず。

【注解】 閑、正月なれば閑、五日を五十に作る本あり、誤認知り易し、歸休は官を罷め家に歸休休息するを云ふ、三十七にして此の語を發するは早しと思へども、謂明としては三十七日に此の念ありしは事實なり、念之、此の歸休の事を念へば、中懷豈撫動せざるを得ん、せめて此の語を遺るには蓋遊を爲し以て慰安を求めん、幸に天氣調和して清澄なり、班は「マカツ」分なり、鄰曲の人と各の舟中に坐を分次して連流に及ぶなり、弱湍は急湍の差弱き處、此の急湍を文動即ち和名の「ナヨシ」細調にして甚だ美、此のナヨシが隨するを見る、而して一方の間谷には鳴「カモメ」が鳴いて而かも嬌、即ち元氣好し、迥澤は遠澤、散游目、遠方を望むを云ふ、緬然も遠方を云ふ、睇は睇なり、顧瞻なり、層邱は層城、雖微九重秀、微は無の意、天を衝くの秀色は無きも、顧瞻無匹儔、雖れば何となく他に匹儔の無き形を呈露す、壺は酒壺、賓侶を接待する、引滿は充分に酒を盛るなり、今後も此の如き詩會あるや不やは知る難はざる所、中觴は、離山曰く、酒中を言ふなりと、縱は自由にすること、遙情は遙懐の情、忘彼千載憂、「古詩」に、人生

不瀟瀟百、常懷千載憂、小人は一時の憂あるも、千載の憂は無し、君子は千載の憂を懐くも、一時の憂は無し、今は暫く其の憂を忘れ、今日此の遊の樂を極むべし、明日非所求、刹那の樂にて是る、何ぞ明日を云爲せんや、下平歷十一尤一韻、層城に就いて更に温離山の説を擧げん、曰く、序中謂ふ所の層城は、名勝志に據れば、層城山即ち鳥石山、屋子懸の西五里に在り、落星寺有り、此に據れば則ち層城是れ山名なり、寺名にあらず、蓋し是の山、落星寺有るのみと、離山又曰く、離城の二字、奇にして録、後幅凄然、絶えんと欲す、感慨之に係ると。

【題義】 正月五日は別に祝日にはあらず、但し正月なり、天氣澄和なり、家に居らん與は出て遊ぶに可し、斜川の水は美なり、層城の望は佳なり、日月の迅速に過ぐるは悲しむべく、吾年の留まらざるは悼むべきも、今日の樂しむべきは則ち樂しむべし、明日の如何は亦求むる所にあらずとなり。

【大意】 正月五日、天氣は好し、風物は美なり、是に於てか鄰人を誘うて斜川に遊ぶ、下を瞰れば長流あり、上を望めば層城あり、高山あり、魴鯉も水鷗も、各の其の性を娛しむ、南阜は我に於て、嗟嘆せざるにもあらず、而かも最も我が平生より愛する所のものは彼の靈山であるなり、今之に對觀して、欣喜を表するに何を以てせん、唯詩を賦するの善きに如かず、既にして思ふ、日月は匆匆、吾が生は限あり、是の遊も記せずんば、後遺忘なからず、乃ち其の年紀を記し、序及び詩を作る、夫れ吾が身は行くゆく歸休すべし、是の歸休の事を念へば、種種の感懐動きて止まず、幸に今日は天氣清明なり、斜川の遊を爲して、聊かなりとも憂戚を散せん、物皆自然を娛む、湍を馳する文魴、谷に矯たる鳴鷗、聳ゆる層邱も、重なる山嶺も、自然ならざるは無し、之に對し、充分に飲み、充分に賞

し、實も侶も、共に備談すべし、今日樂しますんば、明日亦期すべからず、況んや今後此の如きの遊有るや無きやを知らざるに於てをや、

示周續之祖企謝景夷三郎 周續之、祖企、謝景夷、三郎に示す

負痾頽簷下終日無一欣 痾を負ふ頽簷の下、終日一欣無し、

藥石有時閒念我意中人 藥石時有りて閒、念ふ我が意中の人、

相去不尋常道路邈何因 相去尋常ならず、道路邈として何に因る、

周生述孔業祖謝響然臻 周生孔業を述ぶ、祖謝響然として臻る、

道喪向千載今朝復斯聞 道喪びて千載に向なんとなす、今朝復斯に聞く、

馬隊非講肆校書亦已勤 馬隊講肆にあらず、校書亦已に勤む、

老夫有所愛思與爾爲鄰 老夫所愛あり、爾と鄰を爲さんと思ふ、

願言誨諸子從我潁水濱 願うて言に諸子に誨へん、我に潁水の濱に従へ、

【注解】周續之、字は道祖、雁門廣武の人、劉道民、周圓明と共に壽陽三隱と謂ふ、祖企、謝景夷の二人は未詳、後輩たるは明白なり、

り、負痾は痾病と同じ、痾臥の身、一欣無きは普通なり、藥石有時閒、今日は服藥せぬも可いと云ふ日もあるなり、意中人は氣を能く知り合つた人を云ふ、相去不尋常は、我居と彼居と道路相隔たる意なり、邈は道の曠遠を云ふ、何因、馬に因らんか、車に因らんか、周生述孔業、續之は孔子の儒業を述作するに勤勞す、祖と謝とは周生の業を助く可く、響然として臻る、要するに皆同志の士と云ふことなり、道喪向千載、何孟春曰く「莊子」に、世、道を喪ふ、道、世を喪ふ、世、道と交り相喪ふなり、今朝復斯聞、喜ぶべきことは、其の喪へりと謂ふ道を復斯に聞くを得たるなりと、馬隊は、案するに凡そ分列幕を成す者皆隊と曰ふ、「宋史儀衛志」に、行幸儀衛、宋初三駕、皆以待禮事、車駕近出、止用常從、以行其舊儀、殿前司三隨駕馬隊、昭明太子序に曰く、刺史禮節、苦請儀之、出州、與學士祖企、謝景夷三人、共在城北講禮、加以儀校、所住公廨、近於馬隊、是故謂明示詩云云、以て知るべし、講禮の肆にあらざるを、肆は肆と同じ、講習を稱して肆業と曰ふ、禮を講じ、書を校するは良に尙ぶべきが、其の所を得ずと、一揚一抑、以て三人を諷諭するなり、老夫は圓明自分を謂ふ、愛は愛惜なり、爲鄰は我と接近せよの意なり、我は諸子を教誨せん、諸子を教誨するとして、我が舌端を動かすには及ばず、潁水の邊へ諸子を案内する、其の潁水を見れば、諸子は自から悟る所あらん、潁水は河南登封縣西境の潁谷より出で、東南に流れ、禹縣臨潁西華商水を経て沙河と合して東流する、許由は堯が位を禪らんとするを逃れて、箕山の下、潁水の尾に去る、魯の兩生は背て起つて嵩高に従はず、皆潁水の邊に隱る、十一真と十二文は古通韻なり、

【題義】周と祖と謝との三人が靖節と居を近うして棲む、而かも是の三人皆學問を好むの人、靖節は時に病に臥すことあり、慰問して呉れる者は無し、幸に君等三人は、近處なるを以て會談するの便あり、我は近日潁水に遊ばんことを欲す、君等三人は僕と一所に同行し玉へとの意にて、此の詩を作り、以て示せしものとす。

【大意】我身に痾あり、毎日鬱鬱として欣び無きも、時には氣分の好き日もあり、其の氣分の好き日

には、同氣の人を念うて、以て我が鬱を忘る、而かも其の人三人、我と棲居差や遠し、日夕晤語するを得ず、其の人の業は、所謂孔子の道を講じて、已に喪びたりと言はるる道を千載の下に復た回復せんとするにあれば、老夫も其の人を愛せざるべからず、但惜むらくは、其の講經の場處が宜しきを得ざるに在り、若し道を講ずとすれば、願はくは我と鄰曲を結んで以て潁水の邊に来るがよい、

乞食

乞食

飢來驅我去、不知竟何之、  
飢來りて我を驅り去る、知らず竟に何くに之、

行行至斯里、叩門拙言辭、  
行行斯里に至る、門を叩き言辭拙なり、

主人解余意、遺贈副虛期、  
主人余が意を解し、遺贈虚期に副ふ、

談話終日夕、觴至輒傾卮、  
談話日夕を終へ、觴至れば輒ち卮を傾く、

情欣新知歡、言詠遂賦詩、  
情欣び新知歡び、言詠遂に詩を賦す、

感子漂母惠、媿我韓才非、  
感ず子が漂母の恵に、媿づ我が韓才にあらざるを、

銜戡知何謝、冥報以相貽、  
戡を銜んで知る何ぞ謝せん、冥報以て相貽いん、

【注解】乞食は、貧士が富貴を誅す、何ぞ必ずしも陶明が貧事と言はん、飢を饑に作る本あり、飢饉の成語、饑饉の成語は自から

列然、飢饉に遇れば死せざるを得ず、食を乞はざる可からず、何之、何處と定むる無し、東行し南行し、遂に斯里に至る、叩門拙言辭、無心な人に彼べる程苦しき事は天下に二つと無し、言辭に拙は陶明一人のみならんや、乞食職業の者以外は天下皆拙なるべし、然るに主人は敏くも已に余が何の爲め来るやの意を解くなり、遺贈は金貨か銀貨か紙幣か呉れたるなり、副虚期の三字を虚虚來に作る本あり、顧み甲斐の有りしことを言ふ、而かも直ちに辭去せず、談話終日夕、與ふる所の主人と、與へられたる乞者と終日談話する、而かも其の上論は馳走して呉れる、卮も卮と共に和調「サカヅキ」なり、形状が異なるのみ、是の如く優待して呉れば、我が情も歡喜し、主人の新知も歡喜する、言詠遂賦詩、五言の此時成る、感子、子は主人を指す、漂母は漢の韓信が貧時食を恵みし人、主人は漂母の如き情あるも、我は韓信の如き才を有せざるを媿づとなり、銜戡、諺山曰く、銜は感なり、戡は聚なり、感荷の意、冥報以相貽、黄文煥曰く、時代將に易らんとす、英雄無聊、淮陰（韓信）能く漢を輔け楚を滅す、乃ち漂母に報ゆ、然らずんば亦何に由つて報いんや、板蕩陸沈の歎、此に寄託す、生きて志を世上に伸ぶること能はず、乃ち死して志を地下に伸べんと欲す、尙得べきか、果して何物を貽るべきや、東坡曰く、陶明、一食を得、以て主人に冥謝せんと欲するに至る、喜い哉、喜い哉、大に丐者の口腹に頼す、獨余之を哀むのみならず、舉世之を哀まざるは莫し、飢寒常に身前に在り、功名常に身後に在り、二者相待たず、此れ士の窮する所以なりと、今謂ばく、陶明、二姓に事へず、晉に報ゆるに死を以てせんとする志、是に於て顯然、喜い哉、喜い哉、上平聲四支の韻、

【題義】靖節が家に米無き時、出でて他に食を乞ひしもの、然れども其の乞ふの言辭を如何に開いて可きやを知らず、幸に主人は其の意を察し呉れ、食は勿論、酒まで馳走して呉れ、靖節は欣喜の餘り、漢の韓信が漂母に一飯恵まれし事を想像して、必ず其の志に酬ゆるを期すとしたり、

【大意】肉體が餓うれば精神は饑るざるも、肉體の爲には驅られて食を他に求めて去る、食を與ふる家は此處であると定めて有る家は、天下に曾て無し、乞ふ者が目的としたる處に向はざるべからず、

是に於て或る里に至る、而して之を乞ふ所以を斂するに言辭は頗る拙なり、其の態度を察して、主人は相當に之に贈る所の物あり、且酒肴まで備へて之を待遇す、遂に乞者と被乞者と共鳴して、互に詩を賦し以て言詠す、乞者は昔し漂母が韓信に一飯を恵みしことを想像し、而かも我は不才、到底韓信に及ぶべきにあらず、韓信は厚く漂母に報いしも、我は此の恩を報するの期あるなしと嗟嘆するなり、

諸人共游周家墓柏下

諸人共に周家墓柏の下に遊ぶ

今日天氣佳、清吹與鳴彈。

今日天氣佳し、清吹と鳴彈と、

感彼柏下人、安得不爲懼。

感す彼の柏下の人、安んぞ懼を爲さざるを得ん、

清歌散新聲、綠酒開芳顏。

清歌新聲を散じ、綠酒芳顏開く、

未知明日事、余襟良已殫。

未だ知らず明日の事、余が襟良に已に殫す、

【注解】周家とは周訪の一家を言ふ、晉書(五十八)周訪傳あり、陶侃が徵時(家に餘裕の無き時)親に丁(死者ありしなり)、若に葬らんとす、家中、忽ち牛を失す、一老父に遇ふ、謂つて曰く、前園に一牛の山行中に眠るを見る、其の地若し葬らば、位人臣を純めんと、又一山を指して云ふ、此亦其の次なり、當に世に二千石を出すべしと、言ひ訖つて見えず、侃、牛を尋ねて之を得たり、因つて其の處に葬る、指す所の別山を以て訪に與ふ、訪が父死して焉に葬る、果して刺史と爲る、訪より以下三世、益州と爲る、四十一年、其の言ふ所の如しと云ふ、周家と陶家と世に姻すと、然らば親戚關係なるなり、清吹は清風、風の樹木に當りて清く聞ゆる音を云ふ、

鳴彈、鳴は「ナカ」彈は「ウツ」清吹の音を云ふ、柏下人は墓中の人、墓上に松や柏を種うるを常とす、安得不爲懼、墓に對して其言を發せず、懼言を發するは頗る奇とすべし、清歌散新聲、墓下の清士に對して以て清歌を作り、而して新聲を發す、陳腐の歌は吟ぜざるなり、酒を飲み、明日の事は一切忘れ去る、余が襟懷、良とに已に十分に殫くす、上平聲十五韻の韻、蔣丹崖曰く、道首、游樂を言ふ、只事三句、一點周葛、何等の活動簡便ぞ、若し俗手ならば許多感慨の語を下さんと、陳僧父曰く、遠旨簡言、千秋感すべしと、謙山曰く、陶集中、此の種最も高脫、後人未だ歩を學び易からずと、

【題義】親戚なる諸人と、陶家の祖陶侃が未だ富貴ならざる時、恩を受けし周訪が一家の墓を訪うて賦せしなり、

【大意】陶家と周家とは姻戚關係あり、偶ま晴天に乗じて是の周家が墓柏の下に諸人と共に遊ぶ、墓邊の清吹は鳴彈の如く聞ゆ、是れ柏に當る風の音なり、是の音を聞くに連れて、是の柏下に眠る人の清きを感ず、死して是の好墓田あり、周家の爲め歡ばざるを得ず、是に於て清吹し、是に於て飲酒す、人間は總て今日あるを知つて、明日あるを知らず、聊か此の刹那を樂しむべし、襟懷も充分に殫すべきなり、

怨詩楚調示龐主簿鄧治中

怨詩楚調、龐主簿鄧治中に示す

天道幽且遠、鬼神茫昧然。

天道幽且遠、鬼神茫昧然、

結髮念善事、僊俛六九年。

結髮善事を念ふ、僊俛六九年、

弱冠逢世阻。始室喪其偏。  
 炎火屢焚如。螟蟻恣中田。  
 風雨縱橫至。收斂不盈廛。  
 夏日長抱飢。寒夜無被眠。  
 造夕思雞鳴。及晨願鳥遷。  
 在己何怨天。離憂悽目前。  
 吁嗟身後名。於我若浮煙。  
 慷慨獨悲歌。鍾期信爲賢。

弱冠世阻に逢ひ、始室其の偏を喪ふ、  
 炎火屢焚如、螟蟻中田を恣にする、  
 風雨縱橫至り、收斂廛に盈たず、  
 夏日長く飢を抱き、寒夜被無くして眠る、  
 夕に造れば雞鳴を思ひ、晨に及べば鳥遷を願ふ、  
 己に在り何ぞ天を怨まん、離憂目前に悽たり、  
 吁嗟身後の名、我に於て浮煙の若し、  
 慷慨獨り悲歌す、鍾期信に賢と爲す、

【注解】 題詩、意を主として作る詩、楚辭は屈原が楚辭の調子と言ふが如し、漢代已に此の題あり、房中樂とす、(婦人に關するこ  
 とを咏す) 天道幽遠、鬼神茫昧、此の意は孔子の教を祖述する者は孟子でも荀子でも、其の論する所一なり、今何の書に據ると云ふ  
 の要なし、結髪は年少の時、念善事、年少の時より善事を爲すの念を持す、而して僥倖即ち勉強努力すること、六九年、即ち五十四年  
 なり、一本に五十年に作る、弱冠は中年即ち壯年、逢世阻、國の爭亂、家の難苦に逢ふ、始室、年二十、偶妻を喪ふ、繼ぎて翟氏を  
 娶る、炎火屢焚如、其の家屢火災に遇うて損失したるなり、其の上更に中田を螟蟻の爲め荒らされたるなり、螟は「イナメシ」首の心  
 を食ふ蟲、蟻は「イサゴムシ」沙を含んで人を射る、書を爲すこと狐の如し、首を嘗する蟲にあらず、恐らくは狐の誤ならんかと、其の  
 書の上更に風雨の害と爲る、收斂即ち秋の收穫は廛に盈つるに至らず、一夫の居を廛と曰ふ、極めて小なるを言ふ、夏日は飢餓の

憂あり、寒夜は布圍なきの憂あり、是の故に朝夕に造れば早く夜が明ければ可いと思ひ、曉晨に及べば早く日が過れば可いと思ふ、  
 在己、此の不幸に逢ふは己が運命と知る、天の致す所にあらず、怨まざる所以、而かも離憂が目前に悽たるを如何せんや、吁嗟身後  
 名、死して後までも名の稱せらるるが君子の願ふ所、虛名にあらずればなり、名無くして没するは孔子の罪人なり、身後の名は大切  
 な事に屬す、而かも我に於ては浮煙の若く思ふ、知命安分の士も非常の災害に遇へば此の言を發するに至る、淵明としては素心には  
 あらず、慷慨獨悲歌、鍾期信爲賢、鍾子期の子を除く、春秋楚の人、伯牙琴を鼓く、志は高山流水に在れば、子期聽いて之を知る、  
 子期死して伯牙、鼓琴、鼓を絶つ、子期死して復世に賞音の者無ければなり、薛易簡の「正音集」に云ふ、琴の操弄、約五百餘人、  
 多く古人幽憤志を得ざるに輪りて作るなり、今子期知音の事を引いて、而して篇に命じて、題詩楚調と曰ふ、庸つて楚調、辭を爲し、  
 楚歌に據らしめんと欲するにあらずやと、下平聲一先の韻、

【題義】 靖節が一家の不幸、連續して起るを嗟き、怨詩楚調なる漢代の意を借りて來り、賦して以て  
 龐と鄧との二人に示せしものなり、

【大意】 天道は幽遠なり、其の理測知すべからず、鬼神は昧然なり、其の影捕捉すべからず、故に我  
 は虛談空論を避け、結髪して以來、唯善事と思ふことを是れ修め、努力すること五十餘年、中年より  
 世の難苦に逢ひ、始めて娶りし妻を喪ひ、其の上に家は失火の厄に會ひ、所有の田地は凶作の爲め收  
 穫は甚だ少く、夏日食はざる日もあり、冬夜布圍無くして眠り、布圍無くして眠れば、雞鳴の一刻も  
 早きを願ひ、食はざるの日は、一刻も早く夜に入るを願ふ、人としての不運、悲しまざるを得ざるも、  
 是は己が運命、何ぞ天道を怨まん、天道を怨まずと雖も、目前に離憂の逼るを如何せん、身後の名は信



に大切の事なれど、目前の苦の爲めにはソナナ事はドウでも可いと云ふ意が起る、俗の捨鉢になる所から、浮煙の若しと放言する、乃ち慷慨悲歌し、古の鍾子期の如き賢者には我は到底及ばずとなり、

答龐參軍 并序

龐參軍に答ふ 并に序

三復來貺欲罷不能自爾鄰曲冬春再交款然良對忽成舊游俗諺云、數面成親況情過此者乎人事好乖便當語離楊公所歎豈惟常悲吾抱疾多年不復爲文本既不豐復老病繼之輒依周孔往復之義且爲別後相思之資

來貺を三復し、罷めんと欲して能はず、爾より鄰曲、冬春再交、款然良對、忽ち舊游と成る、俗諺に云ふ、數面親と成ると、況や情此に過ぐる者をや、人事好乖、便ち當に離を語るべし、楊公歎する所、豈惟常に悲まん、吾疾を抱く多年、復た文を爲らず、本既に豊ならず、復た老病之に繼ぐ、輒ち周孔往復の義に依り、且く別後相思の資と爲す、

相知何必舊傾蓋定前言

相知何んぞ必ずしも舊きのみならん、傾蓋前言を定む、

有客賞我趣每每顧林園  
談諧無俗韻所說聖人篇  
或有數斟酒閒飲自懽然  
我實幽居士無復東西緣  
物新人惟舊弱毫多所宣  
情通萬里外形跡滯江山  
君其愛體素來會在何年

客あり我が趣を賞し、每每林園を顧みる、談諧俗韻無く、説く所は聖人の篇、或は數斟の酒あり、閒飲自から懽然、我は實に幽居士、復東西の緣無し、物新にして人惟舊し、弱毫宜ぶる所多し、情は通す萬里の外、形跡江山に滯る、君其れ體素を愛せよ、來會何年に在る、

【注解】三復は三度讀む、來貺、貺は「タマフ」賜なり、龐が贈られし時に酬ゆ、欲罷不能は、情に勝へざればなり、爾は龐、其の鄰曲の人と共に親熱の間となりて交を結び、款は誠なり、親むなり、成舊遊、新知が舊知の如く成るを言ふ、俗諺「コトワザ」俗の傳言、何の據も無く言ふこと、數面は「サタメン」度度面會する人は親みを増すとの意、況や親むべき道を知つて親む情に於てをや、而かし人事は好乖くこと多し、分離するは常事とす、楊公は楊水又楊朱と、共に未詳、豈惟常悲、分離を悲むにも種種の情あるべし、吾は圓明、本既不豐、本質が丈夫壯健ならざるを謂ふ、其の上老病の患あり、是に於てか周孔往復の義に依つて、此の時を作り以て別後相思の資と爲すとなり、周孔は周禮に作る本あり、其の義を詳かにせず、何必舊、知己は新知の人にもある、傾蓋は道を行き相遇ふ、車を並べて對語し、兩蓋相切つて下傾くなり、「家語」に、孔子、鄭に行き、程子と途に違ふ、傾蓋して語る、終日甚だ相親む、定前言は解釋に種種區分することを得と雖も、新知も舊知も道を以て交はる者は親むべしとの前言を定むとなり、客は龐も

其の他の人も合せて云ふ、每每は度皮なり、謂明が林園の趣を賞して訪ひ来りしことを云ふ、談書は談話と同じ、無俗韻、儲かる損するの語は無し、所説は聖人篇、「毛詩」は勿論、「論語」なぞ皆聖人篇なり、酒あり對酌して懐然、我は謂明自身、幽居士は暫は處士と言ふがごとし、「禮」に居士錦帶とあり、唐宋以來、華佛の人、多く之を自稱とす、無復東西、官の爲め東西に奔走するは今は無しとなり、物は時物が新なるを言ふ、弱毫は謙遜して言ふ、多所宜、五言の詩を賦し、其の意を敘す、情通萬里外、詩は心聲、其の敘する情は處誼にあらず、形跡澄江山、詩を寄呈するは容易、身親しく訪問する能はず、君は應參軍を指す、愛體素は身體を大事にし玉へとなり、曹子建の詩、王其愛玉體の句あり、來會は何年、字の如し、十三元(國)と十五韻(山)と一先とは古通韻なり、温謙山曰く、陶公の小序、雅合誦す可き多し、序中起數語、何等の纏綴ぞ、人をして神往かしむ、

【題義】龐が靖節に贈りし詩に對して、此の答詩を作る、

【大意】參軍が呪られし書を三復するに、深情掬すべきものあり、是に於て、我よりも復するの念罷まず、抑も爾と鄰曲と爲り、交遊せしは近來の事なれども、舊友も及ばざる親みあり、而かも人事は離合集散が常、爾と乃ち別を語らざるを得ず、吾は持病の爲め憫むこと多年、平日、文を爲らず、本性壯健にあらざる上、老病之に加ふ、感慨生ぜざる能はず、周孔往復の義に依つて、此の詩を爲り以て相思の資と爲す、知友は何ぞ必ずしも舊きを喜ばん、新知にも舊知に勝る者あり、參軍の如きは我と同調の者なり、是の故に我が林園を訪ふこと一再ならず、而して談話の材料は、聊かも俗事に涉らず、談する所多くは聖人の道のみ、乃ち共に飲酒し、共に興懷を遣る、但我は幽しき一居士のみ、東西奔走の縁なし、物候の新なるに遇ふも、我は一舊人のみ、弱毫を以て物候を頌する詩を作る、詩を

作るが故に情は萬里の外に通ずるを知る、我が形跡江山に滞るを恨みず、君は請ふ自愛して、身を傷る勿れ、悲しむらくは來會の何年なるやを知らずとなり、

五月旦作和戴主簿

五月旦作、戴主簿に和す

虚舟縱逸棹、回復遂無窮、

虚舟逸棹を縱ち、回復遂に窮り無し、

發歲始俛仰、星紀奄將中、

發歲始めて俛仰し、星紀奄ち將に中せんとす、

明兩萃時物、北林榮且豐、

明兩時物を萃め、北林榮且豊、

神淵寫時雨、晨色奏景風、

神淵時雨を寫ぎ、晨色景風を奏す、

既來孰不去、人理固有終、

既に來つて孰か去らざらん、人理固に終有り、

居常待其盡、曲肱豈傷冲、

居常其の盡くるを待つ、曲肱豈冲を傷まん、

遷化或夷險、肆志無窳隆、

遷化或は夷險、肆志窳隆無し、

卽事如己高、何必升華嵩、

卽事己に高きが如し、何必しも華嵩に升らん、

【注解】且は一日なり、主簿は官名、各官衙に主簿一人或は二人、以て簿書を整理する、我邦の屬官位の役とす、蓋し高士偉人は此等の官に居る人多し、虚舟、吳融詩曰く、「莊子」に、方舟、河を濟る、虚船(人の居らざる舟)來つて舟に觸るるあり、觸心の人

ありと雖も怒らずと、無心にして觸るるなれば怒る必要無きなり、詩の意は無心にして逸綽を態にす、西も東も本定め無きなり、然らば回復即ち此の處へ繋ぎ留めんと欲するも、其の事は到底不可能なりとなり、發處は干支の夏代せし時を云ふ、始復仰、何孟春曰く、「莊子」に其疾也哉復仰之間と、復仰の出處は莊子なるも、詩意は何を言ふ、始字、一本、若に作る、一本、止に作る、始にしても、若にしても、止にしても意義の解釋頗る難し、要するに從來は逸綽態取り止め無く過ぎしが、今歲の正月よりは大に氣を繋ぎしたりと云ふの意義なり、然るに烏兔匆匆、奄今年も五月の聲を聞くに至る、明兩萃時物は、一本に、南窗翠時物に作る、李鼎神曰く、明兩の句は夏火の候を云ふ、北林榮且豐、林樹の豐茂するを云ふ、神曰く、一本、神光に作る、寫時雨、謙山曰く、案するに七啓、游龍を神淵に觀る、寫は傾くるなり、神淵に時雨が瀟々なり、景色奏景風、景風は南風なり、「淮南子」に、清明風（三月の末の風）至りて四十五日にして量風吹くと、既來孰不去、來る者は必ず去る（正面）生者は必ず死す（側面）人理固有終、始めあり必ず終あるの意、居常は平生と同義、待其盡、來る者の去り、生者の死するは皆盡さるなり、待たざるも亦自然に盡さるなり、曲賦は睡眠のこと、豈復沖、沖は虚、「莊子」に、道沖にして之を用ふ、謂乎萬物の宗の若し、曲賦の中亦自から道に背かざるを云ふ、通化は通り代るなり、佛徒の所謂通化にあらず、夷險は平夷と險阻、靈險は、靈氣と高險、靈氣は「マヤリクガム」なり、高險は「マカケサカン」なり、世路は夷と險とあるも、我が志は全く動かさず、窟窿無き所以なり、即事如已高、即事は日常平易の事、其の日常君子の一動一舉隨て高尚なり、何必升華嵩、華山や嵩山に上らざるも可し、上平聲一東の韻、陳情父曰く、既來の二句、達議の語、又復た自然、沖の字韻初め亮かざるを嫌ふ、韻殊するに固より妨げ無しと、陳評、確言を覺ゆ、

【題義】五月一日に戴主簿が贈られし時に和答して、我が志を敝せしものなり、

【大意】三老の無き舟、何處の岸に著する期無し、我が身跡は、彼の虛舟と同じかりしが、今歲に至りて繋ぐ可き處に繋ぐの必要を知る、而かも時は匆匆、今年も早や夏の節、北林の陰鬱茂するに至る、雨も夏の雨、風も夏の風なり、而かも夏は秋と爲り易く、來者は必ず去る、始あれば終あり、生

あれば死あり、人は到底其の生の盡くるを待たざるべからず、兎角、考へるより曲賦して眠るに如かず、眠中道あり、沖を傷らす、世の遷移變化、平夷險阻、我と何ぞ關せん、日常に此の如く觀察す、已に高志と思ふなり、華岳や嵩山に上りて以て始めて高しと稱せんや、

連雨獨飲

連雨獨飲

運生會歸盡終古謂之然

運生會す盡くるに歸す、終古之を然りと謂ふ、

世間有松喬於今定何聞

世間松喬あり、今に於て定んで何を聞く、

故老贈余酒乃言飲得仙

故老余に酒を贈る、乃ち言ふ飲めば仙を得と、

試酌百情遠重觴忽忘天

試に酌めば百情遠く、重觴すれば忽ち天を忘る、

天豈去此哉任真無所先

天豈此を去らんや、真に任せて先んずる所無し、

雲鶴有奇翼八表須臾還

雲鶴奇翼あり、八表須臾に還る、

願我抱茲獨備俛四十年

願ふに我茲獨を抱きしより、備俛四十年、

形骸久已化心在復何言

形骸久しく已に化す、心在るも復何をか言はん、

【注解】連雨は日日雨天なり、運生、謙山曰く、大運の中、凡そ生ある者、之を運生と謂ふと、會は「マヤマヤ」と訓し、又「カ

「ラズ」と訓す、必然の辭として用ふる場合多し、蓋は必然なり、終古は古今を通じて「常」と云ふ意味、過去現在未來を通じて久遠を謂ふ、謂之然、運生の盡くると言ふ者は古今に一人も之を否定する者は無し、然るに世間に松喬子あり、陶く、松喬子は仙道を傳て不老長生の人と、而かも今日ば其の何處に在るや聞かざるなり、漢の高帝の世の赤松と獻帝の世の王喬との二人なり、故老贈余酒、方言飲得仙、故老の言に依つて、上の仙人の句に照應せしむ、試酌百情遠、重翮忽忘天、酒中の真味、誰か細く之を解するや、重譯山曰く、重翮は累歎なり、謂ふ初酌の時、百情交も集り、重翮の後、天機運べて忘るるなり、天豈去此哉、任真無所先、天を忘るるからには、我と天と一體なり、天何くは在る、我何くは在る、已に先も無し、後も無し、雲鶴有奇翼、八表須臾還、正面は雲鶴の自由に雲表に遊ぶを言ふ、側面は我が自由にして、恰かも雲鶴と同様、自由自在なるを言ふ、願我抱靈獨、靈獨は依頼する者無く、又眞に語る者無きの謂ひなり、而して道に於て僂僂すること四十年、形骸久已化、肉體の憔悴して、少壯の如くならざるを謂ふ、心在復何言、心は精神なり、精神は健在なりと雖も、形骸已に此の如し、何を言ふも詮無しとなり、十二文（陶）と十三元（言）と一先は古通韻なり、李公煥曰く、趙泉山云ふ、晉書を案するに、靖節未だ嘗て喜懼の色あらず、唯酒に遇へば則ち飲む、試酌百情遠、此れ酒中實際の理地なり、豈狂藥醉昏の語ならんと、詩は醜魯と成語して、俗語の酒亂なり、

【題義】 日日雨降り、鬱陶に堪へず、獨飲して以て興を遣るなり、

【大意】 毎日の雨天、無聊を慰する爲め獨飲して此の詩を作る、生ある者必ず死す、古今皆同じ、赤松子と王喬の二人は仙化して壽命は頗る長しと聞きしが、今日は何處に在るやを知らず、偶ま故老が酒を贈られ、且曰く酒を飲めば仙を得ると、乃ち一酌二酌三酌、世を忘れ、天を忘れ、但天真に一任すのみ、天真に一任すに於ては自由自在、雲鶴の八表を自由に飛還すると同じ、我が天真を得る爲めに僂僂すること四十年、形骸は久しく已に仙人化したるも、精神は依然として健、國の爲めに在り、復

た何ぞ仙人の事を言はんや、

移居 二首

移居 二首

昔欲居南邨。非爲卜其宅。  
 聞多素心人。樂與數晨夕。  
 懷此頗有年。今日從茲役。  
 敝廬何必廣。取足蔽床席。  
 鄰曲時時來。抗言談在昔。  
 奇文共欣賞。疑義相與析。

昔南邨に居らんと欲す、其の宅を卜する爲にあらず、  
 聞く素心の人多しと、樂與に晨夕を數す、  
 此を懷ふ頗る年あり、今日茲の役に從ふ、  
 敝廬何ぞ必ずしも廣からん、牀席を蔽ふに足るを取る、  
 鄰曲時時來り、抗言在昔を談す、  
 奇文共に欣賞し、疑義相與に析す、

【注解】 移居、自家か借家か今日知る可らず、家を移せしことは事實なり、南邨、李公煥曰く、即ち栗里なりと、楊格曰く、栗の南邨と、本、山南の上に居る、後、火に遇つて此に徙る、非爲卜其宅、トうて徙るは此の處に限るの意あり、此の處に限ると云にはあらず、然らば何の理由ぞ、聞多素心人、心地潔白の人を稱して素心人と曰ふ、南邨には其の人多ければなり、樂與は素心人と相與に往來屬して樂むなり、數は音「サカ」相見るとの類なるを言ふ、頗は「ヨク」なり、有年は多年なり、從茲役は移居の事役に從ふ、敝廬は舊造の家、何必廣、取足蔽床席、雨露を防げば足ると同義、床席も蔽ふ能はざる家では琴書を置く處なし、幸に琴書を置くに足る床席あれば可なり、鄰曲時來、鄰曲は皆素心の人、即ち頌延年や、殷登仁や、龐通之の類、相往來する、抗言は談言の反

對、剛直不屈の言なり、談在昔、昔事を談論する、奇文共欣賞、凡文は欣賞するに足らず、奇は怪と異なる、人をして測る能はざらしむるを言ふなり、『毛詩』論語「昔奇文なり」『莊子』「老子」愈々奇文なり、疑義相與析、奇文に於て疑義あれば、素心の人と相與に剖析して分明ならしむ、群黨曰く、爾明、解を求めざるにあらず、但舊解を求め以て穿鑿せざるのみと、入聲十一陌の韻、

春秋多佳日。登高賦新詩。

春秋佳日多し、高きに登りて新詩を賦す、

過門更相呼。有酒斟酌之。

門を過ぎて更に相呼ぶ、酒あり之を斟酌す、

農務各自歸。閒暇輒相思。

農務各自に歸り、閒暇輒ち相思ふ、

相思則披衣。言笑無厭時。

相思うて則ち衣を披く、言笑厭時無し、

此理將不勝。無爲忽去茲。

此の理將に勝へず、無爲なり忽ち茲を去るは、

衣食當須紀。力畊不吾欺。

衣食當に須らく紀すべし、力畊吾を欺かず、

【注解】賦新詩は鄭康成の素心の人と與にするなり、若し家に酒あるときは必ず素心の人を呼んで、之と與に之を斟酌す、然れども勞とする所は各自に勞作するも、閒暇あれば相互に相思を寄す、相思すれば、各自に其の門を叩かざる可からず、衣を披きて去る所以、赤裸では人を訪ふ體にあらず、衣裳を整披するなり、面語すれば必ず言笑し、午時も夕時も厭ふ時無し、此理將不勝、理の字差や解し難きも、理由即ち俗の「ワケ」と見れば明白なり、日本語にすれば此の樂は何とも言ひ様が無いとの意、無爲は「アキナシ」と訓むも「アキナシ」と訓むも二者共に可し、忽去茲、今去るにはあらず、此の如き處には永住せんと、其の裏を言ふ、衣食當須紀、紀

字より此の句を見るべし、紀は録を別理し、亂れざらしむるを謂ふ、紀律なり、紀基なり、衣食の道は必ず紀律あるべきなり、乃ち力耕自活の道、他に依頼せざる生活なり、不吾欺は「孟子」の語、力耕以て世務を完全に爲すもの、是れ皆素心の人なり、嗚乎此の如きの志、清談者流、放蕩人の知る所にあらず、上平聲四支の韻、

【大意】南郷に住居せん志あるや久し、何の故ぞと言はば、南郷には素心の人多しと聞けばなり、是の素心の人と晨夕往來せば可からんと、之を念ふこと多年なり、今日其の志を遂ぐるを得て、欣喜言ふ可らず、敵愾は廣きを要せず、膝も容るるに足れば可し、素心の人、時時來往して、在昔を談するのみならず、奇文を共に欣賞し、其の疑義を剖析す、又、春秋の佳日には、登高の興あり、詩を賦し以て佳節に報ゆ、偶々門を叩くの人あれば、是れ素心の人、酒を賣らし至るなり、農務には相互に勤明し、閒暇には相互に相思す、相思すれば之を訪ふ、訪へば必ず言笑して厭く時無し、此の厭く時無き理由は他人は知らず、我は其の樂に勝へざるなり、實に安心立命の地、復た此の地を去るべからず、此の地に於て宜しく衣食の道を計り、精私力畊すべし、古人は吾を欺かざるなり、

和劉柴桑

劉柴桑に和す

山澤久見招。胡事乃躊躇。  
直爲親舊故。未忍言索居。

山澤久しく招かる、胡事ぞ乃ち躊躇する、  
直に親舊の爲めの故に、未だ索居を言ふに忍びず、

良辰入奇懷。挈杖還西廬。  
 荒塗無歸人。時時見廢墟。  
 茅茨已就治。新疇復應畚。  
 谷風轉凄薄。春醪解飢飢。  
 弱女雖非男。慰情良勝無。  
 棲棲世中事。歲月共相疎。  
 擘織稱其用。過此奚所須。  
 去去百年外。身名同翳如。

良辰奇懷に入り、杖を挈げて西廬に還る、  
 荒塗歸人無く、時時廢墟を見る、  
 茅茨已に治に就く、新疇復た應に畚なるべし、  
 谷風轉た凄薄、春醪飢飢を解く、  
 弱女男に非ずと雖も、情を慰むる良に無きに勝る、  
 棲棲世中の事、歲月共に相疎なり、  
 擘織其の用に稱ふ、此を過ぎ奚の須つ所ぞ、  
 去去百年の外、身名同じく翳如、

【注解】山澤は高士の遊ぶ處、乃ち劉遺民が柴桑令と作りて屢ば淵明を招待するなり、劉程之、字は仲思、彭城の人、漢の楚元王の後、少にして孤、母に事へて至孝、謝安、劉裕、其の賢を慕し、之を薦む、皆力辭す、裕、其の居せざるを以て乃ち其の門に蒞して遺民と曰ふ、胡事は何事と同じ、爾は斷行の反對、ナセ招きに應ぜざるや、直は他義なき意、爲親舊故、自身の勝手のみならず、親舊の關係上、招に應ぜざるなり、未忍言柴桑居一隱に離羣而索居とあり、朋友と離散せるを索居と曰ふ、獨り索居として居る、其の事を言ふに忍びずとなり、良辰は「ヨキトキ」なり、入奇懷、李公換曰く、時に遺民、靖節と約して山に隱れ、白蓮社を結ぶ、靖節稱其の社に預かるを欲せず、但時に復盧阜の間に往還す、惠遠法師等と遺民が此の結社ある、靖節預からずと雖も、又決して疵らざるなり、此の如き社の起るを總じて良辰奇懷に入ると言ふ、挈杖還西廬、西廬は上京の舊居を指す、荒塗無歸人、上京は種種の寇亂を經て、

賢僧頗る多し、住民は他に移住し、廢墟の處處に存在するを見るのみ、茅茨は茅を以て屋を蓋ふなり、淵明が家屋を整理するを已就治と云ふ、新疇復應畚、新疇は二歳、畚は三歳、田地も徐徐に整理して將に收穫あらんとするなり、谷風は東風なり、凄薄は飢意なるを云ふ、春醪解飢飢、飢飢と飢飢、一杯の酒、飢飢を忘れ、飢飢を忘る、弱女雖非男、慰情良勝無、趙泉山曰く、谷風以下二十字、一時の語歸に出づと雖も、亦窮に處するに巧なりと謂ふ可し、弱女は酒の醜薄、醜薄の酒も、飲めば以て枯腸を潤す、強烈の酒に及ばずと雖も、猶ほ無きには勝る、男は強烈の酒を言ふ、遺公の白蓮社は禁酒の結社、淵明が入らざるは、其の不風流を嫌へばなり、棲棲は不安の貌、「毛詩」に六月棲棲とあり、世中の事總て不安なり、共相疎、何焯曰く、我、世を棄て、世も亦我を棄つ、擘織稱其用、或は擘、或は織、我は唯我が用を爲すのみ、過此、此の擘織以外の事は、奚所須、我に於て須つ所無し、去去は速に去らしむるの詞、百年外、百年誰か長しと言ふや、迅速に過ぎ去る、身名同翳如、翳は蓋なり、又樹木の自から死るるを翳と爲す、百年の後、身も名も共に存するを得ず、況や外物をや、然らば則ち飲飲は何ぞ必ずしも廣からん、衣食は當に須らく紀すべし、擘織其の用に稱うて可なり、平聲七虞の韻、

【大意】劉柴桑が屢ば招くも、淵明は一身の都合のみならず、親舊に對する種種の事情よりして、容易に應諾せず、偶ま良辰に遇うて、我が懷も好奇に入る、乃ち杖を挈げて西廬に還る、其の還る塗は荒れて歸人に遇ふ無し、處處に唯廢墟を見るのみ、幸に我が廬の整理は稍就りて、收穫も亦相當にあらん、東風猶ほ凄薄なるも、一杯の酒、寒を防ぎ、懷を遣るに足る、弱女即ち醜薄の酒なれども、無きには勝ること萬萬とす、反つて世中の事を想へば、我は世人と疎縁なり、世人と疎なれば、此の自然を樂んで擘織の道を努力すれば足る、此の外に於て何ぞ意を勞せん、到底人世は百年にして、誰も彼も、身も名も、共に消し、俱に滅するに至る、

酬劉柴桑

劉柴桑に酬ゆ

窮居寡人用時忘四運周  
欄庭多落葉慨然知己秋  
新葵鬱北牖嘉穉養南疇  
今我不爲樂知有來歲不  
命室攜童弱良日發遠遊

窮居人の用寡し、時に四運周を忘る、  
欄庭落葉多し、慨然己に秋なるを知る、  
新葵北牖に鬱たり、嘉穉南疇に養ふ、  
今我樂を爲さずんば、來歲あるを知るや不や、  
室に命じて童弱を攜へ、良日發して遠遊せん、

【注解】劉の贈言に對して之に酬ゆ、寡人用、人間の用事罕なるなり、春夏秋冬四運の交代するも忘る、欄庭は一本空庭に作る、空庭可きに似たり、空庭は唯落葉のみ、落葉の蕭條たるは、始めて以て秋意なりと知る、慨然たらざるを得んや、新葵は蜀葵花なり、蜀は「マド」、壁を穿ち、木を以て交齒と爲すなり、「論語」に、自爾執其手とあり、蜀花は北牖の外に鬱茂し、而して嘉穉は南牖に榮殖する、此の際宜しく遊樂を爲すべし、來歲の生死は未だ知るべからず、室は細君、細君に命令して童弱をして遠遊せしむ、下平聲十一尤韻、陳情文曰く、童字、雙字、是れ晉人の用字、三唐人に勝る處と、  
【大意】窮居なるが故に、人間の用事寡し、人間の用事寡きが故に、窮居なり、人間は春夏秋冬の四運に乗じ、種種の用事多し、我は超人間の境界、特に四季を知る必要なし、偶ま落葉の多きを見て、期已に秋なるを知る、秋の蜀葵は開き、秋の嘉穉は登る、是に於て遊樂の時なるを知る、乃ち細君や童弱を攜へて遠近を散策す、近狀を劉が問に對して答ふる詩なり、

和郭主簿二首

郭主簿に和す二首

藹藹堂前林中夏貯清陰  
凱風因時來回颺開我襟  
息交游閒業臥起弄書琴  
園蔬有餘滋舊穀猶儲今  
營己良有極過足非所欽  
春秫作美酒酒熟吾自斟  
弱子戲我側學語未成音  
此事眞復樂聊用忘華簪  
遙遙望白雲懷古一何深

藹藹たる堂前の林中夏清陰を貯ふ、  
凱風時に因つて來り、回颺我が襟を開く、  
交を息めて閒業に遊び、臥起書琴を弄す、  
園蔬餘滋あり、舊穀猶ほ今に儲ふ、  
己を營む良に極あり、過足欽する所にあらず、  
春秫美酒を作り、酒熟して吾自から斟む、  
弱子我が側に戯れ、語を學んで未だ音を成さず、  
此の事眞に復樂し、聊か用て華簪を忘る、  
遙遙白雲を望む、懷古一に何ぞ深き、

【注解】藹藹は樹木繁茂の貌、中夏は五月、凱風は南風、凱は愷と同義、和と善と樂の三義を含む、草木盡く南風を得て各の其の得意に繁茂するを以てなり、回颺はグルグルと回る風、開は吹き開くなり、息交、人と交遊を休息す、游閒業、念務にあらざる業、詩賦の類、書琴の類、盡はれ閒業なり、園蔬は園中の菜蔬、有餘滋、食ふだけの菜蔬は取れるなり、菜蔬は新なり、其の上翁は去年の舊穀も貯蓄してあり、營己、一家の經營は、良有極は十分の義、過足は十二分を言ふ、十二分は飲ぶ所にあらず、春は「ウスダク」は「マ

チキビ、是れ以て美酒を醸造する、其の熟するに及んで濁す、息交の人、友無ければなり、弱子は三歳前後の子、學識未成、完全の器を發する能はず、此の如き事、良に眞樂とす、聊用、用は以て同義、華管は貴顯の冠飾なり、官吏の身たるを忘るとなり、蓬蓬は遠達と同義、懷古は古人を懷ふ、其の情深しとなり、下平聲十二侵の韻、何義門曰く、富貴は吾が願にあらず、帝郷は期す可からず、所謂雲を望み古を懷ふ、蓋し西方の思なりと、沈歸愚曰く、知足要言、一結悠然不盡と、

【大意】節正に中夏、清陰滿地、回風は我襟を吹いて、爽氣言ふ可らず、是の時、交を息めて我が好む所の業を修む、室中に於ては書琴を弄し、庭中に於ては蔬菜を掬み、一家の經營は、去年の舊穀尙ほ保存するを以て十分に足る、酒も自家用として造りしもの、自から以て斟むに足る、弱子は我が前に戯る、其の言ふことや聞くに興味あり、人生の樂事、此の中聊か以て領す、願ふ所は古人と歸を同じうせんとなり、

和澤周三春清涼素秋節

和澤周三春に周し、清涼素秋の節

露凝無游氛天高肅景澈

露凝りて游氛無く、天高くして肅景澈す、

陵岑聳逸峯遙瞻皆奇絕

陵岑逸峯聳ゆる、遙に瞻る皆奇絶、

芳菊開林耀青松冠巖列

芳菊林に開いて耀き、青松巖に冠して列る、

懷此貞秀姿卓爲霜下傑

此の貞秀の姿を懷ひ、卓として霜下の傑と爲る、

銜觴念幽人千載撫爾訣

觴を銜んで幽人を念ふ、千載爾訣を撫す、

檢素不獲展厭厭竟良月

檢素展ぶるを獲ず、厭厭良月を竟ふ、

【注解】和澤は三春に周通し、清涼は素秋の時節となる、素秋は「璽元帝書要」に、秋曰素商、亦曰素秋とあり、露凝、露氣が凝結する、無游氛、凶氣を氣と曰ふ、遊塵の氣氣が無きなり、天高は秋は澄めば高く見えるなり、肅景澈、秋氣は肅殺するを以て常とす、風景に作る本は不可、陵は大阜、岑は小にして高きもの、聳逸峯、聳秀なるものは逸峯とす、遙瞻、遠方より觀れば、陵も岑も皆奇絶なり、貞秀姿は青松を言ふ、霜下傑は芳菊を言ふ、人は松を以て骨と爲し、菊を以て肉と爲さざるべからず、念幽人、郭主簿を指して幽人といふ、爾訣は松菊の訣要を曰ふ、辭訣の訣にはあらず、爾は松と菊とを指す、撫は撫愛、撫愛すれば其の慕ふこと勿論なり、檢素、檢は書署、素は尺素、松菊を敬慕すと雖も、其の意を十分に檢素に展ぶるを獲ずとなり、檢素の心にはあらざるべし、厭厭は「毛詩」に厭厭夜飲とあり、安逸なり、良月は十月の異名なり、秋晚冬初とす、入聲六月の韻、蔣丹崖曰く、二詩、前首は開業の樂を自述し、後首は人を懷ひ、銜觴の思を動かす、和言調り調合せず、亦次第ありと、

【大意】三春が和澤なりしを以て、秋も亦其の節が順調なりしなり、地に露氣は凝り、天に肅景は澈し、岑も峯も、秀色奇絶、皆賞すべし、而して芳菊は林に開き、其の光耀き、青松は巖に冠し、蒼として列を爲す、松は貞秀の姿なり、菊は霜下の傑なり、是の松と菊とに對して觴を銜み、以て幽人を念ふ、千載の下、松貞と菊傑との訣を撫し、種種に檢素し、十分に意志を展ぶるを得ず、安逸にして良月を竟ふとなり、



於王撫軍座送客

王撫軍の座に於て客を送る

秋日凄且厲。百卉具已腓。

秋日凄且厲なり、百卉具に已に腓む、

爰以履霜節。登高饒將歸。

爰に履霜の節を以て、高きに登つて將歸を饒す、

寒氣冒山澤。游雲倏無依。

寒氣山澤を冒し、游雲倏ち依る無し、

洲渚思緬邈。風水互乖違。

洲渚思ひ緬邈、風水互に乖違す、

瞻夕欣良讌。離言聿云悲。

瞻夕良讌を欣ぶ、離言聿に云に悲し、

晨鳥莫來還。懸車斂餘暉。

晨鳥莫に來り還る、懸車餘暉を斂む、

逝止判殊路。旋駕悵遲遲。

逝止殊路を判す、旋駕悵として遲遲たり、

目送回舟遠。情隨萬化遺。

目送す回舟遠し、情萬化に隨つて遺る、

【注解】王撫軍、王安、字は元休、撫軍將軍江州刺史と爲る、庾登之、黃州太守と爲る、將に郡に赴かんとす、王安送つて潯陽の菰浦に至る、三人此に於て詩を賦し別を敘す、客は即ち庾登之なり、秋日、可し、「發微」と「兼評」の二本冬日に作る、不可なり、凄氣凌厲なり、年譜に、此の詩、宋の武帝永初二年辛酉秋作とあり、百卉は百種、腓は衰病なり、色變じて黃なるを言ふ、「毛詩」に、百卉具腓とあり、爰以履霜節、正に是れ秋暮冬初の節、登高、王が庾の爲め送別の主人公と爲つて、燕を高樓に張る、饒將歸、將は名詞、將軍が歸るを饒別する、寒氣冒山澤、冒は入るなり、覆ふなり、游雲倏無依、正面は字の如く、雲の依る所無きを言ふ、側面は庾が去つて此に留まること無きを言ふ、洲は渚の犬なるもの、渚は洲の小なるもの、思緬邈、分れ去つては千洲百渚を隔つ、思の緬

遷たらざるを得ず、風水互乖違、正面は風と水となり、側面は我と彼となり、東西に乖違するを恨む、瞻夕、此の夕の良讌は欣瞻するも、離言なれば事云悲なり、車は發微の辭、遂にと同じ、「書經」に、車求元惡とあり、又、筆にも通ず、晨鳥は早晨に林を出でし鳥、莫は暮と同じ、來還、夕莫には必ず歸來する、懸車は、「淮南子」に、日至悲泉、是謂懸車と、落日の形車輪を懸けたる如きを云ふ、斂餘暉、將に昏ならんとする様、逝止殊路、彼は逝即ち往き、我は止即ち留まる、其の殊路判然たり、旋駕、愈よ彼は駕し去らんとす、而かも悵然として其の行くや遲遲たり、目送は目の見えるまで送る、情隨萬化遺、千變萬化が世の常、常とは言ひながら萬化に隨つて種種と成る、上平聲五微の韻、

【大意】王撫軍が主人と爲り、二人の客を送る燕を開く、秋日凄氣、百卉皆腓む、是の履霜の節に當り、高きに登りて、以て人の歸るを饒す、今より寒氣は方に逼る、人と游雲と依る所無きを思ふ、彼と我と愈よ隔たり、洲と渚と益す緬邈か、今日此の良燕に侍するも、東西に乖違するを思へば、何ぞ悲みを生ぜざらんや、而かも人は赴かざる可らず、情に勝へずして旋駕の遲遲たるあり、我は其の影の見えざるに至るまで目送す、目送中、種種の情を生ずるに至る、

與殷晉安別

并序

殷晉安と別る 并に序

殷先作晉安南府長史掾。因居潯陽。後作太尉參軍。移家東下。作此以贈。

殷先に晉安南府長史掾と作る、因つて潯陽に居る、後太尉(劉裕)の參軍と作る、家を移して

詩五首 於王撫軍座送客 與殷晉安別并序

東下す、此を作り以て贈る、

遊好非少長。一遇盡殷勤。

信宿酬清話。益復知爲親。

去歲家南里。薄作少時鄰。

負杖肆游從。淹留忘宵晨。

語默自殊勢。亦知當乖分。

未謂事已及。興言在茲春。

飄飄西來風。悠悠東去雲。

山川千里外。言笑難爲因。

良才不隱世。江湖多賤貧。

脫有經過便。念來存故人。

遊好少長にあらず、一遇殷勤を盡す、

信宿清話に酬ゆ、益す復た親を爲すを知る、

去歲南里に家す、薄つて少時の鄰を作す、

杖を負うて肆に游從す、淹留宵晨を忘る、

語默自から勢を殊にす、亦知る當に乖分すべきを、

未だ謂はず事已に及ぶを、興言茲春に在り、

飄飄西來の風、悠悠東去の雲、

山川千里の外、言笑因を爲し難し、

良才世に隠れず、江湖賤貧多し、

脱し經過の便有らば、念來故人を存す、

【注】 殷は姓、晉安は官名、名は繼、字は景仁、晉安府の長官より、太尉劉裕が參軍と作つて、全家東下する、乃ち此を贈る、少長の意、陶淵曰く、吾と子と少時長時の遊從にはあらず、但今一たび相遇うて、以て定交するのみ、久長に作るも意亦通ず、信宿

は二泊以上を言ふ、清話、人は新知なるも談話相合致するときは、十年の知己も同線なり、益す親を爲すの眞なるを知る、家南里、陶家と殷家と共に南里に住せし時、薄は追「セマル」なり、少時は「シバラク」なり、少時其の鄰を作せしなり、負杖肆游從、手を携へて同遊せるを云ふ、或は淹留して宵も晨も忘るるの親を爲す、語默、殷は盛んに語り、陶は黙す、自殊勢、勢は勢力、貧舌者と、貧舌せざる者とは勢力が違つて来る、亦知當乖分、勢力を得し者と、得ざる者とは萬事乖く、茲に分離して東西すべきは當然なり、未謂事已及、分離すべきは知つて居りしも、今日の如く早く此に及ぶとは謂はざりきとなり、興言、興に乗じて笑言せしは、茲春の頃でありし、飄飄西來風、悠悠東去雲、各の身分の定めなきを言ふ、今より子と我と山川千里外と隔つ、言笑難爲因、因は極めて難き意、難を交ふること難はずと云ふ位の義なり、良才、殷を指す、不隱世、世に出でて以て有用に供せらる、江湖多賤貧、是れ陶自身を指す、殷は多義あり、今は或然の辭「モシ」と訓す、經過便、此の地へ經過する便の有りし時は、念來存故人、此の處に故人即ち友人の謂明が在住するなれば門を叩かんと念を持ちて居て呉れ玉へとなり、十二文(勳、分、雲)と十一眞とは古通韻なり、陳昨明曰く、殷先きに晉の臣と作り、公と同時、後宋の臣と作る、公と疎調、篇中の語、極めて低調、朋好仍敬にして、異趣一なり難きなりと、何義門曰く、出處と曰はずして語默と曰ふ、公が過詞なりと、沈歸愚曰く、參軍已に宋の臣と爲る、題仍は前朝の官を以て之に名く、題目便ち苟且せずと、温謙山曰く、抑揚吞吐、調、之を出すに忠厚に似たり、意實に暗に諷刺を寓す、殷當日此の詩を得て、未だ必ずしも純無からず、陶詩を讀む者、當に知るべし其の蘊然親むべき處、即ち渾然犯すべからざる處あるを、

【大意】 殷晉安と我とは永年の知己にはあらず、然りと雖も一たび遇うて永年の知己にも勝るの殷勤を致す、是の故に殷を我が家に二三宿せしめて種種の清話を交換す、清話を交換すれば益す其の親しむべきを知る、一旦殷と陶と南里に住せし際、薄即ち強ひて少時でも鄰に居をトし、乃ち日夕相共に杖を負うて山水の游を爲し、淹留して夜も晨も頓着せざるに至る、多言の人と、寡言の人と、性格の殊異なるは、即ち勢を得るの相違を來す、乃ち一は時勢に乗じて出世し、一は時勢に乖きて隱避す、

是に於てか東西分離の已むを得ざるに至る、而かも平日分離の事を言はざりしに、今や遽かに山川千里を隔つ、復た相遇うて言笑するの因無からんと思ふ、良才は久しく無用の地に置くべきものにあらず、出世して國家の爲め重要な地に据る、固とに其れ當然なり、賤貧なればこそ江湖の間に流浪して出世せざるなり、君が家を移して東下し、堂堂たる大官と爲り、脱し是の滯陽を経過する機会もあらば、是の滯陽には陶淵明と云ふ故人が存在するを忘れずに記憶して呉れよ、

贈羊長史 并序 羊長史に贈る 并に序

左軍羊長史、使を秦川に銜む、此を作り之に與ふ、

愚生三季後、慨然念黃虞、  
得知千載外、正賴古人書、  
賢聖留餘迹、事事在中都、  
豈忘游心目、關河不可踰、  
九域甫已一、逝將理舟輿、

愚三季の後に生れ、慨然黃虞を念ふ、

千載の外を知るを得るは、正に古人の書に賴る、

賢聖餘迹を留め、事事中都に在り、

豈心を遊ばすを忘れん、關河踰ゆべからず、

九域甫めて已に一、逝いて將に舟輿を理せんとなす、

聞君當先邁、負病不獲俱、  
路若經商山、爲我少躊躇、  
多謝綺與角、精爽今何如、  
紫芝誰復采、深谷久應蕪、  
駟馬無貫患、貧賤有交娛、  
清謠結心曲、人乖運見疎、  
擁懷累代下、言盡意不舒、

聞く君先邁に當り、病を負うて俱にするを獲ず、  
路若し商山を經ば、我が爲めに少躊躇せよ、  
多謝す綺と角と、精爽今何如、  
紫芝誰か復た采らん、深谷久しく應に蕪すべし、  
駟馬貫患無けん、貧賤交娛あり、  
清謠心曲を結ぶ、人は乖き運疎んせらる、  
懷を擁す累代の下、言盡きて意舒びず、

【注解】羊は姓、長史は官名、名は松齡、銜使は奉命と同じ、秦川は關中、東、函關より、西、關關に至る、二關の間、之を關中と謂ふ、今日の陝西省なり、劉履曰く、義熙十三年、太尉劉裕、秦を伐つて長安を破る、秦主姚泓、建康(晉の都)に詣り、許を受く、時に左將軍朱齡石、長史羊松齡を遣り、賀を稱せしむ、此の詩、此の時の作とす、愚は淵明自ら謂ふ、三季後ば「國語」に曰ふ、史蘇曰く、今晉墓墟にして安んず、俘女亦其の寵を増す、三季の王に當ると雖も、亦可ならずや、又「漢書敘傳」に三季之後、厥事故紛とあり、佛教で言ふ末劫と同義、鴻季なり、黃虞は黃帝と舜帝となり、舜は有虞氏なり、千載外、自分が墓ふ所の黃虞は千載上の人なり、其の人の墓ふべきを知り得たるは是れ古人書に賴るにあらずや、餘迹、中都、西晉の都は河南の洛陽、東晉の都は江蘇の建康、洛陽は周の故城、河南の都、陝西は古の長安、乃ち秦漢の故都、賢人や聖人の遺跡尤も多しとす、「論語」に、孔子爲中都宰、中都は春秋の魯邑、今日の山東汶上縣なれば、淵明の所謂中都にはあらず、豈忘游心目、中都は賢聖の遺跡多し、心目共に此の地を忘るること無し、如何せん關河不可踰、百二の關河、何ぞ能く踰ゆるを得ん、九域は四海九州と言ふ語と同義、天下の異稱なり、甫已一は、

劉裕が晉の恭帝を弑せざる前、桓玄を誅し、南燕王を斬り、秦王を殺し、以て江左を定めたる事を言ふ、遂に征なり、將理舟輿、劉裕が軍將に武裝して以て出でんと欲するなり、而して此の征行、羊松齡が先遣即ち先陣に當るなり、負病は淵明が病むなり、不獲俱、猶ほ晉室の爲めなり、壯健なれば我も從征せんと欲するも病軀亦如何ともしする無し、君が征行の路若し商山の下を經ば、商山は陝西關縣の東に在り、即ち南山の脈、七盤十二紆あり、亦商嶺南坂と名く、四皓が秦の亂を避け此に隱る、我が爲めに少時、馬を此處に止めて呉れ玉へ、而して我が傳言を依頼す、綺里公と、何里先生との二人（關公、綺里、夏侯、何里、是を四皓と曰ふ）に多謝し玉へ、精爽今何如、今の世は秦末と同じ、賢聖隠れて凶徒跋扈する時代なり、然るに先生等は猶ほ壯健なるや、如何に此の亂世を觀察するや、紫芝誰復采、深谷久應蕪、四皓に「紫芝歌」あり、其莫たる高山、深谷遠逝たり、奕奕たる紫芝、以て飢を療すべし、唐虞世遠し、吾將に安くに歸せん、騶馬高蓋、其の憂甚だ大、富貴の人を畏るるは、貧賤の肆志に如かず、紫芝を采るは高人の事なり、今は深谷に高人の入る無く、其の荒蕪想ふべし、騶馬無負患、買は貨なり、「周禮」に民無負貨則賈賈而予之とあり、陶淵曰く、無買患は其の患貨る可からざるを言ふなり、紫芝歌の騶馬高蓋、其憂甚だの意と、貧賤有交媿は、貧賤不如此肆志の意、清談は紫芝歌を稱して曰ふ、結心曲、曲は歌曲を云ふ、眞の心を結ぶ歌曲の意、人乘運見疎、人が運に垂けは運に疎んぜらるるの意、擁は擁抱なり、累代下は千載下と同じ、言盡意不舒、意は猶ほ多けれど、言は已に盡くなり、路若より以下十二句皆傳言を依頼するなり、上平聲六魚の韻、胡仔曰く、淵明の高風峻節、固に已に四皓に愧づるなし、然して猶ほ仰慕して置かず、其の好賢尚友の心を見るに足る、陳仲明曰く、得知の二句、語卑にして健、路若以下、一氣に下る、低昂淋漓にして、聲調近からずと、又曰く、此れ宋武（劉裕）關中を平定する時の作、武功を鋪張せず、三傑（張良、陳平、韓信）に寄思せず、調り懐を商山先生に寄す、隱遁の志、早く已に決すと、

【大意】 羊長史を送るに就いて、我が平常の思懐を敘ぶ、我は澆末の世に生れ、而かも心は常に黃虞時代の正貞を念ふ、其の黃虞時代の好きを知るを得るは、是れ歴史の賜ふ所に由る、賢人や聖人の遺跡、多くは是れ中都に在り、賢聖を慕ふからには必ず是の中都を訪はざるべからず、心目共に遊ばんと欲する念は忘るること無し、但關河の險えがたきを如何にせん、今や九域方に一ならんとし、將軍の舟輿將に出でんとす、而して聞く君之が先陣なりと、我は不幸病軀の爲め、是の行を俱にするを得ず、君若し征途を商山の下に取らば、我が爲めに特に躊躇して呉れ玉へ、而して傳言して呉れ玉へ、綺公は如何、角公は如何、無事なりや、精爽なりや、依然として紫芝を采りて居るや、恐らくは、綺角二公以外に、之を采る者は或は無からん、深谷の荒蕪、其の久しきは想像に餘りあり、騶馬即ち富貴の人、患無からんや、貧賤の自由に自然を媿しむに及かず、貧賤なればこそ清談して以て心曲を結ぶの樂あり、人が運に垂け、運乃ち人を疎んず、千載の上と千載の下を思ふ、漢の興る所以、晉の衰ふる所以、暗に慨を此の中に含む、言はんと欲する所の者盡きたるが如きも、意は充分に舒びざるなり。

歲暮和張常侍

歲暮張常侍に和す

市朝悽舊人、驟驥感悲泉。

市朝舊人悽たり、驟驥悲泉に感ず、

明且非今日、歲暮余何言。

明且今日にあらず、歲暮余何をか言はん、

素顏斂光潤、白髮一已繁。

素顏光潤を斂め、白髮一に已に繁し、

闕哉秦穆談、旅力豈未愆。

闕れる哉秦穆の談、旅力豈未だ愆たざらん、

向夕長風起寒雲沒西山。

夕に向つて長風起り、寒雲西山に没す。

冽冽氣遂嚴紛紛飛鳥還。

冽冽氣遂に嚴、紛紛飛鳥還る。

民生鮮長在矧伊愁苦纏。

民生長在鮮し、矧んや伊れ愁苦纏ふをや。

屢闕清醑至無以樂當年。

屢ば清醑の至るを闕く、以て當年を樂む無し。

窮通靡攸慮顛賴由化遷。

窮通慮る攸靡し、顛賴化に由つて遷る。

撫己有深懷履運增慨然。

己を撫し深懷あり、運を履んで慨然を増す。

【注解】 張は姓、常侍は官名、名は野、字は秉民、南陽の人、柴桑に居り、淵明と婚姻の契あり、傲して散騎常侍に拜す、就かず、義熙十四年を以て卒す、題、和と云ふべからず、詩意を詳味するに、真饒の辭に似たり、和は當に趣に作るべし、又、野の族子張詮、亦常侍に徵す、或は張詮、野を執むの作あり、而して公、之に和するか、(以上上陶淵の説)今謂ふ、陶淵の説、一理あり、然りと雖も、詩意全く契詩とも思はれず、句句悲慨たるは明白なるも、是は淵明が家法、ただ此の詩のみにあらず、而して又張詮の契詩を和したるならんかと、契詩を和するなぞ古人の無き所、穿鑿も亦甚し、故に余は謂ふ張が悲慨の詩ありて之を和するのみ、市朝懷舊人、古北門行、市朝易人、千載墓平とあり、題感悲泉、白駒の隙を過ぐるを言ふ、今日は歲暮、明且は新歲、感慨の極、何の言も無し、素顔は少年の美面、白髮、昨日の少年已に老人と爲る、圓哉「毛詩」に于陵園兮とあり、疎なり、迂なり、兼譽と反す、秦穆の言臣、旅力既愆、我尙有之とあり、秦穆は秦の穆公、旅力は大勢の力、軍の五百人を一旅と爲す、豈未愆、此れ秦穆と反す、秦穆の言大だ壯語なるも、老いては爲す能はざるを言ふ、向夕、沒西山、今日も將盡の狀、長風と寒雲、歲暮に起る景、冽冽は寒氣の嚴、紛紛は歸鳥の多、民生は僅かに五十年六十年を以て歿す、而かも其の間、愁苦纏ふを如何せん、我に於ては屢闕清醑五、人の酒を嘗す

無し「毛詩」に「既載清醑」とあり、無以樂當年、當年は十年前も指すことあり、百年も千年も指すことあり、此は淵明が壯年の樂、今日は無しと云ふなり、窮通は已に運なり、別に思慮する故、顛賴「ヤセオトロヘル」は變化に由りて遷るのみ、撫己有深懷、屢運增慨然、劉履曰く、義熙十四年十二月、宋公劉裕、安帝を東堂に幽し、恭帝を立つ、靖節、歲暮の詩を和す、蓋し其の時に適當を以て此の意を寄す、首に市朝の變、歲月の逝くを言ひ、中に風雲氣候の風、人物糾紛の苦を言ひ、末篇自から窮通顛賴、如何ともすべきなきの勢を言ふ、撫己屢運、其の憤激に勝へざる者あり、十三元(言、繁)十五韻(還、山)と十一眞とは古通韻なり、揚東謂曰く、陶公が異代に事へざるの節、子房が五世韓に相たるの義と同じ、既に孤擊震動の舉を爲さず、又時に漢祖の如く託して以て其の志を行ふ可きなし、所謂撫己有深懷、屢運增慨然、之を讀む、亦以て深く其の志を感むべきかな、

【大意】 張常侍が示されし歲暮の作に和せしなり、市朝は變じ易きなり、其の變じ易き地に久しく住する者は、種種の意味に於て悽情多し、其の尤も感ずるは、驥驥即ち日月の匆匆として走るに在り、今日は已に昨日と爲り、今年は已に去年と爲る、少年の素顔に光潤あるも、是れ忽ち白髮が頭上に繁き人と爲る、平常豪語する秦の穆公も、大勢の軍を待み、我こそは旅力十分なりと自ら許せども、遂に迂闊たるを免れず、朝日は忽ち夕日と爲り、東方に出でし堂堂たる日影も西山に沈没するに至る、既にして秋、既にして冬、紛紛として飛鳥は還る、如何なる民生も百年以上は保つべからず、矧して其の短き世に樂は少く苦は多し、我の如きは厨に酒を闕くこと毎毎なり、當年即ち盛時の樂を今復味ふこと無し、而かも窮も通も運命なるを知らば、痛く思慮を勞すること無きも、顛賴の次第に遷るを如何せん、然りと雖も己が身を撫すれば深懷言ひ難きものあり、其の深懷は即ち晉室の傾危したる

事にあり、慨然たらざるを得んや、

和胡西曹示願賊曹

胡西曹に和して願賊曹に示す

蕤賓五月中清朝起南颺

蕤賓五月中、清朝南颺起る、

不駛亦不遲飄飄吹我衣

駛ならず亦遅ならず、飄飄我が衣を吹く、

重雲蔽白日閒雨紛微微

重雲白日を蔽ふ、閒雨紛として微微、

流目視西園曄曄榮紫葵

流目西園を視る、曄曄紫葵榮ゆ、

於今甚可愛奈何當復衰

今に於て甚だ愛す可し、奈何せん當に復た衰ふべし、

感物願及時每恨靡所揮

物に感じて時に及ぶを願ふ、毎に恨む揮ふ所靡きを、

悠悠待秋稼寥落將賒遲

悠悠秋稼を待ち、寥落將に賒さんとする遲し、

逸想不可掩猖狂獨長悲

逸想掩ふべからず、猖狂獨り長悲す、

【注解】 胡氏と願氏、西曹と賊曹は官名、共に未詳、蕤賓は「禮」に、仲夏之月、律中蕤賓とあり、乃ち十二律の一、五月中は自から注する者の如し、清朝起南颺、颺は涼風なり、不駛不遲、風の吹くや、人の身體に過する程度に吹く、重雲は層雲、蔽白日、雲が蔽ふ爲めに、幸に絲絲たる交成を免かる、閒雨は霽雨と同じならん、紛微微、少か降る雨、流目は目を西園の方へ移して視るな

り、曄曄は紫葵の光あり色あり盛なる形容、於今甚可愛、紫葵を賞するには今が好期なり、奈何は、イタバクモナクの意に見よ、當復衰、好期を逸すれば、再得すべからず、感物願及時、物は萬物、特に紫葵、花を賞し、事を成す、皆是れ時あるなり、每恨靡所揮、及時の事を知らざるにあらず、而かも發揮する所無くして過ぎ去るを恨む、悠悠待秋稼、遂に悠悠として、夏日を空過して秋稼に至る、寥落將賒遲、賒は「アマス」、アマスは其の日に成るにあらず、昨日に於てし、昨冬に於てし、其の結果を後來に納め、り、逸想は放逸の閒想、不可掩、放逸に過ぎ去る者は、其の所得なきこと掩ふ可らざる事實なり、猖狂は「莊子」に、猖狂不知所往とあり、妄行にして控制すべからざるを謂ふ、上平聲四支の韻、温謙山曰く、此篇集中に在つて、平澹の作と爲す、諸選本亦此に及ぶ罕なり、

【大意】 盛夏五月に當り、早晨に起きて涼風の南より起るを見る、其の涼風や爽爽として人に可なり、而かも雲の爲め赫日は蔽はる、時時雨が降る、西園に流目して見れば、紫葵は曄曄として盛んなり、盛んなりと雖も其の衰ふる早ければ、速かに之を賞するに及かず、而かも毎に恨む、何等の發揮する所無く、悠悠として秋稼の期に至る、此の如くなれば寥落して好結果を後來に納むる能はず、放逸の閒想たるは事實にして、其れは到底掩ふ可らず、自からは是れ猖狂なるを知る、知ると雖も改むる能はず、獨り長悲する所以なり、

悲從弟仲德

從弟仲德を悲しむ

銜哀過舊宅悲淚應心零

哀を銜んで舊宅を過ぐ、悲涙心に應じて零つ、

借問爲誰悲、懷人在九冥。

借問誰が爲めに悲む、懷人は九冥に在り、

禮服名羣從、恩愛若同生。

禮服羣從と名け、恩愛同性の若し、

門前執手時、何意爾先傾。

門前手を執る時、何ぞ意はん爾先づ傾かんとは、

在數竟未免、爲山不及成。

數に在つて竟に未だ免れず、山を爲す成るに及ばず、

慈母沉哀疚、二胤纔數齡。

慈母哀疚に沈み、二胤纔に數齡、

雙位委空館、朝夕無哭聲。

雙位空館に委ね、朝夕哭聲無し、

流塵集虛坐、宿艸依前庭。

流塵虛坐に集り、宿艸前庭に依る、

階除曠遊迹、園林獨餘情。

階除遊迹曠しく、園林獨情を餘す、

翳然乘化去、終天不復形。

翳然化に乗じて去り、終天復形れず、

遲遲將回步、惻惻悲襟盈。

遲遲回歩を將て、惻惻悲襟に盈つ、

【注解】從弟は「イトコ」、仲徳は傳を聞く、衡哀遺書宅、之を弔する爲め從弟の舊宅を過ぐ、悲涙應心零、心に感が起れば從つて悲涙が零つ、懷人、我が懷ふ人即ち從弟は已に九冥に在り、九冥は黃泉の下を云ふ、禮服名羣從恩愛若同生、喪を服することは從兄弟の間柄ではあるが、眞の兄弟の感があるなり、門前執手時、死する前に此の事ありしならん、何意は思はざりきなり、爾先傾、爾が我より先きに死せんとは、在數、それも命數なりとせば免るる數はざるなり、爲山未及成は、種種に解釋を下すを得るも、余は事染

未だ大成せざるの意と解釋する、慈母沉哀疚、仲徳が母は猶ほ存在するもの、二胤は二人の子、纔數齡、幼年なるなり、雙位委空館は未詳、朝夕無哭聲は其の人を弔する者を開くを云ふ、流塵集虛坐、生前靜坐の處、已に人無し、虛坐なる所以、虛坐は流塵堆積する所以、宿艸は隔年の艸「禮記」に、朋友之墓、有宿艸而不哭焉とあり、依前庭、艸が依託するのみ、階除、舊宅の階除、堂に登る遺物を階除と云ふ、曠は字義廣し、今「ムナシ」處の曠を取る、遊迹、已に主人無し、虛曠なる所以、而かも園林は鬱茂して、獨餘情を引くのみ、終天は「イツマアモ」の意、不復形、此の形は灰と爲り、再び復すべからず、故に形を以て「アラハレ」と訓す、此の人の形は再見する能はず、是を以て形助して回歩も自から遲遲たり、歩が遲遲たるは、其の心の惻惻として傷む爲めなり、八庚と九者は通韻なり、陳群明曰く、其の情頗る真切、特弱句多し、悲淚、何意、園林等の類皆健ならず、公が詩真率、毎に體弱を嫌ふ、是の時諸家皆珍琢を務む、琢すれば自然自成に達し、其の古率なるときは、自然に近し、然れども毎に弱に流ると、

【大意】從弟の舊宅を過ぎ、哀を銜んで、悲涙を零す、我が懷ふ所の人は九冥の遠きに在り、況や從兄弟なれども、生前親しきこと骨肉の兄弟と異ならず、曾て相遇うて相別れし時、從弟が我より先きに死せんとは思はざりしに、天數の盡きたるや、從弟は遂に死を免れざりし、事業も未だ大成せず、慈母は哀疚に沈み、二子は猶ほ幼なり、從弟は館中の人と爲る、其の人を弔する者は、慈母を除きて哭する者無し、生前の居室は掃ふ者も無ければ塵埃が山積する、而して中庭は草の生ずるに任す、主人の死せし跡、以て知り易し、餘情を引く所のものは、唯鬱茂せる園林のみ、其の人再び見るべからず、去らんと欲して進まず遲遲する所以なり、

陶淵明集卷二終

陶淵明集卷三

詩五言

思悦曰く、文選五臣注に云ふ、淵明が詩、晉に作る所の者、皆年號を題す、宋に入つて作る所、但甲子を題するのみ、意は二姓に事ふるを恥ぢ、故に以て之を異にす、嘗て淵明が詩を攷ふるに、甲子を題する者あり、庚子に始まり、丙辰に距る、凡そ十七年間、只九首のみ、(或は十一首、或は十二首に作る) 皆晉の安帝の時作る所なり、淵明、乙巳の秋を以て彭澤令と爲り、在官八十餘日、即ち印綬を解き、歸去來辭を賦す、後一十六年庚申、晉、宋に禪る、恭帝元熙二年なり、豈、晉未だ宋に禪らざる前二十年、輒ち二姓に事ふるを恥ぢ、作る所の詩、但甲子を題し、以て自から異を取るべけんや、矧んや詩中又晉の年號を標する者無し、其の題する所の甲子、蓋し、偶ま一時の事を記するのみ、後人類して之を次す、亦、淵明が本意にあらずと、秦少游(宋)嘗て云ふ、宋初めて命を受く、(即位を) 陶潛、自から祖侃、晉世の宰輔なるを以て、復た身を屈するを恥づ、投効して歸り、潯陽に畔す、其の著はす所の書、義熙より以前、晉の年號を題し、永初以後、但甲子を題するのみ、黄魯直(山谷)の



詩、甲子不數義熙年の句あり、然らば則ち少遊・魯直、且尙は五臣の説に惑ふ、他は知るべきのみと、  
晉季理(宋)曰く、淵明の詩、晉の義熙より以後、皆甲子を題す、此の説、五臣に始まる、後世遂に其の説に仍る、治平中、虎邱寺の僧思悅あり、淵明集を編し、獨り其の然らざることを辨す、謂ふ豈宋未だ禪を受けざる前二十年、二姓に事ふるを恥ぢ、甲子を題するの理あらんやと、思悅の言、信にして證ありと、

謝疊山(宋)曰く、淵明の詩に就いて、思悅は云云論じ、艇齋詩話(晉季)も亦思悅を信ず、余を以て之を攷ふるに、元興二年、桓玄、位を篡ひ、晉氏斷えざること綫の如し、劉裕を得て始めて平かにして、義熙と改元す、此より天下の大權、盡く劉裕に歸す、淵明が「歸去來辭」を賦するは、實に義熙元年なり、十四年に至りて、劉公、相國と爲る、恭帝即位し、元熙と改元す、二年庚申に至りて宋に禪る、恭帝の言を觀るに、曰く、桓玄の時、晉氏已に亡べり、天下は重ねて劉公が延く所と爲り、將に二十載ならんとす、今日の事、本、甘心する所と、詳かに此の言を味ふに、劉氏、庚子に政を得しより、庚申革命に至る、凡そ二十年、淵明、庚子より以後、甲子を題する者、蓋し逆め末流の此に至るを知る、忠の至、義の盡くるなり、思悅・裴父の二人、殆ど以て之を知るに足らずと、

蔣丹厓曰く、按ずるに、今集、但甲子ありて年號なし、少遊・魯直が言の如き、或は別に別本有るや、未だ知る可からざるなりと、  
温謙山曰く、靖節二姓に事ふるを恥づ、千載共に其の心を諒とす、唯其れ復た肯て仕へず、自から迹を田間に寄せ、詩酒放懷せざるを得ず、然れども豈靖節の志ならんや、予謂ふ、靖節の詩、多く偶爾言興にして作り、形迹に拘らず、其の心其の志、須らく象外に於て之を得べし、區區甲子年號に於て、以て其の出處を審かにせんとするは抑も未なりと、  
以上諸家、論ずる所此の如し、「陶淵集注」に王應麟、吳師道、宋濂、郎瑛の説を擧げて詳密を盡くせり、大同小異、今一一載せざるなり、而して余の左袒する所は謙山の説に在るなり、

始作鎮軍參軍經曲阿作

弱齡寄事外、委懷在琴書。  
被褐欣自得、屢空常晏如。  
時來苟冥會、婉孌通衢。  
投策命晨旅、暫與園田疎。

詩五言 始作鎮軍參軍經曲阿作

眇眇孤舟遠、緜緜歸思紆。  
我行豈不遙、登陟千里餘。  
目倦川塗異、心念山澤居。  
望雲慙高鳥、臨水愧游魚。  
眞想初在襟、誰謂形蹟拘。  
聊且憑化遷、終返班生廬。

眇眇孤舟遠く、緜緜歸思紆なり。  
我が行豈遙かならずや、登陟千里餘。  
目は川塗の異なるに倦み、心は山澤の居を念ふ。  
雲を望んで高鳥に慙ち、水に臨んで游魚に愧づ。  
眞想初め襟に在り、誰か謂ふ形蹟に拘すと。  
聊か且化に憑つて遷る、終に班生の廬に返らん。

【注解】 鎮軍は今日の大將、參軍は今日の參謀なり、鎮軍は果して誰たる、温謙山曰く、晉書に、宋の武帝、鎮軍と爲る、靖節、其の參軍と爲ると、陶淵明曰く、鎮軍は未だ何人たるを詳かにせずと、今謂ふ武帝が晉の臣たりし時、鎮軍と作り、而して淵明之が參軍と作る、晉宋革命後にあらずるを以て、聊かも疑ふ所無し、年次を改ふるに、陶淵明の如きは史家の説に迷ふ者、曲阿は縣の名、璩に關説と稱し、隋に復た曲阿と爲し、唐に丹陽と改む、今日の江蘇省丹陽縣治なり、弱齡は幼年も少年も用ふる稱、二十歳までを言ふ、事外は物外と同じ、世事の外に心志を寄するなり、世事の外は何の用ぞ、彈琴と讀書とに此の懷を委託する、被褐、貧者の服を褐と曰ふ、毛布なり、被は「キル」と動詞に訓む、「毛詩」に「無衣無褐」とあり、貧乏しても琴書の樂あり、以て自得と爲す、屢空は「論語」の語、晏如、食を飼き、酒を空しうするも晏然猶如たり、時は時節、冥會は求めずして自から至るの意、旋轡は少く好き貌、「毛詩」に「旋兮旋兮」とあり、更に又親愛の意もあり、懸通衢、仕路に喩ふ、(陳山説) 通衢は街衢なり、投策は策杖を舍投なり、命晨旅、命を參軍に奉じ塵を出で、以て其の旅裝を早晨に整理する、暫與田園疎、田園生活と暫時疎遠となる、眇眇は渺渺なり、微遠の貌、「管子」に、渺渺乎如窮無極とあり、孤舟遊、一人、塵を出で去るに喩ふ、緜緜は微思なり、長く絶えざる貌、「毛詩」に緜緜葛藟

とあり、紆は屈曲委曲の狀を云ふ、孤舟の如く今去つて遠くは遠くもの、歸思は日に浮んで心頭にあり、其の情は紆曲、一本調子に行かずとなり、不遙は遠からうかと云ふ意味、即ち千里餘も登陟せざるべからず、其の中途の川も塗も異なりと雖も、倦むは必然なり、心は山澤に向ほ存するを以て、念、念此に在るなり、慙鳥、愧魚、鳥は雲邊を自由に翱翔し、魚は水中を自在に浮遊す、皆其の所得、而して我が念は山澤に在るも、身を山澤に置けず、鳥にも慙ち、魚にも愧づる所以、眞想初在襟、猶は曾謂なり、塗澤せず、外飾せざるが、我が眞想なり、誰謂形蹟拘、身を田園に託するも、參軍たるに託するも、ソナ事は忘却するが可い、形蹟に拘拘たるは君子の取らざる所、所謂狹量の跡あらん、聊且憑化遷、時と俱に化し、世と共に遷るが孔子の道なり、イヤ田園の、イヤ市朝のと漫りに形蹟に拘はる者は孔子の徒にあらず、幸に時世の化に應つて移らんのみ、而かも終には班生の廬に返らんなり、班生は後漢の班固を曰ふ、班固が「幽通賦」に、求幽貞之所、塵とあり、幽貞は淵明一生を通じての主義なり、出づるは本意にはあらざるも、又恐る形蹟に拘拘たるの跡あるを、是の故に出づるは出づると雖も、終には田園に歸去來、幽貞の道を修めんとなり、孫月峯曰く、淵明の時、只是れ本色に就いて鎮り得て細に入ると、謙山曰く、出入の志、孔明に同じ、孔明は返らず、淵明は終に返る、時勢同じからず、遺ふ所異なるのみと、又曰く、結語、冲澹、微に入る、淵明にあらずんば亦道ふ能はずと、

【題義】 鎮軍が何人なるや諸説一定せず、或は曰ふ劉裕、或は曰ふ劉牢之と、陶淵明の説に據れば隆安三年己亥靖節年三十五の時ならんと、姑らく是の説に従ふ、參軍は今日所謂參謀官なり、參謀官と作つて赴任の途上、曲阿に於て賦する所の詩なり、

【大意】 宋の武帝が劉裕と稱して晉の臣たりし時、鎮軍と爲る、淵明乃ち之が參軍と爲り、曲阿を經過せし時作る、自分の志を敍せしもの、弱齡即ち少年時代に功名に志は無く、唯琴書即ち文藝にのみ専心し、貧乏ながら自から以て適意を欣び、金や酒に屢ば闕乏するも曾て頓著する無し、偶ま

時運と冥會して、意氣身體共に盛んなるとき仕路即ち通衢に憩ふを得、策の如き閉具を投じて晨旅に就くの命を蒙る、是に於てか暫時田園生活と離れる、眇眇として孤舟の遠くなる如く、我が一身は一家と分れる、從つて歸思は懸懸として紆曲する、而して我が行跡は遙遙なり、山河を登陟する千里餘、川塗の異なるを見るは目倦まざるが常なるに、目倦むは何ぞ、我が心は榮達を樂まずして、常に山澤の居を念へばなり、乃ち上に雲を望んで高鳥の還るに慚ち、下水に臨んで游魚の其所を樂むに愧づ、我が眞想は塗澤も外飾も爲さず、自然の儘の智襟を披くにあり、參軍の田園のと形蹟に拘拘せざるに在り、遂に悟る參軍と爲るも自然、田園に還るも自然、世と共に化せんのみ、而かも結局は班生が示したる所の幽貞の塵、即ち田園に歸臥せん、

庚子歲五月中從都還阻風於規林

庚子の歲、五月中、都より還り、風に規林に阻せらる

行行循歸路計日望舊居

行行歸路に循ふ、計日舊居を望む、

一欣侍溫顏再喜見友于

一たび欣ぶ溫顏に侍するを、再び喜ぶ友于を見るを、

鼓棹路崎曲指景限西隅

棹を鼓して崎曲に路し、景を指して西隅に限る、

江山豈不險歸子念前途

江山豈險ならざらん、歸子前途を念ふ、

凱風負我心戡柵守窮湖

凱風我が心に負く、柵を戡めて窮湖を守る、

高莽眇無界夏木獨森疎

高莽眇として界無く、夏木獨り森疎、

誰言客舟遠近瞻百里餘

誰か言ふ客舟遠しと、近く瞻る百里餘、

延目識南嶺空歎將焉如

目を延べて南嶺を識る、空しく歎ず將焉如、

【注解】庚子は安帝の隆安四年、淵明年三十六、五月中、十五日なり、京都より還り、風の爲め規林に停るなり、規林は今明かならざるも、揚子江の沿岸なるは疑ひ無し、侍溫顏は父と云ふ説と母と云ふ説とあり、母の孟夫人を以て信となすべし、友于は兄弟を云ふ、「書經」に惟孝友ニ兄弟とあり、兄弟相愛するを謂ふ、魏の曹植の文、今之否隔、友子同愛とあり、此の如き語を、敬後の語と曰ふ、路崎曲、陸行に依らず、水行に依ること多し、西隅、舊居は方角を西方に取つて行く、潘安仁の「賦」に、獨指景而西遊とあり、江山豈不險、歸子念前途、父在し母又在す時は、子其の身を大切にす、故に江山の險阻なぞ避けて以て坦途を取るが道なり、今も其の事を思はざるにあらず、前途、即ち歸路を急ぐを以て險を避くるに違あらずとなり、凱風負我心、凱風は「毛詩」の一篇目なり、晉國に寇難あり、子七人あり、然るに母氏は七人の子を會てて他に嫁せんとす、七人の子、己が孝の足らざるを責めて、母の淫亂なるを責めず、其の子の時、凱風自南、吹彼棘心、棘心夭夭、母氏劬勞と、是を以て凱風の二字を孝道の意義に解すべきなり、今淵明が他邦に出て孝道に背き去る、母の劬勞に對して忍びずとの意、蓋し舊の寡婦と同じく、淫亂の母と解すべからず、我心は孝道に負かずと期するも、其の負くこと多きを憂ふ、柵は要するに活動を止めての意、守窮湖、窮湖は九湖ならんか、九泉を窮泉と書する例もあり、潭陽郡の故里乃ち窮湖なり、高莽は廣大にして際涯なき形容、眇無界、如何にして此の無界の廣大を處理せん、余が解、上の如し、或は規林に今權を執めて、風の止むを俟たんかと、此の説は余の取らざる所、夏木獨森疎、獨は止なり、森疎は參

幾、又高低と同義、誰言客舟遠、近畿百里餘、日本里程の二十餘里に當る、遠しとせず、延目、兩目を延屬すれば、南嶺即ち平生暮ふ所の巖阜は依然として高秀なり、將焉如、焉は何と同じ、焉如と謂すべきなり、焉如と謂するは今取らず、空歎するは將た何如の意ぞとなり、諺山曰く、少陵の詩中の字法、多く此に脱胎すと、上平聲六魚の韻、

【題義】庚子五月、都より還る途次、強風の爲め歩行自由ならず、遂に規林に休息し、其の情景を歌ふ、靖節年三十六の時なり、

【大意】庚子の五月、都城より郷里に還る途中、風の爲め舟を規林に繋ぎ、此に宿泊して作るなり、此の舟の前途は歸路を指す、舊居に歸著するは何日頃ならんと計る、又早く還りて慈母の温顔に待することなどを欣び、又兄弟と談話を交換することなども喜びの一つに數ふ、而して此の行陸より水行に還る、而して日景を指して舊居の方角を思ふ、江山の險思はざるにあらず、險處に還れば歸路は早く、安處に還れば歸路は遅る、孝子は險處を避くべきの道なるを知る、而かも其の遅れるを憂ふ、險處を通過するの已むを得ず、我を省みれば凱風即ち孝道に於て不本意の事多し、是に於て故里に返り窮湖を守らん、高莽は眇として界無し、夏木は獨り森疎なり、主人は留守なるも中庭の夏木は其の影森疎ならん、客舟遠しと言ふ者はあらんか、已に百里餘にして我が故里は遠からざるなり、目を延いて瞻れば、南嶺即ち廬山の高秀なるあるあり、此の規林に阻して空しく嘆するは焉如ぞや、嘆するに及ばざるなり、

自古歎行役、我今始知之。

古より行役を歎す、我今始めて之を知る、

山川一何曠、巽坎難與期。

山川一に何ぞ曠き、巽坎與に期し難し、

崩浪聒天響、長風無息時。

崩浪天に聒しく響き、長風息む時無し、

久游戀所生、如何淹在茲。

久游して所生を戀ふ、如何ぞ淹として茲に在る、

靜念園林好、人間良可辭。

靜かに園林の好きを念ひ、人間良に辭すべし、

當年詎有幾、縱心復何疑。

當年詎ぞ幾ある、縱心復何ぞ疑はん、

【注解】自古歎行役、(周禮)に、若國作民、而師田行役之事、則帥而致之、(注疏)に、行謂巡狩、役謂役作、乃ち公事の爲め辛勞するが故に、歎するなり、後世個人としての旅行を行役と謂ふが如きは、豈歎するに足らん、始知、淵明が其の辛苦の狀を體驗せしなり、山川一何曠、此の山、此の川、行役難を唱ふる所以、巽は卦の名、卑順なり、坎は又卦の名、陷なり險なり、又巽は風なり、坎は水なり、道路行役の艱難を言ふ、崩浪聒天響、浪の崩るる響、其の音耳を蔽るが如し、長風は山上を吹き、又水上を吹く風、障へるもの無き處を吹く風なり、久游は可し、冬遊は不可、戀所生は故郷を慕ふなり、淹は淹留、淹留して茲の地に在るは何ぞや、園林好は故郷の園林の好きを念ふなり、人間は世間、當年詎有幾、當は恐らくは餘の誤ならん、餘年幾何も無しにて通するなり、縱心復何疑、趙泉山曰く、二詩皆直に歸省の意を發すと、何孟春曰く、朱子嘗て此の詩を書し、一士子に與へて云ふ、能く此の一詩を參得して透過せば、今日所謂學業、他日所謂功名富貴なる者、皆心を經ずして可なり、上聲四支、

【大意】公人と爲つて千里に役す、古來より痛嘆する所、其の聞く所を今日我は實行する人なり、眞に其の苦を體驗す、我が門を一步出づれば天地山川頗る廣大なり、是の故に得も失も與に期し難し、

舟を繋ぐの此の處、風浪極めて激しく、響息むとき無し、久しく他郷に在りしもの、所生即ち其の故里を戀ふの念類りに生ず、如何ぞ長く此の處に滯留するを得んや、是の時氣を靜かにして園林の好きを念はば、人間即ち普通人世の俗事は良に辭すべし、餘年も亦長からざるを知る、心を縦にして復疑ふ所のもの無し、

辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗中

辛丑の歲七月、假に赴き江陵に還る、夜行塗中

閒居三十載、遂與塵事冥、

閒居三十載、遂に塵事と冥し、

詩書敦宿好、林園無俗情、

詩書宿好敦く、林園俗情無し、

如何捨此去、遙遙至西荆、

如何ぞ此を捨て去り、遙遙西荆に至る、

叩枻新秋月、臨流別友生、

枻を叩く新秋の月、流に臨んで友生に別る、

涼風起將夕、夜景湛虛明、

涼風起つて將に夕ならんとす、夜景湛として虛明、

昭昭天宇闊、皛皛川上平、

昭昭天宇闊く、皛皛川上平かなり、

懷役不遑寐、中宵尙孤征、

役を懷うて寐ぬるに遑あらず、中宵尙孤征、

商歌非吾事、依依在耦畊、

商歌吾が事にあらず、依依耦畊に在り、

投冠旋舊墟、不爲好爵榮、

冠を投じて舊墟に旋る、好爵に榮はれず、

養眞衡茅下、庶以善自名、

眞を養ふ衡茅の下、庶はくは善を以て自ら名けん、

【注解】辛丑は安帝の隆安七年、淵明年三十七、假は地名、江陵は春秋のときの楚の清宮の地、漢に江陵縣、今湖北の荊南道なり、

塗中を一本館口に作る、是とす、沙陽縣より下流一百一十里、赤折に至る、赤折より二十里、館口に至る、閒居は在塗の時代、塵事は世事なり、敦宿好、生來好む所の詩書を讀む、林園は全く俗情無し、捨此去、此の如き好林園を捨て去つてなり、遙遙は「ハルバル」なり、西荆は、李善曰く、西荆州なり、時に京都は東に在り、故に荆州を謂つて西と爲す、各本、南に作るは非、今の江陵縣即ち舊荆州なり、枻は櫂「カサ」と同義、新秋月、七月なればなり、臨流別友生、送りて以て此に至りし人に別離する、將夕、前句の月に應ず、而して夜景に入る、水色は湛湛として、天色は虛明なり、昭昭も皛皛も明白の形容、懷役、役事ある爲め心配する、不遑寐、心配する故なり、中宵は夜半なり、尙孤征、舟停泊せず、商歌は春秋の齊威が歌ひしもの、南山研、白石爛、生不遑、堯與舜禪、短布單衣適至、許、從、魯飲、牛溲、夜半、長夜曼曼何時且と歌うて、桓公の聞く所となり、登用せらる、非吾事、淵明の意、商歌を歌うて以て君に違ふなぞの故は無し、依依在耦畊、夫妻として相畔す、我が意は茲に在るなり、投冠は辭職する、旋は還るなり、舊墟は田園なり、不爲好爵榮、榮は「メダラス」旋なり、「毛詩」に葛藟榮之とあり、好爵の爲め捕縛せられざるを謂ふ、養眞は眞機を養ふなり、衡茅下は、好爵者と反對、貧賤の生活を謂ふ、庶は冀ふなり、以善自名、「孟子」人の有生の初、其の性は本善、未だ嘗て惡あらず、淵明の意亦茲に在り、下平聲八庚の韻、陳群曰く、叩枻の六句、景色生動すと、將丹崖曰く、篇中灑然恬退、慰激を露はさす、之を楚賦に較するに、靜躁の分ありと、

【題義】安帝の隆安五年、靖節年三十七、假州に赴き江陵縣に還る時、夜、塗口に行きて作る所のも

のなり、

【大意】行役中の情懷を敍す、閉居して讀書すること三十年、是の間全く塵事と没交渉なるが故に冥し、唯詩書のみ宿性の好む所、乃ち意を詩書に敦くす、林園は全く俗情無し、捨つる能はざるものを捨て去つて、遙遙たるの西荆に至る、西荆に至るには水路に憑る、故に柅を叩く、新秋月正に好し、友生と此處に別る、秋熱無くして涼風あり、此の夕太だ可し、夜景夏に虚明にして好し、天宇は昭昭たり、故に闢く、川上は島島たり、故に平かなり、行役の忽諸に付す可からざるを懷へば、決して寐ぬる邊あらず、夜中も尙征行する、商歌を發して明主を求め榮達を計るは我が事にはあらず、吾は依依として耦耕する事を愛す、耦耕を愛する者には冠の必要なし、是の故に冠を投げて舊墟に旋らん、好爵の爲め榮はるる者は他人なり、我は好爵に榮はるるを嫌ふなり、我は眞機を貧賤の家に養ひ、以て善と思ふことを爲さん、

癸卯歲始春懷古田舍二首 癸卯の歲始春古田舍を懷ふ二首

在昔聞南畝當年竟未踐 在昔南畝を聞き、當年竟に未だ踐まず、  
屢空既有人春興豈自免 屢空既に人あり、春興豈自から免れん、

夙晨裝吾駕啓塗情已緬 夙晨吾が駕を裝ひ、啓塗情已に緬なり、

鳥弄歡新節冷風送餘善 鳥弄新節を歡び、冷風餘善を送る、

寒竹被荒蹊地爲罕人遠 寒竹荒蹊に被り、地は人罕なる爲に遠し、

是以植杖翁悠然不復返 是を以て植杖の翁、悠然として復返らず、

卽理愧通識所保詎乃淺 理に卽して通識に愧づ、保つ所詎ぞ乃ち淺き、

【注解】癸卯は安帝の元興二年、桓玄が自ら楚王と稱せし歲、西曆明年三十九、古田舍は生地即ち尋陽の榮桑里なり、在昔聞南畝、南畝を耕作する、所謂躬行實踐は爲さざりしなり、論語先進篇に、子夏問善人之道、子曰不踐跡、亦不入於室とあり、屢空既有人、論語先進篇に、問也其庶乎、屢空、賜不受命而貨殖焉、億則屨中とあり、問の如き人は衣食の道を缺くも（屢空）道に於ては實踐躬行したるなり、（既有人）我は既に躬つとの意あり、春興、春耕の日に興起の節となる、豈自免、古田舍を懷ふの意始めて出づ、我も歸田して耕作の善を思ふ、夙晨は早辰なり、裝吾駕、農具を整理して、出發の用意をする、啓塗は我が田畝を啓拓するを言ふ、未だ行かざるも、已に此の思が發するゆゑ、情已緬と言ふ、緬は緬遠なり、鳥弄は鳥が好音を弄す、歡新節、正に是れ好時節、鳥も亦歡喜するなり、冷風送餘善、莊子に、列子御風而行、冷然善也とあり、此の語より得來る、妙言ふべからず、一本に、鳥弄新節冷、風送餘善と、今の本を以て可しとす、寒竹被荒蹊、主人不在なるを以て寒竹が跋扈する、地爲罕人遠、罕を幽に作る本あり、罕を以て可しとす、人跡稀疎なれば、地も自ら僻遠なり、路の遠なるを言ふと解すべからず、罕は俗字、罕に作るを正とす、是以植杖翁、論語微子篇に、子路從而後、遇丈人以杖荷蓑、子路問曰、子見夫子乎、丈人曰、四體不動、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸、昔し荷蓑翁は田園に身を託して、世間には復返せざりき、卽理愧通識、所保詎乃淺、道理に卽いて我は通識と稱

せらるるを愧づ、通識の人に古より節を費ふ者多し、賈文煥曰く、躬耕の内、節義身名、皆以て自ら全うすべし、糞ひ糞子たる能はざるも、亦丈人たるを失はず、此れ其の保つ所なりと、上座十六徒の頌、鍾伯敬曰く、幽は朴に生じ、清は老に出で、高は厚に本づき、逸は細に原す、此等の作を讀み、當に之を自得すべし、壽丹臣曰く、此等の田舎翁、近今得べきにあらず、若し能く領略すれば、復ち高士と作ると、

【題義】癸卯は安帝の元興二年、靖節年三十九、始春即ち正月、田園生活を費ぶ上より、古の田舎の状態を懐うて作る、

【大意】在昔、周以前の人が南畝に耕したることを聞く、而かも我は當年自から耕すことを爲さず、同也の如く衣食は屢空しきも、道に於ては其れ得たるの人なり、然るに今や春期にて耕作すべき時なり、其の善なることを知つては我も自から之を免るることをせんや、耕さざるべからず、乃ち夙晨に農具と旅装を整理して出づ、出づる時已に兎やせん角せん情は已に細なり、鳥の聲を弄するは新節を歡ぶなり、風の冷冷たるは餘善を送るなり、其の荒蹊は寒竹滿ち、其の地は僻陋なれば人は罕なり、是れ所謂自然に適ふの地、我は古の植杖翁の如く、此に身を託して世間に再び返らず、此處に悠然たるに如かず、農人なぞと爲るを笑ふ者は笑ふべし、我は通識の人にはあらず、而かも保つ所のものは保つ、詎ぞ之を淺しと言はんや、

先師有遺訓、憂道不憂貧、

先師遺訓あり、道を憂へて貧を憂へず、

瞻望邈難逮、轉欲思常勤、

瞻望邈として逮び難く、轉た常勤を思はんと欲す、

秉耒懼時務、解顏勸農人、

耒を秉つて時務を懼び、顏を解いて農人に勸む、

平疇交遠風、良苗亦懷新、

平疇遠風交ふ、良苗亦新を懷ふ、

雖未量歲功、即事多所欣、

未だ歲功を量らずと雖も、即事欣ぶ所多し、

耕種有時息、行者無問津、

耕種時ありて思む、行く者津を問ふ無し、

日入相與歸、壺漿勞近鄰、

日入つて相與に歸る、壺漿近鄰を勞す、

長吟掩柴門、聊爲隴畝民、

長吟柴門を掩ふ、聊か隴畝の民と爲る、

【注解】先師は孔子を指す、憂道不憂貧は「論語」の語、瞻望、先師の高徳を瞻望するも、邈は隔遠なり、難逮、追隨する能はずとなり、轉欲思常勤、動むべきを動むるが潤明の主義、是れ以て貧を憂ふる心あるなり、而かも潤明の經濟は決して蓄財の爲めにはあらず、所謂常勤努力に在るなり、耒は即ち「スキ」なり、懼時務、督人多く時務を懼ばず、故談空論、光陰を徒消す、潤明の反對する所以、解顏は愉快なる面を云ふ、勸農人、耕作の精厲すべきを勸告する、平疇交遠風、良苗亦懷新、東坡曰く、平疇の二句、古の綱畝植杖者にあらずんば道ふ能はずと、「道山清話」に、子瞻（東坡）一日學士院に在りて閑坐す、左右に命じて紙を取り、平疇の二句を書す、大小楷行草凡そ七八紙、連りに歎息して好しと稱し、左右の給事に散すと、張表臣曰く、僕、田中に居る、穠福是れ力む、夏秋の交、稍早して雨を得、雨餘徐歩すれば、清風飄飄、禾黍秀を望ひ、塵埃を濯うて新緑を泛ぶ、乃ち悟る、潤明の句善く物を體するを、雖未量歲功、即事多所欣、歲功即ち收穫の有るや無きやは未だ計量する邊はあらずも、耕作其の物、欣喜する所多しとなり、耕種有時息、行者無問津、耕者の樂は行者に勝るを謂ふなり、子路問津の事、「論語微子篇」に出づ、要するに潤明は時弊

を敬ふ爲め、孔子の道を誹つて食を謀らず、道を憂へて貧を憂へず等の意味には、全く反對したるものなり、行者無同津の五字、如何に解釋すべきかは問題なり、但「論語」に反對したる意義は明白なりとす、日入相與歸、落日に家に返るを言ふ、憂樂勞近鄰、美酒佳肴にあらざるも、濁酒疎肴、以て近鄰の人人と慰勞する、長吟掩柴門、窮爲隱畝民、古の隱畝の民は、決して我田引水の争論を爲さず、淵明が今の農と爲らずして、古の農たらんと欲する所以、其の眞朴に在るなり、十一頁と十二文(勤、欣)とは古通韻なり、何義門曰く、瞻望の二句、此れ道の行ふ可からざる時は、聊か農と爲り以て世を殺するを謂ふ、歲功の二句妙絶、仍任貧を憂ふるに一ならず、故に言近く旨遠し、行者無同津の句、已に運世の意を寓すと、温謙山曰く、唐人、即事を以て題とす、蓋し此の詩に本づくかと、

【大意】先師即ち孔夫子は遺訓を垂る、其の語は何ぞ、道を憂へて貧を憂へず、彼の高徳は瞻望せざるにあらず、而かも速び難きを如何、是に於てか轉じて人は人として常の勤めを爲さんことを思ふ、我の常勤は未を秉つて時務即ち農畝を懼ぶに在るなり、自から勤め亦以て他の農人にも勸告する、乃ち知る平疇は遠風交ふ、良苗は新ならんことを懷ふ、春畊の結果は秋日に順はる、故に歲功即ち秋穫は今日量る能はざるも、常勤其事が今日の欣びであるなり、畊者即ち我輩農民は時ありて息ふ、行者即ち子路は今日の世の人にあらず、故に津を我に問ふ無し、要なき議論を爲すを免るるを言ふ、一落日に家に歸り、濁酒疎肴以て近鄰と懼飲す、古の農人の如く長吟して柴門を掩ひ、肯て水論なぞ爲さず、古の剛畝の民は決して水論なぞ爲さざるなり、

癸卯歲十二月中作與從弟敬遠

癸卯の歲十二月中作り、從弟敬遠に與ふ

寢迹衡門下、邈與世相絕。  
顧盼莫誰知、荆扉晝常閉。  
淒淒歲暮風、翳翳經日雪。  
傾耳無希聲、在目皓已絜。  
勁氣侵襟袖、簞瓢謝屢設。  
蕭索空宇中、了無一可悅。  
歷覽千載書、時時見遺烈。  
高操非所攀、深得固窮節。  
平津苟不由、棲遲詎爲拙。  
寄意一言外、茲契誰能別。

【注解】寢迹は起臥棲息と同義、世と絶交す、顧盼は「カヘサミル」なり、寢觀にはあらず、莫誰知、誰人し知る者は莫し、荆扉



は疎末の門、凄凄は二義あり、「毛詩」の「秋日凄凄」は、毛傳に涼風也と、今は歲暮なれば、寒風の貌と解すべし、爾爾は隱隱と同じ、朝日雪、毎日雪の爲め天色の晴濟たるを言ふ、傾耳無希聲、在目皓已驚、此の十字は疎末の句、心を以て解すべし、字を以て解すべからず、羅大經（宋人）は、後世能く加ふる者無しと評せり、物に其の言の如し、耳に就いては其の響きを知り、目に就いては其の響きを知る、勁氣、強勁寒氣、筆は食を感る器、竹を以て之を爲る、圓は筆、方は筒、圓は酒器、謝屐設、敬遠が淵明に對して飢寒を免かれしめん爲に酒食を始る、之を謝すと云ふ、蕭索空宇中、空は空虛、字は屋宇、室中、貧人の如く質樸品のあらざるを言ふ、了無一可悅、喜悅すべき材料なし、唯以て喜悅せしむる者は、千載書のみ、遺烈は古人の遺風芳烈なり、高操は古人の高操、採を疎山本操に作る、非所攀、古人の高風堅操は我の追攀する所にはあらず、深得固窮節、平津苟不虫、前漢武帝の時、公孫弘、平津侯に封ぜらる、弘は學識共に高く、武帝を輔けて功多し、詔に曰く、漢興以來、朕位に在り、身、儉約を行ひ、財を輕んじ、義を重んずる、未だ公孫弘の如き者ばあらずと、今、淵明、晉室の爲め敗散たる能はず、大に公孫弘に恥づるありとなり、棲遲詎爲拙、衡門の下、棲遲するは、古の隱者の道、拙と爲す者は爲せ、拙ならずと爲す者は爲せ、寄意一言外、一言とは固窮を指して云ふ、固窮の節を守ると云ふ一言の外は、總て言ふ所にあらず、暗に桓支が帝と稱するの代を痛む、茲契誰能別、契は契合、別は辨別なり、人の之を辨別する者は少なし、汝、敬遠は能く辨別せよとなり、入塵九屑の韻、陳曄明曰く、起四句一句一意、一意一轉、曲折、致を盡す、全く子卿が骨肉離枝葉の章句を得、而して揚幕の迹無しと、温謙山曰く、傾耳の五字、渾化迹無し、陶詩の高、千古に卓絶する所以と、

【大意】 衡門の下に起臥して、世と交を絶つ、願望するに知る者は莫し、白晝も扉を閉づ、寒天の故に風は凄凄と吹き、冬暮の故に雪は經日息まず、而して雪の聲を聞かんと欲するも聲は微にして太だ希なり、而かも目に在つては其の色の皓潔なるを見る、寒氣は勁烈にして襟袖に侵入す、之を禦ぐには友の貽られたる所の酒食の有るあり、室中は蕭索、我を慰安する具は無し、我を慰安するものは唯

古人の書のみ、之を讀み古人の遺烈を見る、而かも其の遺烈は良とに高操にして之を慕ふも之に攀づるを得ず、深く固窮の節を得て、遺烈を後世に留むる平津侯の如き、之を敬慕するも之に追由するを得ず、平津侯の如き人に追由するを得ざるに於ては、寧ろ衡門の下に棲遲して、以て拙を守るに如かず、乃ち我が意を固窮なる一言に寄與する、爾敬遠は能く我が意の存する所を分別するであらう、

乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪

乙巳の歲三月、建威參軍と爲り、都に使し錢溪を經

我不踐斯境。歲月好已積。 我斯の境を踐まず、歲月好し已に積む、

晨夕看山川。事事悉如昔。 晨夕山川を看る、事事悉く昔の如し、

微雨洗高林。清颺矯雲翻。 微雨高林を洗ひ、清颺雲翻に矯たり、

眷彼品物存。義風都未隔。 彼の品物の存するを眷る、義風都て未だ隔てず、

伊余何爲者。勉勵從茲役。 伊余何爲る者ぞ、勉勵茲役に從ふ、

一形似有制。素襟不可易。 一形制有るに似て、素襟易ふ可からず、

園田日夢想。安得久離析。 園田日に夢想す、安んぞ久しく離析するを得ん、

終懷在歸舟諒哉宜霜柏

終懷歸舟在在、諒なる哉霜柏に宜し、

【注】乙巳は晉の義熙元年、備明年四十一、建威參軍の職を奉じ、上京に使用す、錢溪は安徽貴池縣の東西四十五里の地、今日は梅根河、又梅根浦と名づく、是の年、安帝、江陵に在り、南陽の魯宗之、義兵を揚ぐるも、賊(桓玄の兵)の爲め敗れる、然りと雖も、晉大失あらずして、舊物を損せず、淵明此の時ある所以、我不歸斯境、錢溪は嘗て一遊せし地、而かも久しく踐まずとなり、歲月好已積、昔遊より已に久しとなり、晨夕看山川、今來りて此に二宿か三宿かは知らず、晨夕に此の土地を見る、事事悉如昔、山川の猶ほ舊なるを喜ぶなり、微雨洗高林、清曉掃雲閣、此の十字、千古の名句、何義門曰く、二句奮迅出塵と、曉は風なり、掃は種種の義あるが、今は高く擧がるの義を取る、閣は羽堂なり、風が來つて雲の羽を高く擧ぐるの謂ひなり、極めて細敏の景を敘す、春は春戀、品物は此の錢溪に於ける事事物物を言ふ、義風都未開、義善の風、猶ほ舊と同じ、伊余は「毛詩」に「伊余來暨」とあり、何爲者は、「史記」(項羽紀) 客何爲者とあり、「イカナルモノゾ」「ナンスルモノゾ」共に通ず、勉勵從茲役、平語なるか、不平語なるかは判じ難きも、建威參軍の役に從事して、勉勵すとの意、一形似有制、形は形體、制は制裁、役人と爲れば、役人の形としての制裁は免るる體はず、役人と爲つて居ては職人と爲ることは能はず、其の制裁あればなり、而かも我に於ては素志、即ち素志、即ち宿心は變易すべからず、形體の爲めに、素志までも變易する能はずとなり、是の故に、園田は夢にだも忘れず、夢にだも忘れざる園田、安んぞ久しく離折することを得んや、終懷在歸舟、霜柏は人の節操固きを云ふ、形は世の爲め役せらるるも、素志は始終一貫して、決して變ずべからずとなり、入歷十一陌の韻、陳神明日く、一形の二句眞に素語と、

【題義】乙巳は安帝の義熙元年、靖節年四十一、是の年三月劉懷肅が建威將軍と爲つて、逆黨を江陵に擊つ、靖節是が參謀と爲つて之に赴き、途中、錢溪に於て、其の情懷を歌ふものなり、

【大意】三月、都に使用して路を錢溪に取る、是の錢溪は曾游の地、其の曾游も已に久し、是に於てか感慨に堪へず、山川の風景を見るに、事事悉く昔日と異らず、而して只今看る所は微雨が一過して

高林洗ふが如く、清風は雲の羽莖を捲いて高く天上に擧る、昔時も此の狀を見たるなり、其の品物今猶ほ存して此の如し、昔も今も隔絶せず、余は伊れ何爲る者ぞや、天地自然の悠悠たるに對して、我は役役として參軍なる職務の爲め勉勵する、而かも一形は易ふ可からず、我の心魂は日夜園田に在るなり、參軍と爲ると雖も、決して園田と心は離折せず、終には歸去來を歌ひ、一舟に棹して歸らんのみ、霜柏の節は終始無し、我の志も亦終始無きなり、

還舊居

舊居に還る

疇昔家上京六載去還歸

疇昔上京に家す、六載去つて還歸る、

今日始復來惻愴多所悲

今日始めて復た來る、惻愴悲む所多し、

阡陌不移舊邑屋或時非

阡陌舊を移さず、邑屋或時は非なり、

履歷周故居鄰老罕復遺

履歷故居に周し、鄰老復た遺る罕なり、

步步尋往迹有處特依依

步步往迹を尋ね、有處特に依依、

流幻百年中寒暑日相推

流幻百年の中、寒暑日に相推す、

常恐大化盡氣力不及衰

常に恐る大化の盡くるを、氣力衰ふるに及ばず、

廢置且莫念。一觴聊可揮。

廢置且念ふ莫し、一觴聊か揮ふ可し、

【注解】上京は、『朱子語錄』に曰ふ、廬山に陶明古逵の處ありと、上京と曰ふ。今、土人、荆に作る、江中に一盤石あり、石上に  
痕あり、淵明、其の上に醉臥すと云ふ、淵明醉石と名づく、陶淵曰く、『名勝志』に、南康城西七里、玉京山あり、亦上京と名づく、  
淵明の故居あり、噶昔家「上京」とは、即ち是れなりと、六載去還歸、韓子蒼（宋人）曰く、淵明、庚子の始より建威參軍と爲り、參  
軍より彭澤令と爲る、遂に官を棄てて歸る、是の歲乙巳、故に六載と云ふと、趙果山曰く、乙未より鎮軍の幕を佐け、今に迄る六載、  
子蒼誤ると、吳賡泰曰く、鎮軍、建威は皆晉時、治軍の官、公、庚子の歲、鎮軍參軍と作る、建威にはあらずと、陶淵曰く、蓋し己  
亥より甲辰に至る、正しく六年、去還歸は己亥を以て出で、庚子、假に還る、辛丑再び還り、甲辰、関に服し、又本州建威參軍と爲  
る、去つて歸り、歸つて復た去る、故に六載去還歸と曰ふ、韓、趙、吳、均しく之を考へざるのみと、陶淵は、「荀悅文」に惻愴動  
懐とあり、悲を形容する語、阡陌不移舊、東西南北の地形は依然たり、而かも邑屋は舊と同じからず、履歷周故居、舊時の様は、處  
處週遍してあり、耶老罕復還、人は已に逝いて、遺老は幾人も無し、感慨の目を以て往迹を尋問し、其の往迹の依然として有處に到  
れば、特に依依、戀戀の情が起るなり、流は流轉、幻は幻化、古往今來、人間は流幻ならざるは無し、乃ち世上の意味に解す、世上  
百年の中、寒暑日相推、『易』に、寒暑相推、而成歲焉と、推は遷移義なり、常恐大化盡、廣義に言へば、天地有情皆盡さる、快義に  
言へば、人間は壽命盡きて死すとなり、氣力不及衰、神經の作用猶ほ盛なるを云ふ、廢置且莫念、萬事合て置き、何事も念頭に置か  
ず、一觴聊可揮、忘愁帯を以て天下の憂、悉皆忘るべし、陳神明日く、大化の二語名言、人の慮かる所のもの衰ふ、孰か衰ふるに及  
ばざる者有るを知らんや、感ずる所、更に深しと、上平聲五微の韻。

【題義】一たび家を出でて、南船北馬、已に五年餘、今日其の舊居に還り、感慨を發せられしものな  
り、義熙二年、靖節年四十二、

【大意】噶昔、上京に居住し、此に居住すること六年、而して今日亦復た茲に來る、噶昔と今日とを

俯仰すれば、惻愴として悲しむべきもの多し、街區の劃態は依然たるも、屋宅の形狀は皆舊にあらず、  
是に於て故居即ち自身が舊住の處を周遊して見れば、舊知の老人遺る者罕なり、感慨の目を以て歩  
に往迹を尋ね、其の舊物の有る處に到りては、情特に依依たるものあり、乃ち思ふ、流轉幻化百年の  
中、寒暑往來堂堂として節は推し移る、移るは可なり、常に恐る終には大化の盡くるに至るを、氣力  
の未だ衰へざるの時、天下の事憂へても限りなし、如かず一杯の酒を飲み、以て元氣を發揮せんには、

戊申歲六月中遇火

戊申の歲六月中火に遇ふ

草廬寄窮巷。甘以辭華軒。

草廬窮巷に寄せ、甘んじて以て華軒を辭す、

正夏長風急。林室盡燒燔。

正夏長風急に、林室盡燒燔す、

一宅無遺字。舫舟蔭門前。

一宅も遺字無し、舫舟門前に蔭る、

迢迢新秋夕。亭亭月將圓。

迢迢新秋の夕、亭亭月將に圓ならんとす、

果菜始復生。驚鳥尙未還。

果菜始めて復た生じ、驚鳥尙未だ還らず、

中宵竚遙念。一盼周九天。

中宵竚んで遙に念ひ、一盼九天に周し、

總髮抱孤念。奄出四十年。

總髮孤念を抱き、奄出四十年、

形迹憑化往靈府長獨閒。

形迹化に憑つて往き、靈府長く獨り閒なり。

貞剛自有質玉石乃非堅。

貞剛自から質あり、玉石乃ち堅きに非ず。

仰想東戶時餘糧宿中田。

仰想す東戶の時、餘糧中田に宿す。

鼓腹無所思朝起暮歸眠。

鼓腹思ふ所無し、朝に起き暮に歸眠す。

既已不遇茲且遂灌西園。

既已に茲に遇はずんば、且遂に西園に灌がん。

【注解】 戊申は義熙四年、淵明年四十四、窮巷は柴桑里なり、草廬は孔明が三顧草廬の文字、華は美園、軒は大夫の車なり、十六國春秋に、德非管仲、不足華軒堂、卓とあり、正夏は六月、林室は林と室となり、燔は炙なり、又、焚なり、無遺字、幾棟ありしや知らず一家全焼なり、勸舟は兩舟が並ぶなり、門前の江水には舟のみ焼け残り、柳蔭に在り、迢迢は高遠の貌、新秋夕、天が澄みて高遠なるを云ふ、亭亭は翠々立つの貌、即ち翠立は高きを以て今月の中天に圓なるを云ふ、果菜は果菜に作る本あり、始復生、蠶が焼けざりしを以て芽を發生したるなり、驚鳥尙未遑、林已に焼けたり、鳥の歸宿する處なし、還らざる所以、中宵は夜半、竝は竝立、中庭に竝立するなり、遙念、天の遙なるを望んで念ふ、一盼周九天、盼は顧みるなり、觀るなり、天上を殘るところなく願望するをいふ、總髮は總角と同じ、「毛詩」に「總角非分」とあり、其の髮を總髮して之を結束する、少年少女なり、孤念は俗語の頑固なり、自己を信する厚く、人と和せざる性質、淵明は此の性質を保持して、茲に四十年を在出したるなり、形迹憑化往、靈府長獨閒、有形の幻軀は時勢に依つて種種と變化するも、無形の精神は今昔異なること無く、一の主義を始終通貫して居るとなり、靈府は「莊子」に不可入於靈府とあり、心の異名と心得べし、貞剛自有質、玉石乃非堅、精神の貞剛と、玉石の堅剛と比較するときは、玉石は柔にして、精神は強なり、仰想は敬意を表する時用ふる語、東戶時、何孟春曰く、子思子曰く、東戶季子の時、道上履行して、遺を拾はず、餘糧宿中田、東戶氏の時、耕者、餘糧を隱畝に宿す、上代の人の正直、他人の田を刈らざるを言ふ、鼓腹無所思、朝起暮

歸眠、上代の民は鼓腹して以て昇平を樂しむ、其の故に思ふ所も無きなり、唯是れ朝起暮眠、尋常生活の道を講ずるのみ、干戈爭奪の事はあらず、仰想より歸眠に至る二十字は過去上世の事を言ふ、既已、スアニスアニスなり、スアニスアニスと訓む何の所以を知らず、不遇茲、上世の鼓腹昇平に今日は遇はずとなり、且遂灌西園、水を西園に灌ぐの意味、十二文、十三元、一先、は古通韻なり、將丹厓曰く、他人此の火變に遇はば、定んで牢騷愁苦の語を作さん、先生、一筆を書けず、末に僅に仰想東戶、意、言外に在り、此れ眞に能く靈府獨り閒なる者と。

【題義】 義熙四年戊申、靖節年四十四、栗里の家居、火を失す、其の情景を敘するものなり。

【大意】 草廬の在る所は窮巷即ち細民窟なり、此の窮巷に甘んじて決して繁華豪勢の處へ移らざるなり、時正に六月仲夏、風の急なるに乗じて誤つて火を失し、林室盡く焼燔して、餘す所の物無く、一家全焼す、住するに家無ければ、門前の水流に舟を泛べ、舟中に起臥するに至る、舟中に起臥する半月餘、終に新秋即ち七月、月も將に圓ならんとする十五夜も舟中に於て見るに至る、既にして燒跡を見れば、果菜は自然と復た芽を生じたるも、燒前樓んで居りし鳥は林が燒けたれば遂に還歸せず、中宵に竝立して遙に念ひ、九天を周く願望す、而して自身を顧みれば總髮より以來孤立の念を抱き、今に至る四十年、其の念は變せず、形迹は時の化に一任して往くも、靈府即ち精神一片は長く獨り閒なり、而して此の精神の貞剛は、非常に堅固にして、玉石も此に比すれば堅きを失するを覺ゆ、是に於て上古東戶氏時代を想像する、餘糧は中田に宿して、民皆鼓腹し、何等の欲念も無し、朝に起き暮に眠る、今や茲東戶氏の時代に遇ふ能はず、且く是の燒跡に生じたる果菜に水を灌ぎて以て自から慰せん、

乙酉歲九月九日

乙酉歲九月九日

靡靡秋已夕、淒淒風露交。

靡靡秋已夕、淒淒風露交はる、

蔓草不復榮、園木空自凋。

蔓草復た榮えず、園木空しく自ら凋む、

清氣澄餘滓、杳然天界高。

清氣餘滓澄み、杳然天界高し、

哀蟬無留響、叢雁鳴雲霄。

哀蟬響を留むる無く、叢雁雲霄に鳴く、

萬化相尋繹、人生豈不勞。

萬化相尋繹す、人生豈勞せざらん、

從古皆有沒、念之中心焦。

古より皆沒あり、之を念へば中心焦す、

何以稱我情、濁酒且自陶。

何を以て我が情に稱はん、濁酒且自ら陶たり、

千載非所知、聊以永今朝。

千載知る所にあらず、聊か以て今朝を永うせん、

【注解】 巳酉は義熙五年、淵明、年四十五、身、栗里に在り、是の年、劉裕、南燕を伐つ、南燕の慕容超、顔りに晉邊を侵略す、淵明が重九の詩ある所以、蘇詩は、「毛詩」の「行邁踟躕」は、遲遅と意義同じ、「書」の「商俗踟躕」は、隨順の意、今の意、遲遅と見るは的確ならざるも、此の他の義理を發見せず、夕は晚なり、秋晚なり、風露交、正に是れ秋晚の實狀、蔓草も園木も平等に凋落する、滓は「カス」澱なり、水澄の粉末を澱と曰ふ、清氣が天地に充滿して、滓澱に至るまで澄まざる者なきを言ふ、天界高、清の極、澄の極、無留響は哀蟬、即ち秋蟬が鳴き止まざるを言ふ、叢は衆なり、萬化相尋繹、蟬も雁も皆萬化の中を出でず、蟬は「論語」に「蟬之爲貪とあり、抽繭なり、理なり、其の繭緒を引いて之を窮むるなり、天地間種種の事、尋繹すべきもの多し、人生豈不勞、

勞勞役役、人生の常なり、人たる者は勞せざる可からず、從古皆有沒、念之中心焦、人生に公道のものは死より外なし、貴人も賤人も皆は是れ平等なり、而かも死事を思念するに於ては、焦慮せざるを得ず、生死共に大義存すればなり、此の焦慮を消滅するには何物を以てせんや、唯一杯の濁酒あるのみ、千載非所知、千載を知る淵明の如きはなし、而かも自ら所知にあらずと云ふ、悲慨極まり無し、聊以永今朝、千載の事を思念せんよりは、眼前今朝の樂を永うせんのみ、下平聲二蕭韻、温謙山曰く、清氣の二語、高秋の爽色を道ひ盡くす、留響を歸響に作る本あり、留字の妙に及ばずと、

【題義】 義熙五年己酉、靖節年四十五、九月九日の佳節、秋日の感慨を發せられしものなり、

【大意】 九月九日の佳節に遇うて所懐を發ぶ、靡靡たる秋晚、風露は正に淒淒、蔓草は將に枯れんとし、園林は凋落す、天は高くして餘滓無く、清氣杳然たり、哀蟬は鳴くを止めず、雲霄を望めば、叢雁の鳴いて過ぐるあり、秋の秋たる萬化、箇の中に於て以て尋繹すべし、人生も萬化の中を出でず、豈勞せざるを得ん、勞したる後は終に死没す、古往今來然り、之を念へば中心焦慮に禁へず、是の焦慮を醫するに何を以てせば可からん、唯一杯の濁酒あるのみ、千載の上も下も關知する所にあらず、聊か以て憂を忘れ樂を取らんのみ、

庚戌歲九月中於西田穫早稻

庚戌の歲九月中、西田に於て早稻を穫る

人生歸有道、衣食固其端

人生有道に歸す、衣食固に其の端

詩五言 乙酉歲九月九日 庚戌歲九月中於西田穫早稻

孰是都不營。而以求自安。

孰か是都て營ます、而かも以て自安を求めん、

開春理常業。歲功聊可觀。

開春常業を理し、歲功聊か觀る可し、

晨出肆微勤。日入負耒還。

晨出微勤を肆にし、日入つて耒を負うて還る、

山中饒霜露。風氣亦先寒。

山中霜露饒く、風氣亦先寒し、

田家豈不苦。弗獲辭此難。

田家豈苦ならざらん、此の難を辭するを獲ず、

四體誠乃疲。庶無異患干。

四體誠に乃ち疲る、庶はくは異患干無からん、

盥濯息簷下。斗酒散襟顏。

盥濯簷下に息ひ、斗酒襟顏散す、

遙遙沮溺心。千載乃相關。

遙遙沮溺の心、千載乃ち相關す、

但願長如此。躬畊非所歎。

但願ふ長く此の如くならんことを、躬畊は歎する所に非ず、

【注解】庚戌は義熙六年、人生歸有道、衣食固其端、衣食足而知禮節之意、禮の道、衣食より始まる、常人に就いて言ふ、非常人に於て言ふにあらす、論語「學而篤に、子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也」已、是れ非常人に就いて言ふ、淵明は彼の空説放論、光陰を徒消する徒に對して、勸勉主義を鼓吹せん爲め、口を開けば衣食の道を説く、孰是都不營、而以求自安、獨立の語は生活其のものに在り、未だ生活する能はず、何ぞ獨立するを得ん、自ら奮み、自ら安んず、獨立は此に在るなり、開春は新春、新春に先づ各自の常業を整理し、而して其の結果は秋日の歲功即ち收穫と爲る、早晨に家を出で、日暮に家に還る、田家の業に従事する、白晝僅僅の間のみ、故に微勤と曰ふ、而かも山中の田は霜露寒風を受くる體く、

其の收穫も努力に報ゆるに足らず、田家の常業、苦なりとせず、而かも此の苦難を辭するに於ては、獨立の生活は能はず、苦難決して辭すべからず、四體は肢體なり、「孟子」曰く、四體四體也、身の全體を言ふ、庶は庶幾なり、異患干、身體は疲勞するも、遂に異なる憂患を免るとなり、陶淵曰く、四體の二語、龐德公、妻子を率ゐて園車に躬畊し、而して曰く、世人皆始るに危を以てす、我國り始るに安を以てすと、盥は物を洗ふを盥と曰ふ、濯も亦洗ふなり、物を洗ひ終つて休息するなり、斗酒散襟顏、或は濁酒、或は清酒、或は升酒、或は斗酒、皆其の時の實事のみ、得れば即ち襟顏を散するなり、遙遙は春秋時代を今日即ち晉時代から見ればなり、沮溺心、千載乃相關、長沮桀溺が耦耕する心事、我が今田園に従事する心と全く同一なり、人を避けて耕すは我が心にあらす、世を避けて以て耕す、其の心事は沮溺と我と相關保するものならずや、但願長如此、躬畊非所歎、李公操曰く、此の詩を觀れば、知る元亮既に休居し、惟躬耕是れ責するを、故に蕭德施曰く、道に安んじ、節に苦しみ、躬耕を以て恥とせずと、譚元春曰く、陶公の眞實本分の語を讀む毎に、生産を事とせざるの人は反つて是れ俗根未だ脱せざるを憂ひ、故に清高と作すと、上平聲十五韻の韻、

【注解】義熙六年庚戌、靖節年四十六、栗里に在りて、早稻を西田に穫り收め、其の平日辛勞の功ありしを嘆喜して敘べしものなり、

【大意】人生の有道も無道も、衣食を以て其の端とす、衣食あり、乃ち以て有道なり、衣食なし、乃ち以て無道なり、是を以て何人も衣食の道を營み、以て自安を求めざるは無し、開春に先づ常業を整理し、而して是の功を秋に收む、早晨に家を出で、日入つて還る、而かも山中は霜露饒多なれば、風氣も亦寒し、收穫の善は著にありて寒にあらず、故に山中の農田は勞多くして功少し、山農は苦なりと雖も、而かも此の難を辭するを得ず、四體の疲るるは當然なれども、此の如くするときは患も亦免かるべし、家に還りて、器具や手足を洗ひ以て簷下に憩ひ、一日の勞を慰するに斗酒あり、飲んで以

て襟顔せきがんを散すべし、遙遙やうやうたる周代しゅうだいの沮溺しよてきの心、千載せんざいの下、我われと乃すなはち相關係あひくわんけいする、但願ただねがふ農事のうじの爲め勞ろうすること長く此かくの如ごとくにして止まざることを、躬畔きんぱんは我が分ぶんなり、何ぞ曾かつて歎たんずる所あらんや、

丙辰歲八月中於下澗田舍穫

丙辰へいしんの歲八月中とつちゅう、下澗かせんの田舍でんしやに於て穫かる

貧居依稼穡ひんきよいかさく戮力東林隈

貧居ひんきよ稼穡かさくに依る、力を戮たす東林とうりんの隈

不言春作苦常恐負所懷

言はず春作しゅんさくの苦を、常に恐る懷かふ所に負おくを、

司田眷有秋寄聲與我諧

司田しでん秋あるを眷あむ、聲こゑを寄よせ我われと諧かいす、

飢者懼初飽束帶候鳴雞

飢者きしや初飽しよほうを懼おそび、束帶そくたい鳴雞めいきを候こうす、

揚機越平湖汎隨清壑廻

機たを揚あげて平湖へいこを越え、汎はんとして清壑せいこくに隨したがつて廻めぐる、

鬱鬱荒山裏猿聲聞且哀

鬱鬱うつうつ荒山かうざんの裏、猿聲さんせい聞きく且かつ哀あし、

悲風愛靜夜林鳥喜晨開

悲風ひふう靜夜せいやを愛あいし、林鳥りんちゆう晨開しんかいを喜よろこぶ、

曰余作此來三四星火類

曰いふ余われ此來こゝを作なし、三四せいし星火くわ類るく、

姿年逝已老其事未云乖

姿年しねん逝いて已すでに老おい、其事こと未なだ云いふ乖かず、

遙謝荷篠翁聊得從君棲

遙謝やうしや荷篠かせうの翁おきな、聊いささか君きみに從したがつて棲すむを得えたり、

【注解】丙辰は義熙十二年、淵明年五十二、下澗は地名、未詳なるも栗里ならん、下澗に於て秋の收穫を作す、貧居依稼穡、貧に託して、稼穡の道を獎勵する、戮力は一人にあらず、一家舉つてなり、東林隈は廬山の東林にはあらざるべし、不言春作苦、春作は苦なりと言ふ者に反す、常恐負所懷、春作の勞に對して、其の收穫の果して開ゆるや否やを懸念するなり、司田は「周禮」に田を掌理する官、眷有秋、巡視して以て有秋所謂豐年を眷視するなり、寄聲與我諧、豐年の狀を眷て、司田官が淵明と其の事を話し、同聲附和するなり、飢者懼初飽、此の豐年に會ひ、今日まで飢饉に苦しみし者が、初めて飽食するを得て懼ぶなり、束帶候鳴雞、淵明が東帶するの、司田官が東帶するの明白ならず、今日らく司田官の巡視と看る、候鳴雞、早晨に東帶して出發する、田を巡視するならん、揚機越平湖、平湖は湖水に相違なきも、今日は縣名なり、浙江省錢塘道に當る、汎隨清壑廻、壑の曲處に隨つて汎汎たる舟が見えたり、隱れたりするなり、鬱鬱荒山裏、猿聲聞且哀、二句全く荒山の景、題目の田舎と全く關係無きものの如し、詩の調理法としても、不統一の傾向を覺ゆ、然りと雖も是れ實事なりとせば、亦如何とすべからず、悲風愛靜夜、林鳥喜晨開、是れは荒山裏の景なるや、山を出で田舎に歸りて後の景なるや、判然せざるも、風は悲しみ、鳥は喜び、時の變化窮り無きの意を寓せしなるべし、曰余作此來、此の田舎に來つてよりの意、三四星火類、類は積に同じ、塵の義、擢の義、三四年を経過すとの意、姿も年も共に衰老、其事、我が素心の事は、未だ初めより乖かざるなり、荷篠翁は古の農事獎勵の人、君は荷篠翁を指す、八齊と九佳と十友の三韻、古代通用す、李公換曰く、蔡漢已前、字書未だ備はらず、既に多く假借（類と積と普通なるを以て、同一義に用ふ、之を假借と云ふ）、而して音反切無し、平仄皆通用す、齊漢より後、既に拘するに四聲を以てし、又限るに音韻を以てす、故に士準は偶聲病を以て工と爲し、文氣安んぞ卑弱ならざるを得ん、惟淵明、韓退之、時時、俗の拘忌を擺脫す、故に栖字乖字と、皆其の節韻を取つて用ふ、蓋し筆力自ら以て之に勝るに足る、清潭曰く、蔡論大だ善し、栖字乖字と節韻を取る云云、何等の癡言ぞ、今韻（唐以後）と古韻（唐以前）との別を知らば、何ぞ正韻節韻の説を爲さんや、又韻に拘はるるを俗と言はば、李白も杜甫も皆俗なり、韓詩の雅ならざる、蓋し是の故なり、

【大】秋穫の所感を彼ふ、貧居、稼穡に依つて衣食する、是の故に一家力を戮せて東林の隈の田を  
 耕す、苦は樂の因たるを知る、何ぞ春耕の勞苦を言はん、旱天雨天、豊凶を卜すれば、懐ふ所に背く  
 を恐るるのみ、然るに秋日に臨み、司田官が巡視して其の有秋を懼べば、我も亦之と同聲に喜聲を發  
 す、飢者も遂に飽くことを得ん、雞鳴即ち早晨に東帶し、機を揚げて平湖を越ゆ、其の舟の影は清整  
 の曲處より隠見する、荒山は樹木鬱鬱たり、而して猿聲は哀哀たり、悲風は靜夜に宜しく、林鳥は晨  
 開を喜ぶものの如し、余は此の中に来りて、已に三年四年の星火を送る、然らば四年前より老いたる  
 所以なり、而かも素心の事は未だ乖かず、我の農事に勞苦する心は、古の荷蓑翁より得來るもの、遙  
 かに謝せざるべからず、恩人なればなり、君が徒と爲つて此に棲むを得たるは、我が喜ぶ所なり、

飲酒 二十首并序

飲酒 二十首并序

余閒居寡懽、兼此夜已長。偶有名酒、無夕不飲。顧影獨盡、忽焉復醉。既  
 醉之後、輒題數句自娛。紙墨遂多、辭無詮次。聊命故人書之、以爲懽笑  
 爾。

余閒居懽寡し、此の夜已に長きを兼ぬ、偶ま名酒あり、夕として飲まざるは無し、影を顧み

て獨り盡す、忽焉復醉ふ、既に醉ふの後、輒ち數句を題し自ら娛む、紙墨遂に多く、辭詮次無  
 し、聊か故人に命じて之を書し、以て懽笑を爲すのみ、

衰榮無定在彼此更共之。

衰榮定在無し、彼此更に之と共にす、

邵生瓜田中寧似東陵時。

邵生瓜田の中、寧ろ東陵の時に似ん、

寒暑有代謝人道每如茲。

寒暑代謝あり、人道毎に茲の如し、

達人解其會逝將不復疑。

達人其の會を解く、逝いて將に復疑はざらんとす、

忽與一觴酒日夕懽相持。

忽ち一觴酒を與へらる、日夕懽んで相持す、

【注解】飲酒、淵明退歸の後、世變日に甚し、酒にあらすんば憂を掃ふ能はず、酒にあらすんば娛を求むる能はず、酒に託して以  
 て焉を逃るるものなり、衰榮無定在、彼此更共之、彼は衰にて、此は榮と定め無く、彼にして我と榮とあり、此にして我と榮と  
 は現れざるなり、邵生は邵平なり、秦の廣陵の人、東陵侯に封ぜらる、秦亡びて後、瓜を長安城東に種う、瓜、五色あり、甚だ美、  
 世、之を東陵瓜、又、青門瓜と云ふ、瓜屋の主人と、東陵侯と身分は違ふ、而かも其の違ふ所以の者は、其の人、義を守り、漢に仕  
 へず、田野に甘んず、淵明以て託する所茲に在るなり、寒暑代謝は、古今の常理なり、人道の衰榮亦古今の常理なり、而かも達人に  
 あらずんば我と榮との二道に於て心志を移し、道を誤る者のみ、儻かに達人のみ其の會を解く、不復疑、我と榮との往來の道を疑は  
 ざるなり、淵明自ら達人を以て許す、許すも亦妨げざるなり、淵明の心事を善知する王宏なる者あり、一觴酒を寄贈す、淵明日夕の  
 懽、是に於てか相持するを得、平聲四支の韻、



【題義】 飲酒と題するも、一一、飲酒を歌ふにはあらず、要は飲酒、憂を忘るるを主題とし、平生の所懐を敘述せられしものなり、作年は異説あるが、恭帝の元熙二年か、或は宋の永初元年、靖節年五十六七ならんか、

【大意】 閉居寂寥、懽意寡し、況や夜の長きに於てをや、偶ま名酒あり、毎夕必ず飲む、獨飲獨酌、忽焉として酔ふ、酔うた後は是の二十首を題し以て自ら娛む、覺えず二十首の多きに達す、辭詞に順序次第なし、故人即ち友人に命じて之を書せしめ、以て我が懽笑と爲す、彼にも衰榮あり、此にも衰榮あり、彼は定んで衰、此は定んで榮と云ふことは天下に無し、邵生が東陵侯と稱せる間は榮なり、瓜を東門外に種うる時は衰なり、而かも邵平は此の衰榮の爲めに節を損せざりし人なり、人や國には衰榮あり、時や節には寒暑あり、達人は其の自然の理を曉むるが故に、衰榮寒暑の道を疑はず、疑はずと雖も衰は憂へざるべからず、其の憂を忘るるには一觴酒に依頼するより外なし、故人幸に酒を贈り、我をして日夕に懽を爲さしむ、

積善云有報夷叔在西山

積善報ありと云ふ、夷叔は西山に在り、

善惡苟不應何事立空言

善惡苟くも應せずんば、何事ぞ空言を立つる、

九十行帶素飢寒況當年

九十行いて素を帶ぶ、飢寒況や年に當る、

不賴固窮節百世當誰傳

固窮の節に頼らずんば、百世當に誰か傳ふべき、

【注解】 積善云有報「易」に曰ふ、積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃、今此の易の聖言に對し、其の然らざるを反詰す、夷叔、伯夷と叔齊は非常に積善の人、而かも西山に餓死するに至る、善惡苟不應、何事立空言、善人は餓死し、惡人は榮達す、善因は善果、惡因は惡果ならざるべからず、然るに此の道理には應ぜざるなり、是に於てか知る、易の言ふ所、空言なることを、憤世の言、陶公の面目躍如たり、九十行帶素、飢寒況當年「列子」に曰ふ、榮啓期、郟の野に行く、鹿裘帶索、琴を鼓して歌ふ、孔子問うて曰く、先生樂しむ所以は何ぞ、對へて曰く吾が樂甚だ多し、天、萬物を生じ、人を貴しと爲す、吾、人と爲るを得、一樂なり、男女の別、男尊女卑、吾、男と爲るを得、二樂なり、人生、日月を見ず、福祿を免れざる者あり、吾已に行年九十、三樂なり、貧は士の常、死は人の終、常に處し、終を得、當に何を憂ふべけんや、孔子曰く、善い哉能く自ら寛うするや、淵明の意、九十に至り、猶ほ行いて素を帶ぶるを免れず、長老に至る、其の飢寒難苦、其れ何ぞ此の如くなるや、窮士の悲しむべき所以、當年は壯年と解すべし、九十の者でも悲し、況や壯年に於てなやの意、不賴固窮節、百世當誰傳、善惡不應と云ふと雖も、善即ち固窮の節は守らざるべからず、百世も千世も傳ふべきなり、十五刪(山)十三元(言)一先は古通韻なり、沈歸愚曰く、伯夷傳大旨已に此に盡く、末二句司馬遷云はゆる各の其の志に従ふなり、

【大意】 積善と積不善と共に報ありと聞く、是の語を真なりとせば、伯夷叔齊の如き善人が何故に西山に餓死したるや、善惡の報が其れ相當に來らずとせば、何事の爲めに空言を立てたるや、榮啓期の如き善人も九十の長壽にして猶ほ且つ飢寒を免れず、而かも固窮の節は生前其の報の有無に關せず、守らざるべからず、以て百世の下に清風を傳ふ、

道喪向千載。人人惜其情。

道喪びて千載に向ふ、人人其の情を惜む、

有酒不肯飲。但願世間名。

酒あり肯て飲まず、但願みる世間の名、

所以貴我身。豈不在一生。

我が身を貴ぶ所以、豈一生に在らざらん、

一生復能幾。倏如流電驚。

一生復能く幾ぞ、倏ち流電の驚くが如し、

鼎鼎百年內。持此欲何成。

鼎鼎百年の内、此を持し何を成さんと欲する、

【注解】道喪は正道喪失なり、正道喪失したること久し、亢倉子曰く、道喪ぶ時、上士は乃ち醒る、人人惜其情、情を惜むは君子の道にあらず、而かも人人が皆其の情を惜むは、正道喪失したればなり、有酒不肯飲、但願世間名、酒あらば飲むべし、酒有るも飲まざるは、飲名狂名の世間に聞ゆるを願慮すればなり、所以貴我身、豈不在一生、金印紫綬、高官顯達、皆我が身を貴しと思ふ、而かも一生の間に稱せらるるは言ふに足らず、百世に通じて貴と稱せらるる者に至り、始めて以て眞貴を認むべし、蓋し一生も假に可とするも、其の一生は果して能く幾多の年月ぞや、五十年、六十年、七十年、電光石火の流と殆んど同じ、倏然古今と爲る、鼎鼎は太野渡の嶼「樓弓」に鼎鼎爾則小人とあり、「疎」に、自ら嚴敬ならざるときは、小人の如く然り、形體寛慢なり、持此は世間の名を持つるなり、酒杯を持つるにあらす、百年の内、世間の浮名に捕はれて拘束する、遂に欲何成や、下平聲八庚の韻「黃江詩話」曰く、此首是れ何等の見地、魏晉六朝の人、易代を觀ること遺族の如く、務めて世俗の浮名を乞ふる、類を知らざるのみ、成さんと欲する者、節を全うして以て道に合するなり、之を言ふ遂無し、超ゆる所以なり、

【大意】正道の喪失するや久し、是を以て人人其の情を惜むに至る、酒有りて飲まざるは、世間に飲名の流るるを恐るる徒輩なり、乃ち偽君子なり、我が身は生前も貴し、亦死後も貴きなり、五十年六十年を過ぐ、殆んど電光石火、鼎鼎たる百年の内、此の世間の浮名狂名に拘束せらるる徒、遂に能く何を成さんと欲するや、

栖栖失羣鳥。日暮猶獨飛。

栖栖羣を失する鳥、日暮猶は獨飛す、

徘徊無定止。夜夜聲轉悲。

徘徊定止無く、夜夜聲轉悲し、

厲響思清晨。遠去何依依。

厲響清晨を思ふ、遠去何ぞ依依たる、

因植孤生松。斂翮遙來歸。

孤生松を植うるに因つて、翮を斂めて遙かに來歸す、

勁風無榮木。此蔭獨不衰。

勁風榮木無く、此の蔭獨衰へず、

託身已得所。千載不相違。

身を託する已に所を得、千載相違はず、

【注解】栖栖より以下四句二十字、鳥が羣を失して、其の悲鳴する状を言ふ、正面は鳥、側面は淵明が自況、栖栖は、猶ほ羣と云ふがごとし、急迫の貌なり、「論語」に丘何益ぞ是栖栖たる者か、厲響は清晨に吹く風の音烈しきを云ふ、遠去何依依、別に依依たる處ありて去るにあらず、唯烈風に會つてのみ、淵明が羣を出でて以て官遊せしことに況す、孤生松は一株松なり、此の一株の松こそ、是れ眞に鳥が止まるべき處なり、斂翮來歸、鳥の來歸は即ち淵明先生の來歸なり、勁風は冬日の北風なり、無榮木、北風の凜烈たる、天下何の處に青青たる樹あるや、一木も無きなり、但松蔭のみ、蒼蒼の色あり、身を以て此に託す、千載不相違、一冬にはあらず、千載の長きも違はず、上平聲五微、趙泉山曰く、此の詩、殷景仁、眞延年が輩、宋に附屬するを諷る、温謙山曰く、愚案する

に、通首俱に是れ比體、靖節、志を失ひ、背て宋に附かず、飲酒託興、聊か物を借り以て自況す、殷賑を説ると言ふは、正旨にあらずるに似たり、清潭、今、亦、誰山の説を可しとす、一も二も讀切と云ふは、淵明の意にあらずるなり、

【大意】 栖栖として失羣の鳥、日暮に及んで猶ほ獨飛する、其の樹の栖むべき無ければ、東西徘徊して定止する所なく、其の鳴聲夜夜に悲し、忽ち厲響あるを聞く、是れ則ち清晨と爲る、何處を目的と無く依依として飛び去る、幸に一株の松を得たるを以て翮を斂めて遙かに來歸す、勁風の前には天下榮木無し、獨り松樹の陰のみ衰へず、身を此の松下に託す、千載相違はざるなり、

結廬在人境。而無車馬喧。

廬を結んで人境に在り、而かも車馬の喧無し、

問君何能爾。心遠地自偏。

君に問ふ何ぞ能く爾る、心遠ければ地自ら偏、

採菊東籬下。悠然見南山。

菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る、

山氣日夕佳。飛鳥相與還。

山氣日夕佳し、飛鳥相與に還る、

此中有真意。欲辨已忘言。

此の中真意あり、辨せんと欲して已に言を忘る、

【注解】 人境は塵境、市街と見る可、而の一字は千斤の力あり、唐の寒山、可、笑寒山道、而無車馬塵の面は何の爲めの面か、其の意を解するに苦しむなり、人境に在りながら車馬の喧無し、問君何能爾、夫れは如何なる理由ぞや、曰く心遠地自偏、身は市に在るも、心は山に在り、心が山に在るときは、市街の土地も、山間の土地と異ならず、大隱は市に處るの意、採菊東籬下、悠然見南

山、採と謂ひ、見と謂ひ、東と謂ひ、南と謂ひ、自然にして天造の妙あり、東坡曰く採菊の次、偶然、山を見る、初意を用ひず、而して意と意と會す、故に喜ぶべきなり、無識者、見を以て望と爲す、白樂天、時傾一樽酒、坐望終南山、則ち世俗の失久し、章蘇州、采菊露未晞、舉頭見秋山、乃ち眞に淵明の意を得たり、『雜勸集』に云ふ、記、廣陵に在るの日、東坡に見えて云ふ、陶意、詩に在らず、詩以て其の意を寄するのみ、采菊東籬下、悠然望南山、則ち既に采菊、又望山、意此に盡く、餘韻無し、淵明の意にあらず、采菊東籬下、悠然見南山、則ち本自ら菊を采る、山を望むに意無し、適ま首を擧げて之を見る、悠然情を忘る、輒ち閉にして果遺し、此れ未だ文字精麗の間に於て之を求めず、『逕齋閑覽』に云ふ、王荆公、金陵に在りて詩を作る、多く淵明詩中の事を用ふ、四韻詩、全く淵明詩を使ふ者あり、且言ふ、其の詩奇絶及ぶ可からざるの語あり、結廬在人境の四句二十字の如き、詩人より以來、此の句無きなり、然らば則ち淵明趨向不羣、同彩精技、晉宋の間一人のみ、山氣は南山の秀氣、日夕佳、秀氣は朝夕梅すべきなり、飛鳥相與還、温注に『管子』を引いて曰く、夫鳥之飛、必還山集谷と、此中有真意、欲辨已忘言、『莊子』に得意忘言とあるに本く、李公機曰く、張九成云ふ、此即ち淵明、吹嘘に君を忘れざるの意、温謙山曰く、淵明の詩、類れ高貴多し、此の首尤も興會獨絶と爲す、廬は葦中に在り、神は象外の遊きに遊ぶ、得力、起句二十字に在り、奇絶妙絶、以下慢ち一直寫し去る、神ありて迷なし、却て此の處に於て領取すべし、俗人反つて先づ其の採菊數語を賞するは何ぞ、結二句に至りて則ち愈々眞、愈々遠、語は盡くるあるも、意は窮まり無し、張九成評して云云、眞に著相を離ふ、平聲十三元と十五韻、古通韻なり、

【大意】 我廬を結んで普通の人境に在り、別に山中にあらず、而かも車馬の喧嘩は無し、如何なる理由ありて爾るやと問ふ者あり、乃ち奮ふ、心が俗事と遠隔して居るを以て、地も亦自から偏なり、菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る、南山の氣色、日夕に當り愈々佳し、飛鳥は羣を爲し相與に還る、此の中一點の偽を容れざる真意あり、辨せんと欲するも言舌に上らざるを奈何せんや、

行止千萬端誰知非與是  
是非苟相形雷同共譽毀  
三季多此事達士似不爾  
咄咄俗中惡且當從黃綺

行止千萬端誰知非與是とを、  
是非苟も相形るれば、雷同して共に譽毀す、  
三季此の事多し、達士は爾らざるに似たり、  
咄咄俗中の惡、且く當に黃綺に従ふべし、

【注解】行止、非與是、「莊子」曰く是其所非、非其所是、非なりと言ふ者、是なりと言ふ者、紛紛擾擾、定處有ること無し、其の是非が無形の間は、猶ほ可なるも、苟も有形と爲つて顯はれたらば、後分曉漢の徒が雷同して以て之を譽め又毀つに至る、三季は三代の末、多此事、三代以前は此の事なし、三代以後は此の事多し、達士似不爾、達士や傑人は、時代思潮を受けず、超然たる所ありて、彼等と別なり、咄咄は喧嘩の聲、「後漢書」に、咄咄子說、不相助爲理耶とあり、晉の殷浩は咄咄怪事の語を發明せり、俗中惡、俗は風俗の場合、何等の忌む所無きも、塵凡曰俗に至りては、其の意義良に違ふべし、今は塵凡の俗風を云ふ、乃ち達士と反對の徒、雷同する徒、是非の爲め紛紛たる徒、皆是れ俗風なり、我は此の俗風は嫌ふ所、且當從黃綺、黃公と綺公は古の達士なり、我は是の二達士の遺を慕はんとなり、上層四紙の韻、

【大意】世上の或は行或は止、良に千萬端なり、如何なる智者も、是と非とを容易に判じ難し、而して其の是非が無形なら已みなん、苟も有形と爲つて來らば、譽むる者と毀つ者と紛紛として現するに至る、三代の末の歴史を覽て此の事を知るべし、達士のみ別に超然として愚俗と混せず、達士にあらざる凡俗惡徒は、論するに及ばず、我は黃公綺公の如き古の達士を慕はんのみ、

秋菊有佳色裛露掇其英  
汎此忘憂物遠我遺世情  
一觴雖獨進杯盡壺自傾  
日入羣動息歸鳥趨林鳴  
嘯傲東軒下聊復得此生

秋菊佳色あり、露に裛うて其の英を掇る、  
汎たる此の忘憂の物、我が遺世の情を遠ざく、  
一觴獨り進むと雖も、杯盡きて壺自ら傾く、  
日入つて羣動息み、歸鳥林に趨りて鳴く、  
嘯傲す東軒の下、聊か復此の生を得たり、

【注解】秋菊、裛露掇其英、香の衣を襲ふを裛と曰ふ、早晨は露未だ晴かざる時、菊の英を掇り以て酒の肴と爲し、之を食ふ、英は花の最美なるを曰ふ、菊英を食ふこと、淵明以前より其の以後か明白ならず、而かも淵明の之を食ひしことは實際なり、汎此忘憂物、酒に菊を漬して食ひしもの如し、潘岳の賦にも泛漉英於清醴とあり、遠我遺世情、忘憂物の爲め陶然と爲つて、總て世俗の憂情と隔絶する、一觴雖獨進、杯盡壺自傾、獨酌獨樂、杯中の酒盡きれば、酒壺は傾倒する、日入羣動息、早晨より已にして夕日に及ぶ、實際とすれば、十二時間を酒の爲め費消したる事となる、塵凡人なれば皆むべき價值あり、聖人は寸陰を惜む、淵明の善く知る所、而かも此の言を吐く、酒に託して以て言ふのみ、朝から晩まで酒を飲むの理なし、然りと雖も淵明は努力の人、何事も徹底的に喜ぶ、酒も亦徹底的なるやも知る可からず、箇中の消息は、禁酒門中の凡夫の知る所にあらずるなり、夕日なれば鳥も亦林に歸栖する、嘯傲、飲酒後獨り氣煩を吐くこと、得此生、東坡曰く、靖節、無事を以て得此生と爲す、則ち物に役せらるるは失此生にあらずや、定齋曰く、南北朝より以來、菊詩多し、未だ能く淵明の詩に及ぶはあらず、瀟齋曰く、秋菊の五字、古今塵俗の氣を洗盡す、陸山曰く、秋菊の佳、愛菊者誰か之を知らざらん、誰か之を慕はざらん、唯此の起五字渾成、却て人の道ひ得る無し、淵明は菊花の知己と謂ふべきなり、下平聲八庚の韻、

【大意】東籬の秋菊色愈よ好く、早晨に起き露に衰うて其の英を撥る、其の英を撥り來つて忘憂物即ち酒の中に涵して之を食ふ、此の如くにして世中の情を隔遠する、獨飲獨酌、杯中の酒盡くれば壺は自から傾く、而して黄昏に及ぶ、歸鳥も已に林に趨りて鳴く、我も亦東軒の下に嘯傲して、我は我として意義ある今日の生を送りしとなり、

青松在東園衆艸沒奇姿

青松東園に在り、衆艸奇姿を沒す、

凝霜殄異類卓然見高枝

凝霜異類を殄し、卓然高枝を見る、

連林人不覺獨樹衆乃奇

連林人覺らず、獨樹衆乃ち奇とす、

提壺挂寒柯遠望時復爲

壺を提げて寒柯に掛け、遠望時に復爲す、

吾生夢幻間何事繼塵羈

吾が生夢幻の間、何事ぞ塵羈に繼がるる、

【注解】青松、此の時松を除くが主意なり、凝は殄滅、凝霜の強威に松以外の異類は絶滅する、而して青松のみ卓然として聳ゆ、遠望時復爲は、陶淵曰く、時復爲遠望の倒句法なり、孤松を以て自況す、淵明が富貴なり、清潭曰く、連林以下四句二十字、屈復の例に就へば删除するも可なり、淵明集中最下なるもの、四支の韻、

【大意】青松一樹、東園に在り、衆艸は凝霜の爲め絶滅するも、青松のみ卓然として聳ゆ、連林は人

覺知せず、青松獨樹のみを奇とす、酒壺を寒柯に掛け、遠望時に復爲す、吾が生も夢幻の間なり、塵羈に繼がるるは遂に何事ぞ、

清晨聞叩門倒裳往自開

清晨門を叩くを聞く、倒裳往いて自ら開く、

問子爲誰歟田父有好懷

問ふ子誰と爲すか、田父好懷あり、

壺漿遠見候疑我與時乖

壺漿遠く候せらる、疑ふ我が時と乖くを、

繼縷茅簷下未足爲高栖

繼縷茅簷の下、未だ高栖を爲すに足らず、

舉世皆尙同願君汨其泥

舉世皆尙同じ、願くは君其の泥を汨めよ、

深感父老言稟氣寡所諧

深く感ず父老が言、稟氣寡ふ所寡し、

紆轡誠可學違已詎非迷

紆轡誠に學ぶ可し、己に違ふ詎ぞ迷にあらざらん、

且共懼此飲吾駕不可回

且く共に此の飲を懼せん、吾が駕回らす可からず、

【注解】清晨に柴門を叩く音を聞く、倒裳は日本語の「アヲサレ」なり、「毛袴」に類倒裳衣とあり、客を門側にあしく待たせる如きは、客を禮迎する所以にあらず、問は淵明なり、子は客なり、爲誰歟、誰であるぞ、田父、即ち榮達なぞ眼中に無き人なり、有好懷、淵明先生と酒を飲まんとて遠く問候し來る、唯此の一意にて來る、是れ眞の好懷なり、疑ふ者は客、我は淵明、先生は時世と乖

く者と疑ふ者の如し、何故ぞや、東帯衣冠以て世を驚かす才を持し乍ら、**襟袖即ち「ガロ」**、敝衣を衣て、**茅簷下に起臥すればなり**、**紫閣紅樓と茅簷とは非常に異なる**、未足爲高栖、何故に高栖即ち榮達の道に就かざるやを訝る、**舉世皆尚同**、時と乖かず、世と諧同しては如何、**願君、願ふ者は田父**、君は瀧明、**泪其泥**、泪は泪濁なり、「**漁父篇**」に、**世人皆濁、何不獨其泥**、而揚其波、とあり、是に本づく、**泥は水底を濁りくづして、強ひて濁らす**、而して泥は水底にあり、波は水面にあり、世の中が濁らば、其の濁中に浮沈して、而かも己が清きを保てよとなり、「**楚辭**」は、**漁父に託し、此は田父に託して言ふのみ**、**深慮父老言**、屈原は漁父の言に感ぜず、瀧明は田父の言に感ぜしなり、**屈と陶の性格の異同**、知るべし、一は死、一は生、**陶に然るべきなり**、**稟氣は、天然の生質、墓所著、屈は人と諧和せざるの極、遂に死せり**、瀧明は諧和せざる性格を自分で知ると雖も、而かも生の貴きを知る、**軒轅、軒は曲なり、瀧なり、轉は馬の「マダナ」なり、誠可學、遠已匪非迷、軒轅何ぞ必ずしも非ならん**、宜しく之を學ぶべきなり、而かも己が稟氣に違つてまで之を學ばんとするは、是れ迷にあらずして何ぞ、何ぞ己を屈し人に從ふを得ん、且共情此飲、瀧明と田父と共に情飲し、復何ぞ世事を論ぜん、吾罵不可同、客の歸罵を言はずして、吾罵と言ふ、我が此の田圃に歸隱する素志は固し、如何に誰が勸告するも、決して慮を出でずとなり、**李公煥曰く、趙泉山云ふ、時輩多く節節を勉むるに出仕を以てす**、故に此の篇を作る、**陶瀧明と杜子美は世の偉人なり**、田父、飲を索むる毎に、必ず之をして其の懷を舉へ而して後去らしむ、**瀧明清後叩門**、**老杜田翁社日**、**二公皆位に在る者**、田父に於て何ぞ拒まん、**陳昨明曰く、稟氣の句、稟氣の句尤も發然、吾罵の句尤も發然、九佳十灰、古通韻なり**、

【大意】**清晨に門を叩く者あり、衣裳を顛倒して直ちに往いて開く、乃ち問ふ客は誰と爲すや、客曰く田父今日好懷あり、是を以て壺漿を提げて問候する者なり、而かも客は我を疑ふ者の如し、衣冠東帶堂堂たる風采の人ならんと想像して來るも、我が纏纏の衣を着用して茅簷の下に居りしには其の想像と反對したるの感あるもの如し、乃ち曰ふ、君は大才を抱きて何故に高栖即ち堂堂たる邸宅に住まざるや、舉世混濁、皆一様なり、其の混濁の世に處して其の泥を泪め、以て己が清を保たば如何と、深く此の父老の言に感ずるも、我が性質は到底他と諧和せざるを自覺す、軒轅賦に學ぶ可しと雖も、強ひて己が本性に違つて之を學ぶは、是れ亦迷ならずや、我は決して駕を官途即ち榮達の路へ回らさずとなり、**

在昔曾遠遊直到東海隅  
道路迴且長風波阻中塗  
此行誰使然似爲飢所驅  
傾身營一飽少許便有餘  
恐此非名計息駕歸閑居

在昔曾て遠遊し、直に東海の隅に到る、  
道路迴として且長く、風波中塗に阻す、  
此の行誰か然らしむる、飢の驅る所と爲るに似たり、  
身を傾けて一飽を營み、少許便ち餘あり、  
恐る此れ名計にあらざるを、駕を息うて閑居に歸る、

【注解】東海隅は今日の膠州灣一帯の地を言ふ、南北朝時代、東海郡を置く、曲阿即ち是れなり、**迴は遠なり、道路の長遠なるのみならず、風波も荒く、屢ば中途の阻險を憂ふるなり**、此の如き辛勞の行を爲す所以のものは何の爲めぞ、他無し、生活其のものゝ爲めなり、**飢餓と云ふ者が、我を驅役するなり、傾身は全力を傾倒する意味、既にして少許「スコンバカリ」餘裕が生じ來る、而かも復攻ふ、恐此非名計、生きる爲にのみ勞役するは名計にあらざるなり、息駕歸閑居「列子」に、孔子、齋より魯に反り、駕を河梁に息うて觀るとある、何義門曰く、末二句恐らくは國朝の節を憂さんことを、**平澤六魚の韻**、**

【大意】**在昔遠遊して東海の隅に到る、道路も長危、風波も荒阻、此の道路、此の風波を侵して遠遊**

するは、何の爲めぞ、人は業務を求めずんば飢餓なる恐るべき者に襲はる、此の恐るべき者に襲はるるを免るるには、遠遊も何ぞ、道路も何ぞ、全力を傾倒して、身計を爲さざるを得ず、而して又攻ふ、此の如く營營たるのみが人間の本能にあらずと、是に於てか親を思めて閉居に歸り、以て自然を修養するに如かず、

顔生稱爲仁、榮公言有道、

顔生は仁を爲すと稱し、榮公は道ありと言ふ、

屢空不獲年、長飢至於老、

屢空しうして年を獲ず、長飢老に至る、

雖留身後名、一生亦枯槁、

身後の名を留むと雖も、一生亦枯槁す、

死去何所知、稱心固爲好、

死し去つて何の知る所ぞ、稱心固に好しと爲す、

客養千金軀、臨化消其寶、

客千金の軀を養ひ、化に臨んで其の寶を消す、

裸葬何必惡、人當解意表、

裸葬何必惡しからん、人當に意表を解くべし、

【注解】顔生は顔回なり、榮公は榮啓期なり、屢空不獲年、是れ顔回を言ふ、回也屢空で、極めて貧、年も二十九にして髮毛盡くし、長飢至於老、榮公は九十を越ゆと雖も、飲物は満足ならず、仁者にして此の如し、有道者にして此の如し、賢人と稱せられ、高人と稱せらるる身後の名は、太だ隆隆たるも、其の人、一生の間は一簞の飯、一椀の食、身枯槁するの憂あり、死去何所知、稱心固爲

好、俗流の輩より見れば、一簞一飯の貧を笑ふも、其の自分より見れば是れ稱心なり、死も亦満足なり、笑ふ彼等は亦大に笑ふべき者なり、而して善人には稱心あり、惡人には稱心無し、客養千金軀、臨化消其寶、千金子、千金軀、共に富者を謂ふ、東坡曰く、寶は軀に過ぐる者なし、軀亡ぶときは寶も亦亡ぶ、裸葬何必惡、人當解意表、李公煥曰く、前漢の楊王孫、終に臨み、其の子に令して曰く、吾、裸葬以て吾が眞に反らんと欲す、死せば則ち布蓋を爲り、尸を盛り地に入る七尺、既に下る、足より引いて其の蓋を脱し、身を以て土に親しましめよ、其の子遂に裸葬すと、西明の意、其の事は必ずしも惡と断定すべからず、反つて他人の意表外に出づるの疑問を解かんとし、潘文公曰く、或人曰ふ、前八句、名の顯むに足らざるを言ひ、後四句、身の情むに足らざるを言ふ、西明解處、正しく身名の外に在り、陸山曰く、陶公一生志節此の如し、其の身名を顯惜すとも何如と爲すや、篇中身世情むに足らずと言ふは、世人の目に就いて、反して之を言ひ、以て自ら寫すに過ぎず、一時の達處と云ふ爾、然らずんば、飲酒の餘、身名惜まず、何を以て靖節と爲んや、上卷十九結の韻、

【大意】顔回は孔門の仁者、榮啓期は有道の高士、而して回は屢ば空乏を告げ、年も亦夭す、榮は九十の長壽なるも、飢餓身に逼る、二子共に仁者高士の名を身後に留むと雖も、一生頗る窮貧枯槁なり、死して後は何事も知らざるべし、唯生前心に稱ふを好しと爲す、飢うと言ひ、貧しと言ひ、皆稱心なり、人世に客と爲りて千金の軀を養ふ、化即ち死に臨んで其の寶を消す、裸葬に對し我は必ずしも惡なりと言はず、唯從來孔門の教に無き所、故に多くの人は其の意表外の事に解釋すべし、

長公會一仕、壯節忽失時、

長公會て一仕、壯節忽ち時を失す、

杜門不復出、終身與世辭、

門を杜ちて復出せず、終身世と辭す、

仲理歸大澤。高風始在茲。  
一往僂當已。何爲復狐疑。  
去去當奚道。世俗久相欺。  
擺落悠悠談。請從余所之。

仲理大澤に歸る、高風始めて茲に在り、  
一往僂ち當に已むべし、何爲ぞ復狐疑せん、  
去去當に奚をか道はん、世俗久しく相欺く、  
悠悠の談を擺落して、請ふ余が之く所に從へ、

【注解】長公、李公機曰く、前漢の張釋之が子、張華字は長公、官、大夫に至る、容るるを當世に取る能はざるを以て、終身仕へず、「漢書」の長公が傳、以上の數字のみ、仲理、後漢の楊倫字は仲理、郡文學掾と爲り、志、時に乘り、遂に職を去る、復た州郡の命に應ぜず、大澤中に講授す、弟子千餘人に至る、一往、狐疑、一たび決心したるときは、必ず以て其の志を替ふべからず、乃ち去去勇退して遠遊せず、亦奚の道ふ所あらん、世俗久相欺、時の擾亂に乘じ、羣俗互に自ら欺くなり、擺落は猶ほ排斥と言ふがごとし、悠悠談は、所謂晉人の清談即ち空談なり、「晉書」王導傳に、悠悠の談、宜しく智者の口を絶つべし、請從余所之、誰に從へと人を指すにあらず、余と志を同じうする者は宜しく余が之く所に從へとなり、先生、長公仲理を以て自ら許す、孔明が管仲樂毅を以て自ら許すと相似たり、而かも身後の名は長公仲理は陶明の足下にも至らず、然らば則ち長公たり仲理たるの人、以て允榮と爲すべきなり、平聲四支の韻、

【大意】長華は曾て漢に仕へたるが、壯節不幸にして時を失し、門を杜ぢ世を辭す、後漢の仲理も、一度は官に就きしも、去つて大澤中に講授す、二人共に高風茲に在り、一往即ち一たび決心したるときは、萬牛も挽く能はず、何爲ぞ狐疑して決せざるものぞ、去去奚の道ふ所かあらん、世俗の多くは

此等高人の所爲と異り、相互に欺くこと久し、是の故に、我は悠悠の談、即ち空談空理を排斥して、正道の實行すべきに就かん、其の志を同じうするの士は、來つて我に從へよ。

有客常同止。趣捨邈異境。  
一士常獨醉。一夫終年醒。  
醒醉還相笑。發言各不領。  
規規一何愚。兀傲差若穎。  
寄言酣中客。日沒燭當秉。

客有り常に同止、趣捨邈として境を異にす、  
一士常に獨り酔ひ、一夫終年醒む、  
醒醉還相笑ふ、言を發し各の領せず、  
規規一に何ぞ愚なる、兀傲差穎の若し、  
言を寄す酣中の客、日沒せば燭當に秉るべし、

【注解】同止は猶ほ同居の如し、趣は取と同じ、一方は取り、一方は捨つ、當然として其の境を異にす、一士は酔、一夫は醒、醒者は醉者を笑ひ、醉者は醒者を笑ふ、各不領、語言するも互に領會する所無し、規規は「莊子」に自失也とあり、兀傲は頑固と兼や同じ、穎は敏なり、醉うて以て兀傲の陶明が、規規たる彼の醒者を笑ふ、酣中客は、酒酣中の客ならん、日沒燭當秉、古人已に秉燭の遊びあり、夜も亦憂ふるに足らず、酣醉以て秉燭の遊を作すも亦可ならずや、何義門曰く、張融嘗言ふことあり、未だ人倫を識らず、焉んぞ天道を知らん、大義を明めずんば、醒者何ぞ必ずしも醉に愈らん、温謙山曰く、陶中言ふ、醒者は愚にして、醉者は穎、或は謂ふ、陶明、酒を嗜む、故に左祖の論を爲す、豈知らん其の悲憤乎、意を酒に寄するに過ぎず、遂に之を言ふ覺えず陶に近きのみ、陶明豈眞に醉人に左祖せんや、替く陶を讀む者、當に之を自得すべし、去聲十八韻の韻、



【大意】人あり二人同居す、而して是の二人其の取捨を異にす、一人は常に酒を好み、一人は常に酒を禁ず、而して醉者は醒者を笑ひ、醒者は醉者を笑ふ、兩者の心同じからず、談話するも互に傾會する無し、其の自失する所は、兩者共に愚なり、唯酒を好んで兀傲の者差類の若し、故に兀傲の者より言を醉中の客に寄せて曰く、日の没するまで酒を飲むべし、日没したる後は燭を乘りて以て遊ぶべきなり、

故人賞我趣、挈壺相與至。

故人我が趣を賞し、壺を挈げて相與に至る、

班荆坐松下、數斟已復醉。

班荆松下に坐し、數斟已に復醉ふ、

父老雜亂言、觴酌失行次。

父老亂言を雜へ、觴酌行次を失す、

不覺知有我、安知物爲貴。

覺えず我あるを知る、安んぞ知らん物を貴しと爲すことを、

悠悠迷所留、酒中有深味。

悠悠留まる所に迷ふ、酒中深味あり、

【注解】班荆、荆を地に布いて坐するなり、荆は荆にて製せし布圍「左傳」に、楚人伍舉、犀子と相善し、伍舉將に晉に奔らんとし、犀子と鄭郊に遇ふ、班荆相與に食ふ、とあり、故人と酒を松下に飲む、既にして醒醉す、父老も之に交はり、隨事馬事、言ふ所正しからざるのみならず、先覺も後覺も、其の行次を失し、不覺知有我、安知物爲貴、陳群明曰く、二句超超名理と、酒に沈醉する者は多く我を主置す、他を尊ぶる無し、而して我より以外の物を貴しとすること無し、陶明の如きは我を忘れ、物を忘れ、物我一如、

意に世人の飲酒と異る、悠悠迷所留、酒を止める程度が無きなり、酒中有深味、酒を旨しとする深味にはあらず、酒に依つて禍を免るる深味なり、解して此に至る、詩亦深味あり、上摩四紙の調、

【大意】故人あり我が好む物を知り、酒壺を挈げて訪ひ至る、乃ち班荆して松下に坐し、互に斟み互に酌む、飲んで乃ち醉ふ、酔うて亂言と爲る、或は行次を失し、或は我有るを知つて、他物の貴しと爲すを知らず、悠悠として酒を飲み、留まる所無し、酒中良に深味あり、

清潭曰く、不覺知有我、安知物爲貴の十字、解す可く、又解す可からず、今且く一案を出すのみ、更に後賢の叱正を望む、

貧居乏人工、灌木荒余宅。

貧居人工に乏し、灌木余が宅を荒す、

班班有翔鳥、寂寂無行跡。

班班翔鳥あり、寂寂行跡無し、

宇宙何悠悠、人生少至百。

宇宙何ぞ悠悠たる、人生百に至る少なり、

歲月相從過、鬢邊早已白。

歲月相從過す、鬢邊早く已に白し、

若不委窮達、素抱深可惜。

若し窮達に委せずんば、素抱深く惜む可し、

【注解】乏人工、貧なれば裁種師の類を雇ふ能はず、灌木は叢木、荒余宅、ツマラヌ樹木が宅園に跋扈するのみ、班班は、「後漢書」に、京都童謡曰車班班とあり、是は車聲を形容す、又、明者の類、今は明者に翔鳥あるを見る、行跡は人行の跡、宇宙は悠悠、

人生は短氣、歲月は堂堂、賢髪は蓬蓬、若不委窮達、素抱深可惜、窮と達とは運命なり、運命は如何ともすべからず、其の運命に委す能はざる者は、折角素抱、即ち素心を抱く者も遂に惜むべしとなり、入聲十一陌の韻、温謙山曰く、結二句、寓意甚微、

【大意】 貧居なれば人を雇ふ能はず、灌木の縦横に荒るるに一任す、班班として翔鳥あるを看るも、寂寂として人行あるを看す、宇宙は悠悠、人生は百年に至らず、歲月は匆匆、黒髪は白髪に變じ易し、窮達は運命なり、達せんと欲する素抱ある者も遂に達せざる事あり、運命なれば是れ深く惜むべし、

少年罕人事、遊好在六經。

少年人事罕なり、遊好六經に在り、

行行向不惑、淹留遂無成。

行行不惑に向ふ、淹留遂に成ること無し、

竟抱固窮節、飢寒飽所更。

竟に固窮の節を抱き、飢寒飽る所に飽く、

敝廬交悲風、荒艸沒前庭。

敝廬悲風交り、荒艸前庭を没す、

被褐守長夜、晨雞不肯鳴。

被褐長夜を守り、晨雞肯て鳴かず、

孟公不在茲、終以翳吾情。

孟公茲に在らず、終に以て吾が情翳たり、

【注解】 罕人事、少年時代は、古今共に諸生時代、俗人の事には關係少し、六經は易、書、詩、春秋、禮記、周禮、古は易、書、

詩、禮、樂、春秋を以て、六經と爲す、樂火、樂經を總く、今と異なる所以、行行は年の進行するを云ふ、不惑は四十、「向ツテ惑ハズ」と訓したる本あり、笑ふ可し、無成、四十にして成る無きを恥づ、竟抱固窮節、飢寒飽所更、飢にあらざる時は寒、寒にあらざる時は飢、飢と寒とを更代する事柄に飽きたりとなり、而かも固窮の節、士の當、之を變へて言ふにはあらず、敝廬は破屋、荒艸、人工を入れざる庭中、艸も亦芳艸にあらず、楊、貧者の當、冬も楊なり、晨雞不肯鳴、晨雞の鳴くは、士、達するの兆なり、貧居遂に此の事なし、孟公、前漢の陳遵、字は孟公、酒を嗜み、大飲毎に賓客滿堂、飢ち門を閉ざし、客の車轡を取つて井中に投じ、急ありと雖も、終に去るを得ざらしむ、不在茲、今日は孟公の如き人無し、吾が情の翳即ち蔽覆なる所以なり、平聲八庚の韻、何義門曰く、敝廬の四句、治平を見ざるを謂ふ、

【大意】 少年人事罕、罕なる理由は六經を研究中なればなり、既にして年四十に向ふ、一所に淹留して進境を見ず、業遂に成ること無し、而かも六經に依つて造りたる魂、固窮の節は抱懐して改めず、飢と寒と交代に我を苦しむ、其の苦は已に飽く、而かも敝家は常に悲風に吹かれ、荒艸の前庭を没するまで發生するに一任す、單衣即ち被褐にて冬夜を守る、而かも容易に晨雞鳴いて我が出世を報ずるを聞かず、孟公の如き好客の士は今日在らず、吾が情の翳にして明ならざる所以なり、

幽蘭生前庭、含薰待清風。

幽蘭前庭に生じ、薰を含んで清風を待つ、

清風脫然至、見別蕭艾中。

清風脫然として至る、蕭艾の中に別るるを見る、

行行失故路、任道或能通。

行行故路を失するも、道に任せば或は能く通せん、

覺悟當念還、鳥盡廢良弓。

覺悟して當に還るを念ふべし、鳥盡きて良弓を廢す。

【注解】 陶淵、孔子、幽谷の中に於て、幽蘭り茂るを見、幽蘭の名、此に出づ、蕪は香氣、蘭花より發す、清風が一たび脱然として至る、蕪又の中より香氣は來ると雖も、蕪又は固より香氣なし、故に香氣は蘭より發するものなりと知るなり、蕪は艾なり、艾は蕪なり、ヨモギなり、行行失故路、故路は即ち善路なり、故路に復する者は蓋し亦多幸なり、任道或能通、窮して後遂に至り、沈んで後浮ぶを知る、道に任せて或は能く通ず、皆此の理、覺悟當念還、鳥盡廢良弓、人は要するに還るに如かざるなり、俗人の多くは覺悟せず、又還るを忘る、良弓は良に相違なきも、鳥を捕る時のみ入用なり、鳥は已に捕へらる、良弓の廢せらるる、止むを得ざるの眞理なり、韓信の如きは戰雄にして高士にあらず、殺さるる所以は還らざるが爲めなり、平聲一東の韻、陳許明曰く、此の章の意、審思に出づると雖も、其の故を得ず、但覺悟忠厚の思望人淺からざるを、設ひ彼の元勳を譽するにあらざるも、何か當に道を許すべき、温謙山曰く、此の時只是幽蘭を借りて以て自ら喻ふ、別意無きに似たり、唯末語指す所甚だ明晰ならず、清潭曰く、謙山、末語明晰ならずと言ふ、淵明の詩大底は此の句法なり、獨り此の首のみならず、還歸を以て人間の至上とす、其意極めて明晰なり、謙山何を謂ふや、

【大意】 幽蘭前庭に生ず、清風吹き來れば、必ず蕪香を發す、清風脱然として至れば、臭香を發するもあり、香を發せざるもあり、蕪艾の如きは固より香なし、香あらば知る是れ蘭なるを、人の行行故路を失する場合あり、此の際道に任せて行く、或は又通することあり、人は還るを忘るべからず、若し還るを忘るる者あらば、捕鳥後の良弓と同じ、廢せらるべし、殺さるべし、

子雲性嗜酒、家貧無由得。

子雲性酒を嗜む、家貧にして得るに由無し、

時頼好事人、載醪祛所惑。

時に好事の人に頼る、醪を載せて所惑を祛る、

觴來爲之盡、是語無不塞。

觴來つて之が爲め盡く、是の語塞たざるは無し、

有時不肯言、豈不在伐國。

時あり肯へて言はず、豈國を伐つに在らずや、

仁者用其心、何嘗失顯默。

仁者其の心を用ひば、何ぞ嘗て顯默を失せん、

【注解】 子雲、楊雄字は子雲、前漢蜀郡の人、家貧にして學を好み、天下の大文章と爲る、而かも酒を買ふ金なきなり、好事人、子雲殊に文字學に精し、是の故に字を問ふ者、子雲が好む所の醪を載せて以て東脩の禮と爲し、其の意ふ所の字義を問うて、以て其の疑を祛るなり、是の人を好事人と云ふ、觴來爲之盡、好事の人の爲めに盡くすとも解すべし、酒を飲み盡くすとも解すべし、淵明が詩意は多く遷然たる所にあり、キチンと定解を下す如きは淵明の意にあらず、是語、語は問なり、謀なり、好事の人が疑を問うて以て各の其の意に満足するを無不塞と云ふ、有時不肯言、豈不在伐國、不言は字の如く默するなり、人の問ふにも答へざるなり、是れは子雲と關係なし、董仲舒の故事を用ふ、漢の董仲舒傳に、魯君、柳下惠に問ふ、吾、齊を伐たんと欲す、如何、柳下惠曰く、不可なり、歸つて憂色あり、曰く、國を伐つは仁人に問はず、此の言何爲ぞ我に至るや、仁者用其心、仁者は問を好まず、豈人の國を伐たんや、何嘗失顯默、顯は露の意味に見よ、平生の用心、仁の一字に在るに於ては、其の人格が、語に依り默に依りて變するものにあらずとなり、子雲は富貴に汲汲たらず、貧賤に戚戚たらずと稱するも、人の家國を伐つ事に於ては、肯て其の是非を言はず、淵明柳下惠は伐國の非を言ふ、眞に仁者の言、淵明は酒に於て子雲を取り、仁に於て柳を取る、其の意極めて深し、蔣丹崖曰く、肯て伐國を言はず、雖然劉宋を以て新莽（子雲が頌を呈せし王莽）に比す、蓋し之を言ひ難きなり、清潭曰く、謙山云ふ、淵明は子雲に賢ること遠し、豈同日に語る可けんやと、是の言や善し、入聲十三韻の韻、

【大意】 楊子雲は性酒を嗜む、而かも酒を買ふの錢無し、好事の人あり、子雲が文字に精通せるが爲

め、醪を以て東脩の禮と爲し、各の其所惑を祛る、子雲は幸にして酒が飲め、好事の人は幸に疑を解く、時ありては言ひ、時ありては言はず、豈國を伐つにあらざらん、仁者は國を好まざるなり、願たり黙たるは、仁者に於て得失無きなり、

嗜昔苦長飢。投耒去學仕。

嗜昔長飢に苦み、耒を投じて去つて學仕す、

將養不得節。凍餒固纏己。

將養節を得ず、凍餒固に己を纏ふ、

是時向立年。志意多所恥。

是の時立年に向ふ、志意恥づる所多し、

遂盡介然分。拂衣歸田里。

遂に介然の分を盡し、衣を拂うて田里に歸る、

冉冉星氣流。亭亭復一紀。

冉冉星氣流れ、亭亭復一紀、

世路廓悠悠。楊朱所以止。

世路廓として悠悠、楊朱止まる所以、

雖無揮金事。濁酒聊可恃。

金を揮ふ事無しと雖も、濁酒聊か恃むべし、

【注解】嗜昔は猶ほ前日と言ふが如し、醪記に嗜昔之夜とあり、後世轉じて昔日の意味に使用する者もあり、今は前日の意味、投耒、生活即ち長飢を救ふ爲め耒を棄るなり、陶明は來にて生活を支ふる能はず、去つて學官と爲る、將養不得節、而かも母を養はんとするし、論は四節するを得ず、凍餒は飢餓なり、孟子に無凍餒之老とあり、固纏己、飢寒は己が身に纏うて、生活猶ほ安泰ならず、是時向立年、立年は三十なり、志意多所恥、人間三十にして生活の安泰を得ずんば、賤人として恥ぢざらん、況や陶明に於

てをや、遂盡介然分、「孟子」に山徑之蹊介然とあり、是れ微茫の貌、「離騷」には堯舜之耿介とあり、正と明との義を含むが介と心得べし、分は分限、自分だけの道即ち正義は盡したりとなり、拂衣は一本終死に作る、拂衣の可きに如かず、歸田里、彭澤令を稱めて歸るなり、冉冉星氣流、亭亭復一紀、歲星十二年にして一週す、是を一紀又一終と謂ふ、亭亭は遠逝の意に見ゆ、世路廓悠悠、廓は廓曠なり、楊朱は戰國の時の人、一派の學說を立て、墨子兼愛説と反す、「淮南子」説林訓に、楊子、遠路を見て哭す、其れ以て南し、以て北すべきが爲なり、所以止、南行して可なるや、北行して可なるや、遠路に止まつて以て哭するなり、雖無揮金事、今日の俗語で言へば、成金の豪奢は之れ無しと雖もの意、濁酒一杯は我に於て聊可恃、我に於て、此の濁酒こそ揮金以上の愉快であるなり、上聲四紙の韻、

【大意】嗜昔長飢に苦しむ、耒にては長飢を救ふ能はず、是に於て、百姓を休めて學官と爲る、學官の俸給にても、猶ほ母を養ふ調節を得ず、凍餒が己を纏うて離れざる感あり、而して是の年三十、男兒立つべき年にして立つ能はず、恥づる所多きを感するなり、然りと雖も、介然の分、即ち正義なりと思ふことは盡くせり、是の故に衣を拂うて田里に歸るも、俸祿の盜人とは爲らず、歸田後、歲月は冉冉と流れ、亭亭として復一紀を閱す、世路は曠廓にして悠悠たり、南行せんや、北行せんや、楊朱が哭して岐路に止まる所以、我は我相當の金を以て、濁酒を求め、聊か之を恃とすべし、

羲農去我久。舉世少復眞。

羲農我を去ること久し、舉世眞に復ること少なり、

汲汲魯中叟。彌縫使其淳。

汲汲たり魯中の叟、彌縫其れをして淳ならしむ、

鳳鳥雖不至禮樂暫得新

鳳鳥至らずと雖も、禮樂暫く新なるを得たり、

洙泗輟微響漂流逮狂秦

洙泗微響輟み、漂流狂秦に逮ぶ、

詩書復何罪一朝成灰塵

詩書復何の罪かある、一朝に灰塵と成る、

區區諸老翁爲事誠殷勤

區區諸老翁、事を爲す誠に殷勤、

如何絕世下六籍無一親

如何ぞ絶世の下、六籍一親無き、

終日馳車走不見所問津

終日車を馳せて走り、津を問ふ所を見ず、

若復不快飲空負頭上巾

若復快飲せずんば、空しく負かん頭上の巾、

但恨多謬誤君當恕醉人

但恨む謬誤多きを、君當に醉人を恕すべし、

【注解】 義は伏羲なり、農は神農なり、極めて上古を言ふ、堯舜の聖も含むと知るべし、今の世は上古聖人を去る遠し、人欲の私増長して、復舊即ち道の自然に因つて動く人は少し、汲汲は速ならんと欲するの意、急急と略似たり、魯中叟は孔子、孔子は魯の昌平郷の人なり、彌蘧は「左傳」に彌蘧其闕とあり、孔子は上古の聖人に反して新宗を開きし人にあらず、上古の道の闕けし所を彌蘧して以て我が一生の事業と爲したるなり、鳳鳥雖不至、孔子の人格は鳳鳥の至る徳あり、如何せん世路濁濁、是を以て鳳鳥來儀せざるなり、而かも禮樂は暫時、孔子が東奔西走の間、四十五年、其の新なるを得たり、洙泗、洙水と泗水とは、共に魯地を流るる水、以て孔子の道に喩ふ、微響、洙泗の水音止みたるは、即ち孔子の道亦輟むなり、而かも他の惡水濁流して以て、狂秦時代に流ぶ、詩書、灰塵、秦の始皇は諸儒を坑にし、羣籍を焚棄し、大殘酷の業を爲せり、區區は二義あり、一ツマラヌ小事と解するが一、

得志の願と注するが一、今は即ち得志の願、諸老翁は漢初の學者伏毛や孔郷の諸人を指すならん、爲事誠殷勤、學事を爲すこと丁寧殷勤なり、如何絶世下、絶世下は今日を謂ふなり、六籍無一親、詩も書も雖も六經總て一人として之を親む者無し、晉陽秋云ふ、六籍存すと雖も皆聖人の難説と、放談者流の言ふ所、多く此の如し、淵明より見れば、無頼の狂漢ならずして何ぞ、終日馳車走、不見所問津、今の世、車を東西南北に馳走せしむるも、曾て孔子の道を實行する者は無しとの意、字義に就いては「論語」を見よ、若復不快飲、空負頭上巾、淵明が戴く所の頭巾は酒を漉す道具、或は頭巾と爲り、或は漉酒器となる、若し酒を飲まざるときは、漉酒巾の用は無し、無用の物とすれば負くものにあらずして何ぞ、但恨多謬誤、君當恕醉人、酒を飲む者は多く支離滅裂の事を言ふ、人が言ふにあらずして、酒が言ふなり、醜彼の別無くドウカ醉人が謬語を恕して美れ玉へとなり、二句十字真に悲痛の言なり、平聲十一眞、鍾伯敬曰く、莊子一部の書、聖賢を嘲諷す、此の立言の微妙なるに如かず、覺ゆ孔子一生の述作周流、只是れ彌蘧使淳なるを、彌蘧の二字、他人固より敢て下さず、亦下す能はず、沈歸愚曰く、彌蘧の二字、孔子が一生を該盡す、爲事誠殷勤の五字、漢儒が圓詰を遺ひ盡す、末段忽ち接して飲酒に入る、此は是れ古人神化の處、温謙山曰く、彌は補なり、蘧は合なり、二字固に聖人參贊の妙を盡す、然れども予謂ふ、著眼尤も一使字に在り、孔子にあらずんば彌蘧の手段なく、孔子にあらずんば淳ならしむる能はず、使字無限の功用在る有り、淵明、聖賢中の人たり、故に能く之を遺ふ、親切味ひあり、是の詩を讀む者、何ぞ必ずしも飲酒の觀を爲さんや、

【大意】 義農は我生を去ること久し、世俗亦一人として真に復る者少し、教を説いて汲汲たる魯中の叟、世俗をして真に復らしめんと勞せり、鳳鳥の如き靈鳥は至らずと雖も、禮樂の正しき、暫時は其の新なるを得たり、其の孔子の道も漸く響を輟め、既にして狂秦の世に及ぶ、秦は詩書を盡く火中に投じ、詩書盡く灰と爲る、特志の諸先生、秦火の餘を探索して、道の爲めに殷勤を竭くす、然るに如何ぞや今日の世俗、六籍と一親せず、試に終日車を馳せて走り看よ、津を問ふ所の人有ること無

し、若復快飲せざる時は、何の爲めに頭上に澆酒巾を戴くや、酒を飲み但恨むらくは、言ふ所謬誤の多きを、之を聞く人は請ふ醉人の言として恕して呉れ玉へ、

止酒

酒を止む

居止次城邑逍遙自閑止

居止城邑に次す、逍遙自ら閑止

坐止高蔭下歩止華門裏

坐して高蔭の下に止まり、歩して華門の裏に止まる

好味止園葵大懼止稚子

好味園葵に止まり、大懼稚子に止まる

平生不止酒止酒情無喜

平生酒を止めず、酒を止むれば情喜びなし

暮止不能寢晨止不能起

暮止寝ぬる能はず、晨止起くる能はず

日日欲止之營衛止不理

日日之を止めんと欲す、營衛止む理あらず

徒知止不樂未知止利己

徒に止の樂まざるを知る、未だ知らず止の己を利するを

始覺止爲善今朝眞止矣

始めて止の善たるを覺ゆ、今朝眞に止む

從此一止去將止扶桑淡

此より一に止め去る、將に扶桑の淡に止まらんとす

清顔止宿容奚止千萬祀

清顔宿容止まる、奚ぞ千萬祀に止まらん

【注解】止酒、字の如く飲酒を中止する、居止は單に居るなり、次は「ヤドル」、再宿を信と爲し、信を過ぐるを次と爲す、「周禮」に處るなりと注す、城邑に處るとなり、逍遙は城邑の中を乙地甲地と遊行すること、閑止、而かも身は閑止なり、止高蔭下、大樹の影に止息すと、華門は貧者の家の門、廣厦華堂は大樹の影に及がざるなり、朱門紫闥は華門の裏に止まるに及がざるなり、園葵、葵は齊にて「モリ」の類、園葵食ふべし、又、日葵、蜀葵、秋葵は皆葵の名、俗に「アヒレ」なり、五鼎方丈の味、我が園葵には及がずとなり、大懼止稚子、稚子の遊戯言語、人の意表に出づ、懼言ふべからず、商歌趙舞も之に及がざるなり、以上、止まる所に止まるなり、然るに止まる所に止まらざるは唯酒あるのみ、酒の止まることを知らざることは、古今東西貴賤貧富皆一様の看あり、暮にも晨にも、酒にあらずんば情の喜び無し、而かも其の止むべきの善なるを知る、日日、之を思ふも能はず、而かも又思ふ止まらなければならぬ道理を發見する能はず、是の故に止まると云ふの利を己に得る能はざるを信す、既にして又思ふ、止を上善と爲すと、飲酒は決して己を利する者にあらざるを知る、是に於てか斷斷乎として今朝より眞に廢止す、止むと決心するからには必ず止む、扶桑は理想の木、「山海經」に、黒齒の北を鳴谷と曰ふ、扶木あり、九日下枝に居り、一日上枝に居る、皆鳥を戴く、淡は音「シ」、謂「メギハ」、水涯なり、昔は酒の爲め昏昏、今は之を廢止したるが爲め心事明たりとの意、清顔止宿容、中毒せざる裏に之を廢止す、清顔依然として宿容なり、中毒後なりせば何の證も無し、奚止千萬祀、永久に廢止するのみならず、廢止したるに依つて、非常に自分に徳あるを言ふなり、二十箇の止字を運用して、車輪の縱横に奔馳するが如し、飲酒者の心事を顯破して巧妙を極む、遊戯の作にあらす、眞實際の作、千古不朽の文字なり、尋常の飲酒者も敬讀すべし、又不飲酒者も敬讀すべきなり、溫謙山曰く、止の義たる甚だ大、人能く酒に關つて安んずるときは止まる所を得、圓明能く飲み能く止む、物に役せられず、道を知る者にあらずんば能はず、上聲四紙の韻、

【大意】わが身は城邑に處る、逍遙して身は閑る閑なり、坐するには高蔭の下、歩するには華門の裏、食ふには園葵、懼ぶ者は稚子、以上六つのもの其の止るに易し、然るに平生酒を止むるに難きは、何ぞ、酒を止むるときは情に於て不満足なればなり、暮に入れば飲念湧く故に寢る能はず、晨も亦然

り、日に之を止めんと欲するも、亦止めなければならぬ理由を發見せず、徒らに慾に驅られて止めて樂しまざるを知るも、止めて後己を利する徳あるを知らず、既にして止を以て善しと爲すことを覺る、今朝は眞に止む、扶桑の淡の廣きにまで止まんと欲す、猶ほ清顔の在るあり、中毒せざるうちに止むるに如かず、奚ぞ止千萬祀のみならん、

述酒

酒を述ぶ

儀狄造杜康潤色之

儀狄造り、杜康、之を潤色す

重離照南陸鳴鳥聲相聞

重離南陸を照し、鳴鳥聲相聞ゆ、

秋草雖未黃融風久已分

秋草未だ黄ますと雖も、融風久しく已に分る、

素礫晶脩渚南嶽無餘雲

素礫脩渚晶かなるも、南嶽餘雲無し、

豫章抗高門重華固靈墳

豫章高門に抗し、重華靈墳固し、

流淚抱中歎傾耳聽司晨

涙を流して中歎を抱き、耳を傾けて司晨を聴く、

神州獻嘉粟西靈爲我馴

神州嘉粟を獻じ、西靈我が爲めに馴る、

諸梁董師旅平勝喪其身

諸梁師旅を董し、平勝其の身を喪ふ、

山陽歸下國成名猶不動

山陽下國に歸り、成名猶動めず、

卜生善斯牧安樂不爲君

卜生斯牧を善とす、安樂君が爲ならず、

平王去舊京峽中納遺薰

平王舊京を去り、峽中遺薰を納る、

雙陵甫云育三趾顯奇文

雙陵甫めて云に育し、三趾奇文を顯す、

王子愛清吹日中翔河汾

王子清吹を愛し、日中河汾に翔る、

朱公練九齒閒居離世紛

朱公九齒を練り、閒居世紛を離る、

峨峨西嶺内偃息常所親

峨峨たる西嶺の内、偃息常に親む所

天容自永固彭殤非等倫

天容自ら永固、彭殤等倫にあらず、

【注解】述酒は酒と直接の關係なし、國事に就いて懼りに此の題目を設く、馮東顧曰く、晉の元熙二年六月、劉裕、恭帝を廢して零陵王と爲し、明年、毒酒一罍を以て裴偉に授け、王を飲せしむ、偉自ら飲んで卒す、繼いで又兵人をして垣を踰え藥を進めしむ、王肯て飲まず、遂に之を掩殺す、此の時爲に作る所、故に述酒を以て篇に名く、詩辭盡く體語、故に觀る者省せず、劉幹子蒼、山陽下國の一語を以て疑ふ、是れ義熙後感ありて賦するを、予反覆詳考して後知る零陵王の哀詩なるを、因つて其の曉むべき者を疏し、以て此の老(備明)が朱白の忠憤を發す、是れ眞に近きものならん、重離は、太陽の異名、照南陸、正面の文字は、日が南方を照すなり、側面の意は晉室の威光が南陸を照破せし時を言ふ、晉の祖司馬氏は重黎氏が後なればなり、東晉は都を南朝に置く、鳴鳥聲相聞、正面は衆鳥が白日に諧語と鳴く、側面は晉の民、晉の政治を謳歌するなり、秋草雖未黃、未の字、近の字に改め見よ、秋草は黄

むに近しと雖の意、晉室は衰勢に近しと雖の意、近と言はずして未と言ふ所、融風の句に應ずればなり、融風久已分、秋草はマコ。黄色を呈せないと云ふ者も有るが、然らず然らず、融風即ち晉室を覆滅する眞の風は早已に分離して居るにあらすやとの意、東晉は、元帝、明帝以後、安帝、恭帝に至るまで、眞の融風天下に満ちし時は無かりしなり、案禮は白き小石なり、晶は白色の光、俗語は長江、長江は江左即ち南朝なり、低處の俗語は融風此の如き實すべき美観は存するが、高處の南嶽を望見すれば俗語全く影なし、晉室未だ亡びずと雖も、已に氣數の盡きんと欲するを言ふ、豫章抗高門、重華固靈境、湯東朝曰く、義熙元年、劉裕、匡復の功を以て豫章郡公に封ぜらる、重華は恭帝、宋に禪するを謂ふ、吳師道曰く、愚謂ふ、恭帝、零陵王に封ぜらる、舜が零陵九疑に在り、故に云爾、裕實は篡弒なり、陶公豈肯て禪を以て之を目せんや、今日く、豫章は湯説の如し、重華は吳説を以て正しとす、湯東朝説を信する者は皆是れ誤れるなり、乃ち知る重華は舜の名、靈境、九疑山に在り、流淚抱中歎、傾耳聽司農、謝明が孤忠、彼を思ひ、此を思ひ、流淚して歎を抱き、耿耿として天明に達す、司農は蘇の異名とす、神州獻嘉粟、西靈爲我調、東朝曰く、義熙十四年、粟饑の人、嘉禾を獻す、裕以て帝に獻す、帝以て裕に歸す、西靈は或は四靈の誤ならんと、裕が禪を受けし文に四靈あり、謙謙重國族、事勝喪其身、諸侯は葉公、華勝は白公、白公は葉公の爲め殺さる、白公は篡弒の野心あり、是を以て葉公の爲め殺さる、楚國遂に安泰なり、晉の世、誰を葉公と爲し、誰を白公と爲すやば明白ならず、山陽歸下國、魏の曹丕、漢の獻帝を降して山陽公と爲し、卒に之を試す、成名驗不動、古の人主終を善くせざる者、靈若くは厲の健有るなり、此れ正しく零陵先に廢し、而して後歎するを指す、驗不動とは哀愁の詞なり(東朝の説)と、ト生善斯牧、東朝曰く、魏の文侯、ト子夏に師事す、此れ之を借りて以て魏の文帝を言ふなり、(文帝は曹丕なり)安樂不爲君、安樂公は蜀の劉禪なり、王既に漢を篡ふ、安樂公、君たるを得ず、黃文煥曰く、此「莊子」の牧たらんか、君たらんかの語を用ふ、天子と爲つて自ら其の責を保たず、即ち人の牧と爲るを求むるも、亦何ぞ得べけんや、自らトす此の生は寧ろ牧を以て安樂と爲ん、君と爲るを願はざるなり、牧は牧民官、一縣の公吏に過ぎず、一縣の公吏と爲るも、一國の王と爲るを願はずとなり、平王去曹京、映中納遺書、周の平王は幽王の後、王位に登るも、西都は或に遷るを以て都を洛邑に遷す、之を周の東遷と言ふ、而して王室の衰微愈々甚し、以て東晉の王室振はざるに喩ふ、劉裕が恭帝を廢して之を秣陵に遷す、所謂曹京を去るなり、映中は洛陽ならん、後に陶淵明の説あり、雙説は陶淵明の説を見よ、市云育の三字、三趾顯奇文、皆陶淵明の説を可とす、王子受

清吹、王子晉は仙を學び、好んで笙を吹く、日中朔河汾、日中は午時なり、翔は飛翔、鶴に乗つて午時に河汾の空を翔る、河汾は晉の地なり、朱公は陶朱公、陶朱公は越の范蠡が後身なりとの説あるも、信じ難し、續九曲は仙丹を鍊るなり、或は九曲は九節、九十なり、圓明は唯特に此の人に寄託して、世を遷るる事を言ふのみ、噴噴は山の高き貌、西嶺は、東朝曰く、當に恭帝の禪るる所を指すなるべし、帝年三十六にして就せらる、此但其の禪の固くして善は天なるを言ふ、置いて必ずしも論ぜず、奈何とすべき無きの辭なり、夫れ圓明の歸田、本、易代を避くるが爲めなり、而かも嘗て之を正言せず、此に至りて、則ち主就せられ國亡ぶ、其の痛疾深し、嘗て言はずと雖も、亦言はざるべからず、故に是の若きか、天啓自水固、彭壽非等倫、西嶺は永く我が君の魂を護する處、是に於てか、天啓は千秋萬歳なり、彭祖は、虞夏を經て商に至り、年七百歳と稱せらる、壽は天なり、未だ成人せずして死す、壽命が長い短いのと論する尋常の論は、我が今言ふ所と何等の關係なしとなり、此の首、大意何に在るや明白ならず、故に注者議一定せず、陶淵曰く、重華以下は晉室南渡、而して王氣遂に盡くるを敘し、抱中歎(九句)以下は再三反覆し、以て之を痛む、神州嘉粟、我調は此「穆天子傳」西王母諸國獻禾の事を用ひ、西晉全盛の時、五胡未だ亂れず、四夷來服するも、今は且る能はざる事を謂ひ、次ぎは則ち華勝、楚を亂して、沈諸侯、之を復す、東晉の初、王敦蘇峻の亂、即ち陶侃温嶠の功、國猶ほ人ありしも、今は見る能はざるを言ひ、次ぎは則ち山陽、魏に禪るも猶ほ令終を獲、益金剪除を事とせず、而して今は見る能はざるを言ひ、次ぎは則ち萬葉を以て匹夫たらんと求むるも得ず、此牧人君たるを願はざる所以、平王以下は、晉、江左に遷りしより、中原、鮮卑に没し、劉裕、姚泓を平げ、晉の五陵を修復し、守衛を置く、國恥市めて雪ぎ、而かも篡弒已に成る、黨は蠶蠶、史記五帝本紀、羣衆に作り、周本紀、蕭育に作る、羣衆蠶蠶び通す、映は蓋し知耶、成王鼎を知耶に定む、今の洛陽、映知通するなり、晉の五陵、洛陽に在り、敬て五陵と顯言せず、故に雙説と曰ふ、蓋し亦暗の二を以て其の辭を亂る、其の實若し宜、景文・三王を除きて數へずば則ち武・惠二帝正しく雙陵のみ、三王乃ち曹魏禪を受くるの辭、左太冲、魏都賦、其、黑匪、鳥、三趾而來儀、注に曰く、延康元年三趾の鳥、郡國に見ばる、裕、禪を受くる時、太史令亦符瑞天文數十事を陳す、王子晉が事は、位を棄て仙を學び、世世天家に生るる莫れとの旨を言ひ、朱公以下は、亂を避け、還華の心を言ひ、天啓以下は、「楚辭」遠遊の旨、富貴は長生に如かざるの意を敘す、十一頁十二文は、古通韻なり、



【大意】重暉が南陸を照すに當るや、晴天を喜ぶは鳥の性、是を以て皆啾啾として鳴く、秋艸は未だ黄色ならざるに、融風は久しく已に分る、外形と内容とは已に判然たり、低處の素礫は猶ほ光ありと雖も、高處の南嶽は已に雲無し、是の時に當りて、豫章は高門に抗し、重華は靈墳依然として九疑に在り、彼を思ひ、此を念へば、流涙して中歎を抱く、歎するが故に夜寢ぬる能はず、耳を傾けて曉雞を聞くに至る、時しも神州に嘉粟を獻する者あり、而して西靈は我が爲めに馴る、而して諸梁は師旅即ち軍勢を董率して羊勝を殺せり、而して山陽公は下國に歸り、他の爲めに弑せらる、成名猶ほ不勳、卜生は斯牧を善にするも、安樂は君たらず、平王は舊京を去つて洛邑に遷る、而して峽中には遺薰を納れ、雙陵即ち晉の五陵は洛陽に在り、天趾には奇文を顯し、王子晉は吹笙を愛し、鶴に乗つて日中に河汾を翔り、朱公は九齒を練り、今、我は閑居して全く世紛を離れ、眼前に在るものは、峩峩たる西嶺、偃息しながら觀しむ所は、是の西嶺なり、天子の容は自ら永固なり、彭殤の如きは晉の天子の永固には等倫ならず、

責子

子を責む

白髮被兩鬢肌膚不復實

白髮兩鬢に被り、肌膚復實ならず、

雖有五男兒總不好紙筆

五男兒有りと雖も、總て紙筆を好まず、

阿舒已二八懶惰故無匹

阿舒已に二八、懶惰故に匹無し、

阿宣行志學而不愛文術

阿宣行くゆく志學、而かも文術を愛せず、

雍端年十三不識六與七

雍端年十三、六と七とを識らず、

通子垂九齡但覓梨與栗

通子九齡に垂なんとす、但梨と栗とを覓む、

天運苟如此且進杯中物

天運苟も此の如し、且く杯中の物を進めん、

【注解】責子、子を教誨する、五子の名舒、宣、侯、端、子、通、共、に父たる淵明は其の老に逼るを言ふ、後を顧とする五男兒は總て不肖なり、二八は十六、志學は十五、行とあれば宣侯は十四なり、雍と端は共に十三、孺か然らざれば一は妾が子なり、一妻が一年二度産を爲さず、淵明は妾が無きなり、乃ち雙生兒たり、而かも此の兩兒、六と七との區別を知らず、第五子の通侯は六齡、梨と栗とを覓むるを知つて、其の餘を知らず、嗚乎生むことは生んだり、天運にして如何ともするなし、我は酒を飲まんのみ、今問はんとす、酒を飲む親の罪、遂に子に報いしものにあらずや、罪は親に在り、子に在らず、入聲四質の韻、淵明既に問を憂ふ、憂ふるも以て如何とも爲すべからず、又子を受ふ、憂ふるも亦以て如何とも爲すべからず、五柳を種みて以て五子の秀出を期待す、父たる其の志のみ、育不肖は天運に一任せんのみ、

【大意】白髮は兩鬢に蓬蓬、肌膚は艶を失ひ、五人の子あるも、總て不肖、信に是れ天運なりと覺らば、悔恨共に無し、唯酒を飲むに如かず、

有會而作并序

會ありて作る并に序

舊穀既沒。新穀未登。頗爲老農。而值年災。日月尙悠。爲患未已。登歲之功。既不可希。朝夕所資。煙火裁通。旬日已來。始念飢乏。歲云夕矣。慨然永懷。今我不述。後生何聞哉。

舊穀既に沒し、新穀未だ登らず、頗きて老農と爲る、而して年災に値ふ、日月尙悠なり、患を爲す未だ已まず、登歳の功、既に希ふべからず、朝夕資する所、煙火裁に通ず、旬日已來、始めて飢乏を念ゆ、歳云に夕れぬ、慨然永く懷ふ、今我述べずんば、後生何を聞かんや、

弱年逢家乏。老至夏長飢。

弱年家乏に逢ひ、老至つて夏に長飢、

菽麥實所羨。孰肯慕甘肥。

菽麥實に羨む所、孰か肯て甘肥を慕ふ、

怒如亞九飯。當暑厭寒衣。

怒として九飯を亞ぐが如し、暑に當つて寒衣を厭ふ、

歲月將欲暮。如何辛苦悲。

歲月將に暮れんと欲す、如何ぞ辛苦悲する、

常善粥者心。深念蒙袂非。

常に粥者の心を善とす、深く蒙袂の非を念ふ、

嗟來何足吝。徒沒空自遺。

嗟來何ぞ吝むに足らん、徒らに沒し空しく自ら遺る、

斯濫豈彼志。固窮夙所歸。

斯に濫す豈彼の志ならん、固窮夙に歸する所、

餒也。已矣夫。在昔余多師。

餓や已矣夫、在昔余師多し、

**【注解】**有會、心に會する所ありて作る、頗は偏也、不正なり、老農と爲つて、田園生活久しきも、災年に會する事多く、辛うじて一家を支ふるに過ぎず、登歲は即ち豊年、豊年は望むべくもあらず、煙火を裁通すれば満足なり、然るに旬日來、煙火すら擧ぐるに至らず、殆んど飢乏に堪へず、而かも歲暮に會ふ、此の事、豈言ふこと無からんや、弱年は少年、家乏は一家の貧乏、老境愈々飢う、菽と麥とが饑念に堪へず、夏の甘き、暑の肥えたる、そんなことは問ふ所にあらず、怒如亞九飯、「毛詩」に、怒如調飢とあり、「說苑」に曰く、子思、甯に居る、三句に九たび食に遇ふ、問明が意、吾が飢うるは恰かも子思が飢ふたと同じとなり、當暑厭寒衣、衣服は一領、夏も冬も同一なり、此の如くにして歲暮に至る、粥者は粥者と同じ、夏也、「禮」に田里不粥とあり、夏者の心を善しと爲すなり、深念蒙袂非、「禮記」に、蒙袂袂飢うる時、絺屨實然と、徒沒空自遺、謝靈運が故事、謝靈運先生は齊の隱士、貧甚し、及して衣、體を蔽はず、後人以て貧士の喻と爲す、斯濫豈彼志、貧すればとて濫するは彼が志にあらず、固窮は始終を一貫しての我が所歸なり、餒也、飢餓と爲るは亦已むを得ず、余多師、固窮節を守るを以て師と爲すは在昔よりなり、今日始めて師と爲すにはあらず、平聲四支の韻、陳群明曰く、麥句、韻中に於て老に到る、旬日用意轉合、故に自にして直ならず、淺年の讀無し、

**【題義】**心中に何か會得する所ありて作ると云ふのが、有會而作の意なり、是の作年は未詳なるも、時に從つて之を案すれば、五十以後の作たるは明白なり、

**【大意】**舊穀消費し、新穀は未だ登らず、老農と爲りて、此の如き年災に値ふ、痛嗟の極なり、日月は悠久なり、前途を思念して、患何ぞ已まん、豊年は望むべくもあらず、朝夕の煙を揚ぐるを得ば足りぬ、而かも旬日來、飢乏の念に堪へず、況や歲も將に暮れんとす、慨然として永懷す、今我が此の事を敘べずんば、子孫は此の凶年の苦を知る能はず、我は弱年より富を知らず、老年に及ぶまで貧

乏なり、我輩は尋常の食物なり、貴人の食物にはあらず、此の尋常の食物を我は實に羨む、甘も肥も問ふに違あらざるなり、昔し子思が三句に九食したる事を聞きたるが、我も是と殆んど同じ、食物已に然り、衣服の如きも寒暑一衣のみ、然かも我は古の朝者の心を善と爲すものなり、蒙袂や黔婁の如き、飢乏にも、窮寒にも、其の志を改めざりしは、我の敬慕する所なり、貧にも寒にも濫せざるは、彼等古人の志なり、固窮は我も夙に歸する所、餓也は已むを得ず、在昔より我の師範と爲る人は多し、

蜡日

蜡日

風雪送餘運無妨時已和

風雪餘運を送る、妨げ無し時已に和す、

梅柳夾門植一條有佳花

梅柳門を夾んで植ゑ、一條佳花あり、

我唱爾言得酒中適何多

我唱ふ爾言ひ得ん、酒中適何ぞ多き、

未能明多少章山有奇歌

未だ多少を明むる能はず、章山奇歌あり、

【注解】蜡日は臘祭の日、伊耆氏始めて蜡を爲す、蜡とは索なり、歳十二月、萬物を合衆して、之を索繋するなり、此の詩の作意、何に在るやは知るべからず、吳雲の『拜經樓詩話』に、述酒篇と同意と爲し、一一、國事に關して附會す、陶明若し知るあらば、果して何と謂ふか、陳群明曰く、梅には多く一枝を用ふ、未だ一條を用ふる者あらず、温謙山曰く、一條の句も亦佳、秋菊佳色と別に

一佳致、平聲五歌の韻、

【大意】年將に暮れんとし、風雪は餘運を送る、餘運を送り去れば自然と時和が至る、梅も柳も所謂時和を含んで來る、梅の如きは一條殊に佳花を著く、我も時和を唱ふるを以て爾も共に之に和せよ、酒中には適意の事多し、適意の多少は其の人にあらずんば知る能はず、章山には奇歌あり、

四時

四時

春水滿四澤夏雲多奇峯

春水四澤に滿ち、夏雲奇峯多し、

秋月揚明暉冬嶺秀孤松

秋月明暉を揚げ、冬嶺孤松秀づ、

【注解】『許彦周詩話』曰く、此頌長庚の時、興つて彭澤集中に入る、思悅上人曰く、此れ顯凱之の神情の時、文に類す、全篇あり、然れども顯詩、首尾類せず、獨り此警絶、劉斯立曰く、當に是れ凱之此を用ひて足して全篇と成すべし、篇中唯此の警策、居然知る可し、或は顯作と雖も、顯明、四句を抽出す、善擇と謂つ可し、

陶淵明集卷三終

【大書】 擬古九首 榮榮窗下蘭 密密堂前柳 初與君別時 不謂行當久 出門萬里客 中道逢嘉友 未言心先醉 不在接杯酒 蘭枯柳亦衰 遂令此言負 多謝諸少年 相知不忠厚 意氣傾人命 離隔復何有

【大書】 擬古九首 榮榮窗下蘭 密密堂前柳 初與君別時 不謂行當久 出門萬里客 中道逢嘉友 未言心先醉 不在接杯酒 蘭枯柳亦衰 遂令此言負 多謝諸少年 相知不忠厚 意氣傾人命 離隔復何有

【大書】 擬古九首 榮榮窗下蘭 密密堂前柳 初與君別時 不謂行當久 出門萬里客 中道逢嘉友 未言心先醉 不在接杯酒 蘭枯柳亦衰 遂令此言負 多謝諸少年 相知不忠厚 意氣傾人命 離隔復何有

陶淵明集卷四

詩五言

擬古九首

榮榮窗下蘭。密密堂前柳。  
初與君別時。不謂行當久。  
出門萬里客。中道逢嘉友。  
未言心先醉。不在接杯酒。  
蘭枯柳亦衰。遂令此言負。  
多謝諸少年。相知不忠厚。  
意氣傾人命。離隔復何有。

擬古九首

榮榮たり窗下の蘭、密密たり堂前の柳、  
初め君と別れし時、謂はざりき行く當に久しかるべしと、  
門を出づれば萬里の客、中道嘉友に逢ふ、  
未だ言はず心先づ酔ふ、杯酒に接するに在らず、  
蘭枯れ柳も亦衰ふ、遂に此の言をして負かしむ、  
多謝す諸少年、相知忠厚ならざらんや、  
意氣人命を傾く、離隔復何か有らん、